

圍棊獨習 第六卷

795.
Su 882i6
W

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

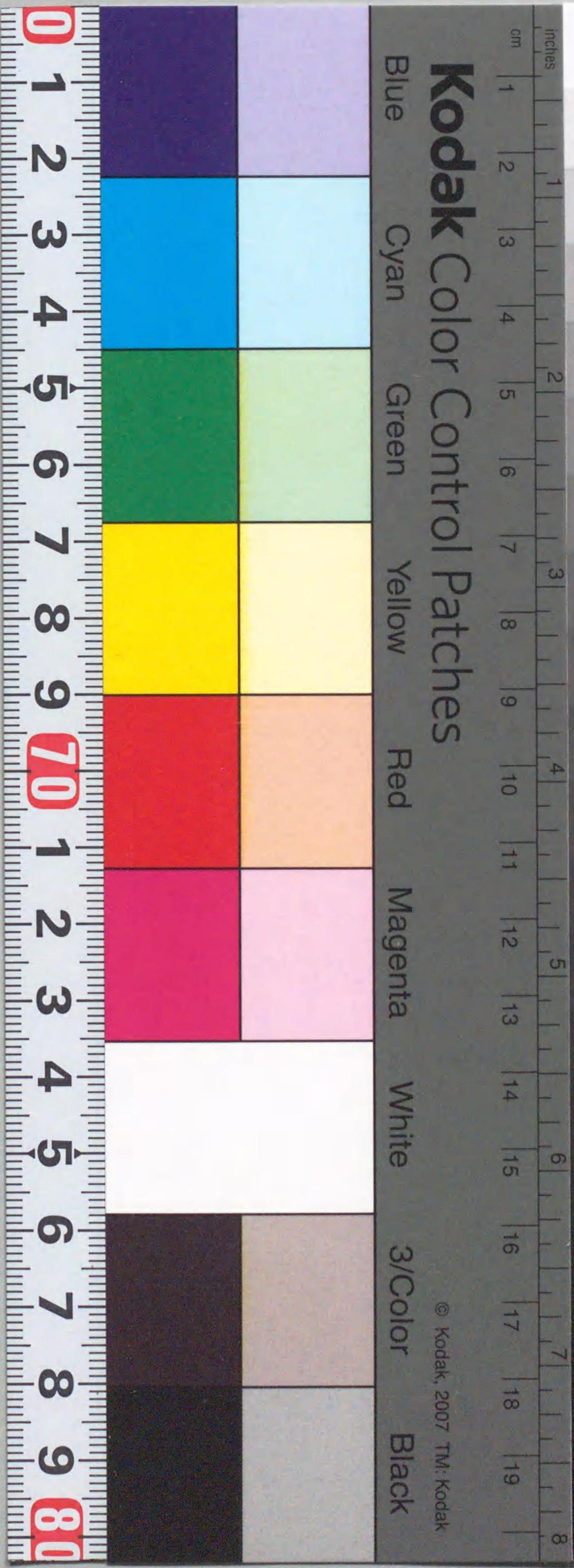


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





寄贈
瀨越憲作
殿



617889

圍碁獨習第六卷目次

手筋篇 (その一)

手筋について……………(一)

手筋練習……………(一五)

十三目の戦

地取篇 (その四)

侵分の研究……………(二八)

死活篇 (その十)

死活の大要……………(五)

——第六卷目次終——

圍碁獨習第六卷

七段鈴木爲次郎

手筋篇 (其の一)

手筋について

局きよくに對たいひまして、次つぎに石いしを盤上ばんじやうに下くださうとするには、第一だいいちに何處どこに打うつのが一番善ばんよい手てであるか即すなはち手筋てすぢは何處どこであるかを考かんがへるのが大切たいせつであります。

手筋てすぢとは簡單かんたんに云いひますと、その碁いの形勢けいせいに適てきする一番善ばんよい手てを云いふので、從したがつて手筋てすぢは形かたちの異なる毎おのに、各々異おのつて來きるのは云いふまでもないのであります。然しかし其中そのちゆうには、共通きゆうつうする型かたちが通とおじて居ゐるものであります。でつまり手筋てすぢの研究けんぐうと云いふて、其型そのかたちの研究けんぐうであつて、之これを其時々そのときときの形勢けいせいに應おう用ようするものが最善さいぜんの方法かたであります。そこで先づ型かたちを研究けんぐうする條件てうけんの第一だいいちとしまして、前まへの基礎篇きそへんの第一だいいちに説明せつめい致いたしました。

(一) 敵の石と我石と接した時、次に打つ手は、行或は尖の形。又敵の石と我石と離れてある時は飛の形に打ちます。

之が手筋を研究するに、第一の大切な条件であります。

二には、石の活力を活用して、之を手筋に應用するので。

(二) 味方の石は連絡を取りて全體の石の力を強くし。反對に敵の石は之を隔て、其力を弱くするか、又は石を重複せしめて、其活力を同志打の姿とする様に打つ事。

此方法を研究するのが、手筋を知る第二の条件であります。

三は局面の形勢によりて、其着手の方針を異にする場合。

(三) 敵の勢力範囲内では、軽く打て、敵の石にあまり接しない方針を取り、之に反して味方の勢力内では、手強く打つて、六ヶ敷碁形に打ち出す方針を取ります。

四には、石を離して打つ時機と、石を接して打つ時機、此二つの關係を適宜に考へて、其活用を誤らぬ事。

(四) 布石の中は石を離して打ち、攻守となつては互に接し、又攻守一段落となりし時機を見て、再び石を離し大勢を占むるのであります。

此四つが着手の方針を定め手筋を知るについての、大切な条件であります。

五には結局同じ形となるにも、その手順を必要とする場合でありまして、

(五) 着手の前後により、善い結果ともなり、又悪い結果ともなる事があります。

扱以上は、種々なる形に共通する型を研究し、時々の形勢に應ずる手筋を知るに大切な要項でありまして、此五つの条件をもと、しなして、或る形に於ける適當な手筋を考へましたならば、比較的容易く其場合の好手を知る事が出来ます。

で手筋を知ると同時に、今一つ大切な事は、その着手すべき場所の變化は如何に歸着するかを考へるのであります。

之れは、前の死活篇での、死、活、攻合、劫の變化を考へると同じであります。實戰では如何な場合でも、死活、攻合、劫などの變化が含まれて居るので、一應は其歸着點を考へて後に着手しなければならぬのであります。

猶大要を揚げて見ますと、一、行、尖、飛の形の違ひで其手筋を各々異にし。二、活力の活用についての手筋。三、碁の形勢によりて、打つ手を異にする場合。四、石の離合の關係による手筋。五、着手の前後の可否。以上の条件によりて手筋を考へ終りましたならば、次には其手についての變化を考へて見るのであります。で手筋を知る要項は以上の通りでありまして、若し此要項を實戰に臨んで、常に研究し練習して行けば、自然其條件に當てはまる手を打つ様になり、隨て其形に於

ける一番善い手筋を知る事が出来るのであります。

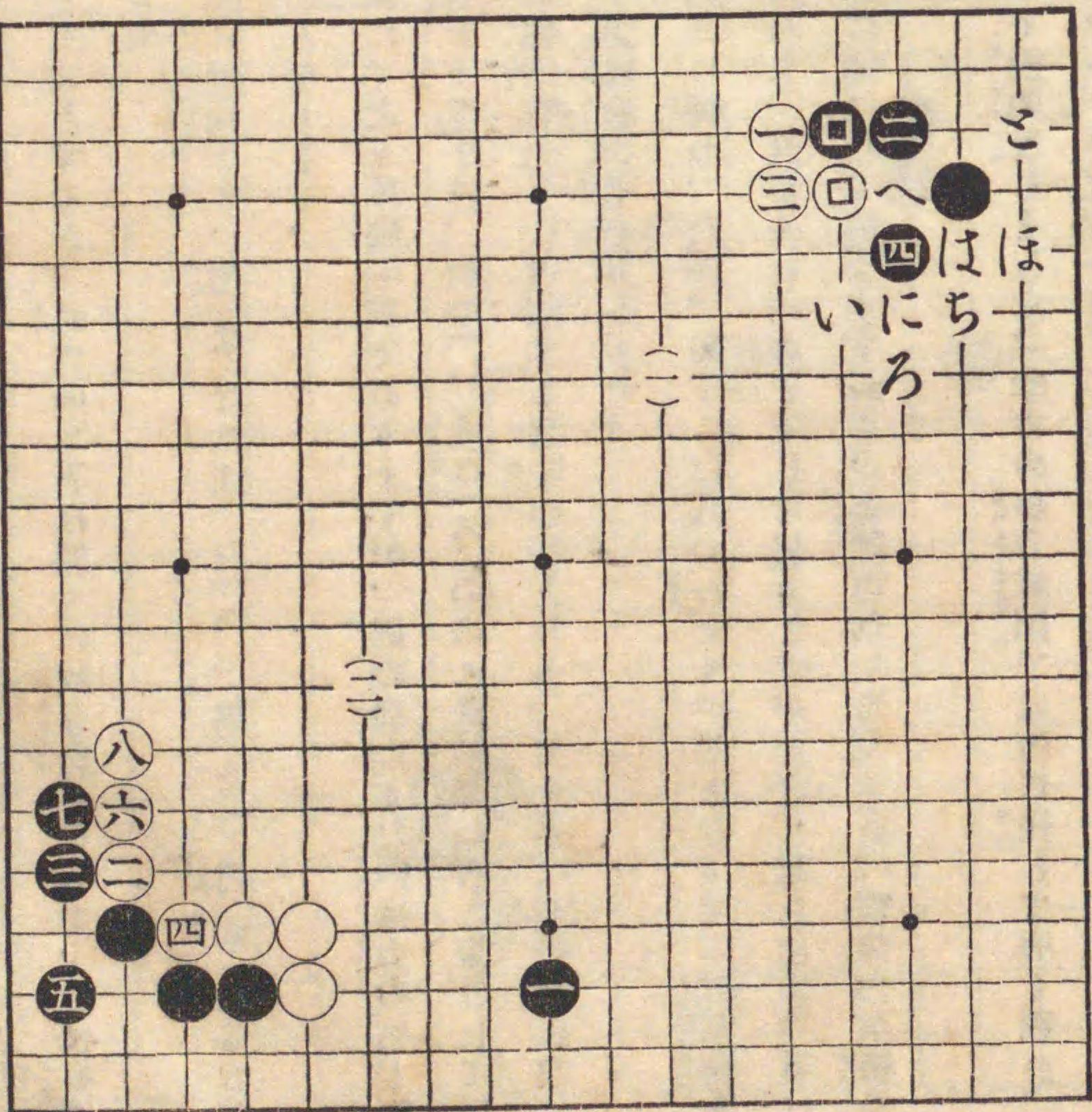
第一圖 先づ初め第一の行、尖、飛の形についての手筋の研究は、前の第二卷に詳しく説明した通りでありますから茲に省略し、次の二の（活力の活用）について、實例を擧げ、詳しく説明する事を致します。

(一)黒○の石と、白○の石と接した時に、次は白の手番として、扱白は如何打つのが一番善い手であるかと云ひますと、白は云ふまでもなく、此接した方面に、白一と約へます。此一の手は、此儘では、まだ白○と連絡した石ではありませんが、然し、黒○も連絡の無い石でありますから、白は斯に打つて決して危険はありません。

次に黒二に引いて、隅の黒石に連絡を取つた時に、白も三と堅く粘ぐのであります。

で此の三の粘は、活力を活用する上には、大切なひと手でありまして、白は斯う打てば六つの活力を持つ強い一つの形となりますが、若し之を黒から三と切られますと、云ふまでも無く、只二つづの活力ある二石となるので、斯うなつては、白は其中の何らかの石を捨てなければならぬ結果となります。其上に其一つの石を逃げ出すにも、非常に困難で多くの犠牲を拂はなければなりませんので、斯うなつては白は大層悪い形となります。黒四の着意は、隅の石と連絡を取りながら、此處を厚くし、且つ白の三目を攻め居る好手であります。

手筋篇第一圖



で黒として同じく此方面を打つとしても、「い」又は「ろ」などに打つ手は、石に連絡なく其活力を分け隔てられる形となつて悪手となります。先づ白「い」に打つた時は、白は四と尖み出します、黒「は」に應ければ、白「に」と打て、黒「い」は効力の無い石となり。又黒「は」を「ろ」に打てば、白「は」の約へとなるので之も黒は石を二つに隔てられて宜しくありませぬ。斯様に黒二石と、白一石と相對して居る形の不利であるのは前に

も屢々説明致しました通りで、簡単に云ひますと假りに同じ四つの活力のある石が相對するとして一方は四の一石に對し二の二石であるとすると、此二の二石は個々に攻合負となつて、遂に全滅する結果となる外はないのであります。

次に「ろ」と打つた時は、白は「は」に附越ます、黒「ほ」なれば、白「へ」、黒「と」、白「ち」となるので、之も黒「ろ」の石は隔てられる形となります。

(二) 處が(二)圖で黒一の石の様に、之も單獨の石であります、圖の様にまだ敵味方の石も無く、空漠として居る廣い場所に先着を下す手は、前の「い」或は「ろ」の様に敵の強い石に接近して居る石と違つて、此手は先づ此方面の要所を先きに占領する意味の手となり、又此手は左の強い白にもそれ程近寄つて居りませぬから、之は好い手であります。

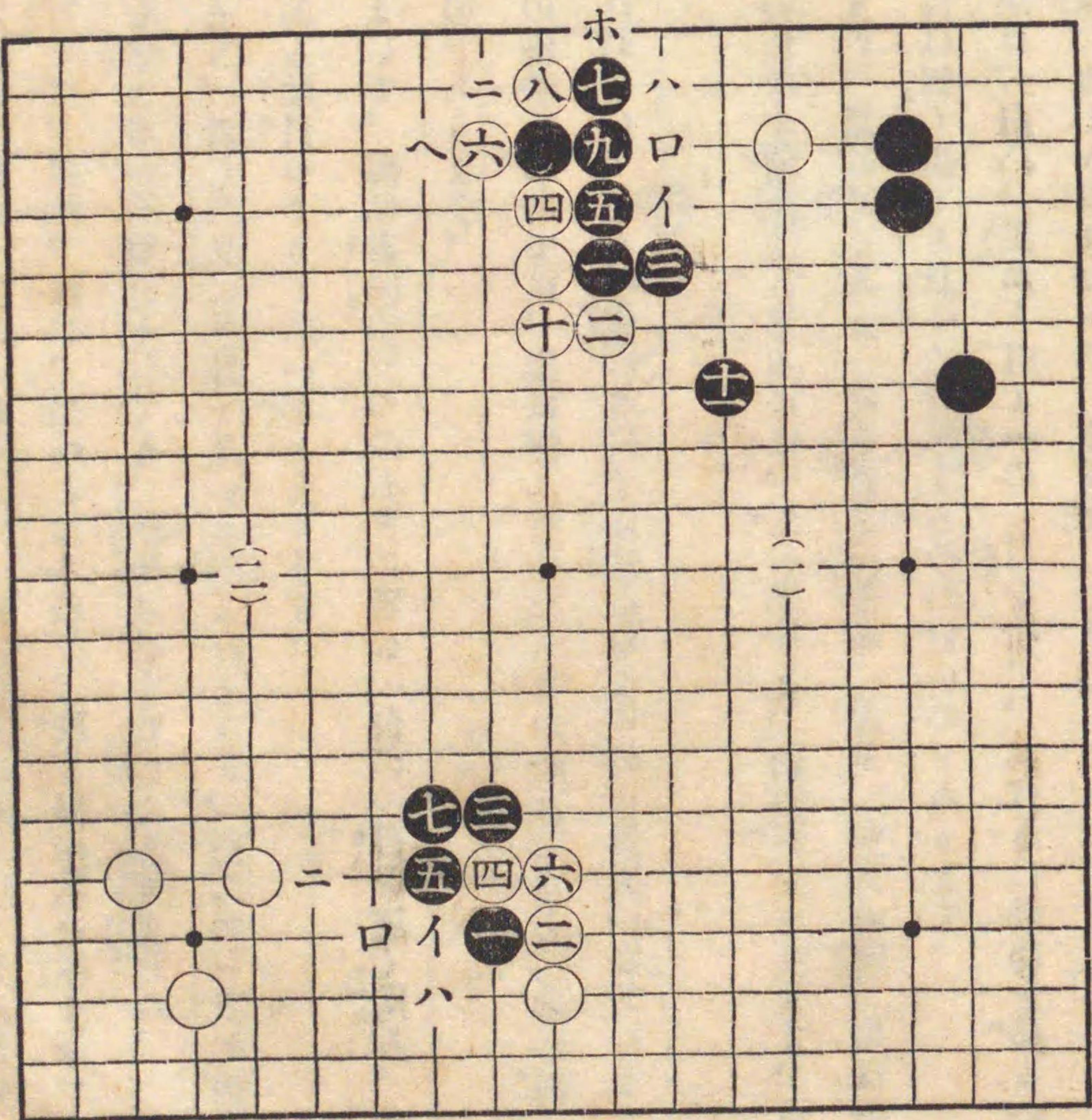
白二の附も同じく好手で、次に黒三に縛ね、白四、以下に白八の行までの形となりて、其形勢を見るに、黒は隅に十目ばかりの地を持ち、且つ一に一着を下して居りますが、之に對し白は、石は皆連絡し、且つ黒を三、七と低い線に這はして居りますから、全體の形から見ると、幾分白が優つて居ります。

第二圖 次には第三の條件として説明致しました「味方の勢力範圍では敵に接して強く戦ひ、敵の勢力範圍では軽く打つ」之れについて、實例を擧げて見ますと。

(一) 黒●、白○丈の形で見ると、黒は四着、白二着で黒優勢の場所であり、且つ其上黒は先手でありますから、此處では強く、黒一に附けて戦ふのが宜いのであります。

次に白二の手で、若し五に縛出しますと、黒は云ふまでもなく、四と切違ひ、白一、黒二と行び、右隅の三目の黒を利用して強く戦へば、必ず黒の善い結果となるのであります。故に白は、圖の様に二と上から縛ね、黒三に行、白四に突當り黒五と約へます。

手筋篇第二圖



白六の手で若し九に切りますと、黒口、白七、黒八と約へます、此時白六に打てば、黒八白二、黒木の打抜となり。又白六を八に打てば、黒六、白二、黒へとなるので、斯く白は低い線を幾つも這ふ様になつては、假令白は此石を活る事が出来たとしても、結果は必ず宜しくありませぬ。白十の粘は、此形の要所であり、若し反對に此點を黒から切られますと、白二の一目を捕虜とせられた上に、白四、六、八方面も駄目づまりで悪い形となります。

で圖の黒十一までの結果となりまして、黒は右隅の三つの石と相應じ、白の一目を廣く圍み、此處に數十目の地を作る事が出来たのであります。

(二)次には、前圖と反對に、白の優勢な場所では、黒は何ふ打つたら宜いかと云ふと、前に述べた様に、軽く打つて、白に壓へられぬ中に、早く中原に逃出す方法を取るのが一番善いのであります。

假令ば圖の様な形で、黒先、白の形勢を消そうとするには、先づ黒一と、白の肩をツキます、白は次に二に押上げて攻勢を取りますが、黒は軽く三と一間に飛び、白四、黒五、白六の時、黒は七に粘ぎ、黒の初めに打つた一の一目は軽く捨てる意味で着手するのが宜いのであります。

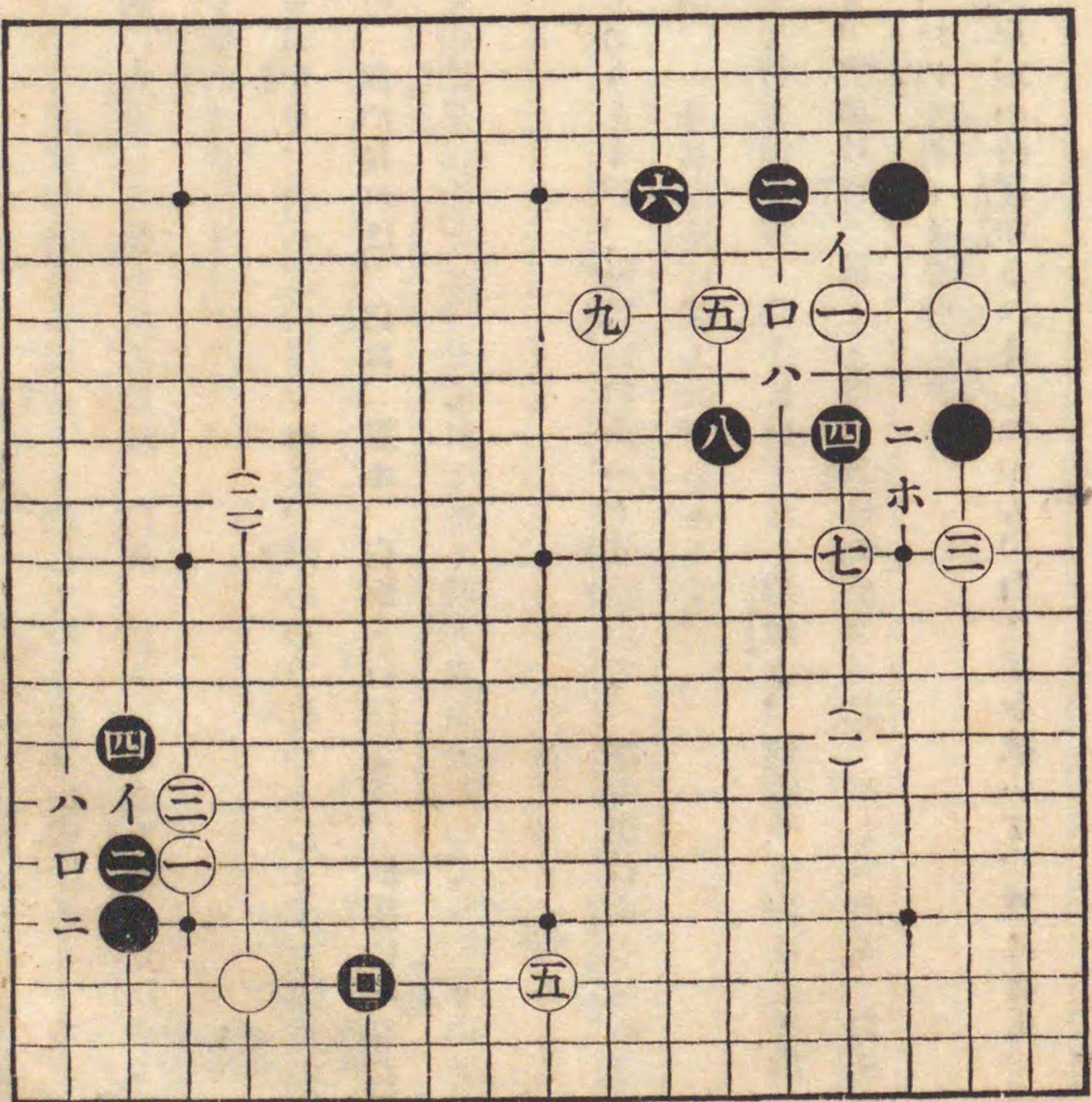
で此時に、若し白イに切れば、黒口、白八、黒二と打て一の一目を捨て、其代りに外勢を張るので、斯うなつて、白は漸く二、三線の地より取れぬ形で、黒は決して悪しくないのであります。

第三圖 次は第四につき

まして、前にも述べました通り、着手が接してある時は、普通は接して打ち、又離れてある時は離れて打つのが原則で之れは多くの場合に共通であります、又其離合の時機も知らなければなりません。時機と申しますと、之れは布石、戦、或は其の時々の形勢如何により、それ／＼異なるので、此關係を知るのが手筋を知る一つの條件とするのであります。

(一)先づ布石について、離

手筋篇第三圖



れて打つ形と、接して打つ形についてを見ますと、圖の様に、白一石、黒二石と離れてある時は、白は次に一と一間に飛出すのが善い手で之は如何なる場合でも決して變りはないのであります。次に同じく黒二と一間飛、白三に一間に夾返して黒を攻め黒四、白五、以下白九までは、互に飛々に打つたので、之迄は白黒共に正しい應答であります。

處が斯様に飛で應けなければならぬ形を、若し二の手でロに、附の形で打つとしますと、ロの附は無論惡手であつて、次に白イに行、黒ハなれば、白ニ、黒ホ、白四と行びます。斯様になつた其形を見ますと、黒は石に連絡無くその結果は石を三分せられて盡く薄弱な石となつてしまふのであります。

(二)之も布石の初めに出来る形でありますが、斯様に白が一と斜走して、隅の黒に迫つた時は、黒は次に飛の形か又は行、尖の形か、一寸其應接に迷ふ處であります。

で飛の形とすると、黒イに打つ手ではありますが、此手は何となく形薄く、何時でも白に二と出られ、黒ロ、白ハ、或はニに切らるゝ、疵が残つて居ります、故に此處では二と接して打ち、白三に打つた時、初めて黒は四と飛を打つたのであります。

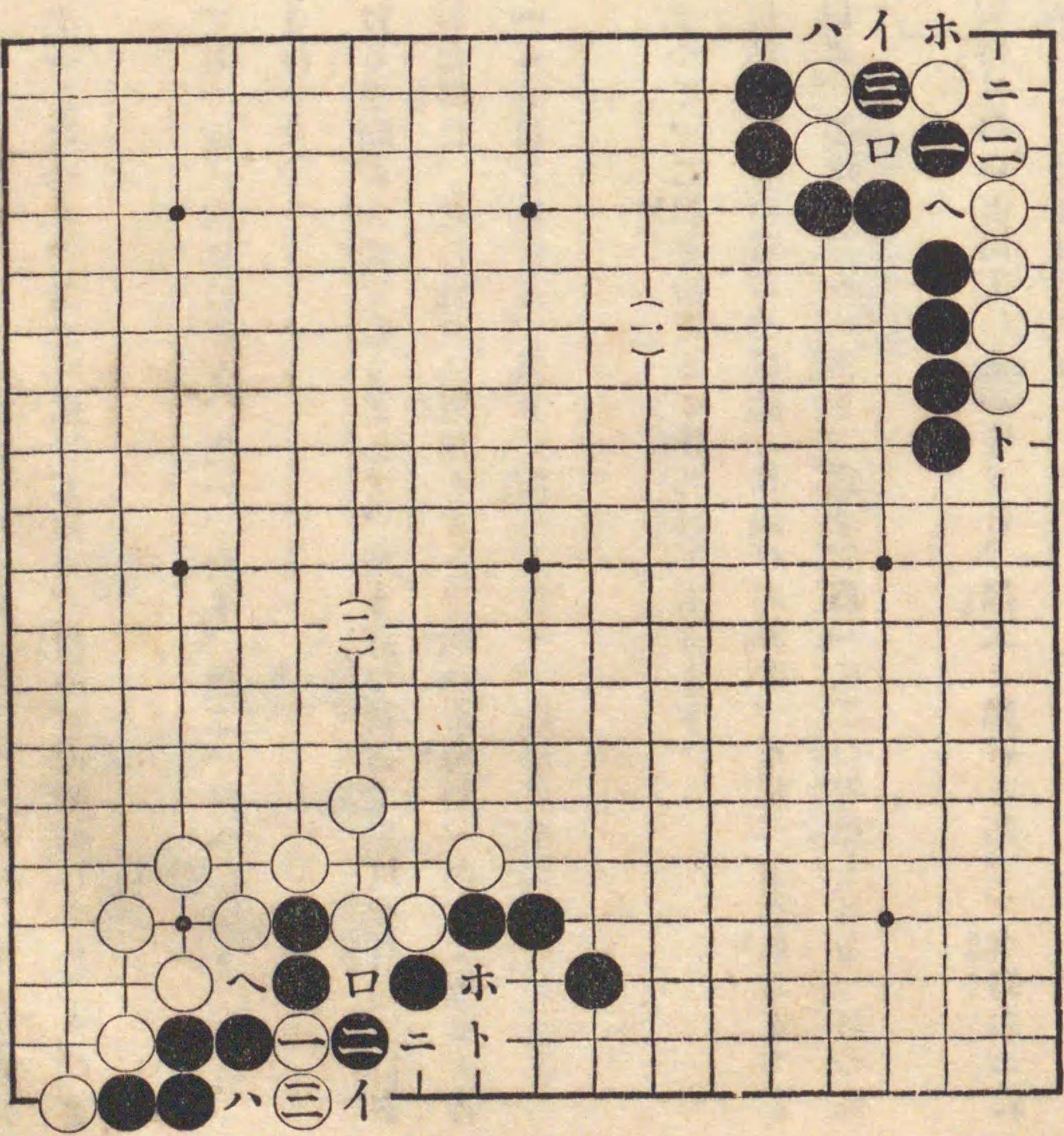
で此一間飛によりて、此方面は其形が一時緩和されましたから、白は手を抜いて、五に打ち、黒の○を攻めたのであります。

第四圖 着手の前後は、

結果に非常な相違を來すのは申すまでも無いのであります。先に打たなければならぬ處を後で打ち、又後にしなければならぬ處を先に打つたりすると、此着手の前後により、活の石を死したり、又勝となる碁を負したりするのは、實戦に往々見る處であります。

(一)一例を舉げて見ますと圖の形では、黒先一に尖附けるのが好い手順であります。斯う打ちますと、白は二に應

手筋篇第四圖



けるの外なく、そこで黒三に緯込、白イ、黒口となつて白の二目を提る事が出来ます。處が之を俗に黒口に打つとしますと、白三、黒一と打つも、白二に應ける迄で、白の石は連絡してしまひます。

又黒一を三の割込から先に打つても、次に白口に取り、黒一、白イ、黒二、白へに切り、黒二、白子となり、黒三目は提られてしまひます。

故に、此形では圖の黒一と尖附ける手順が大切でありまして、斯う打て初めて黒は、白の二目を取る事が出来ます。又黒一に尖附けた時に、若し白口に應けますと、黒八と緯ね、白三、黒二と打ち、白二、黒ホ、白へ、黒イ、白一に五目を粘れば、黒トに約へとなり、此形は全部の白が死となつてしまひます。

(二)白一に附け、黒二、白三に下つて、二目を捨てる手順巧妙であります。

で此時に、黒口に粘れば、白へに切つて、四目の黒は死、又黒口の粘で、イに二目を取りますと白は口と打ち、黒八に二目打抜、白二、黒ホ、白へに當り、黒ト、白一に二目打抜となり、且つ左の黒五目を取る事が出来ます。

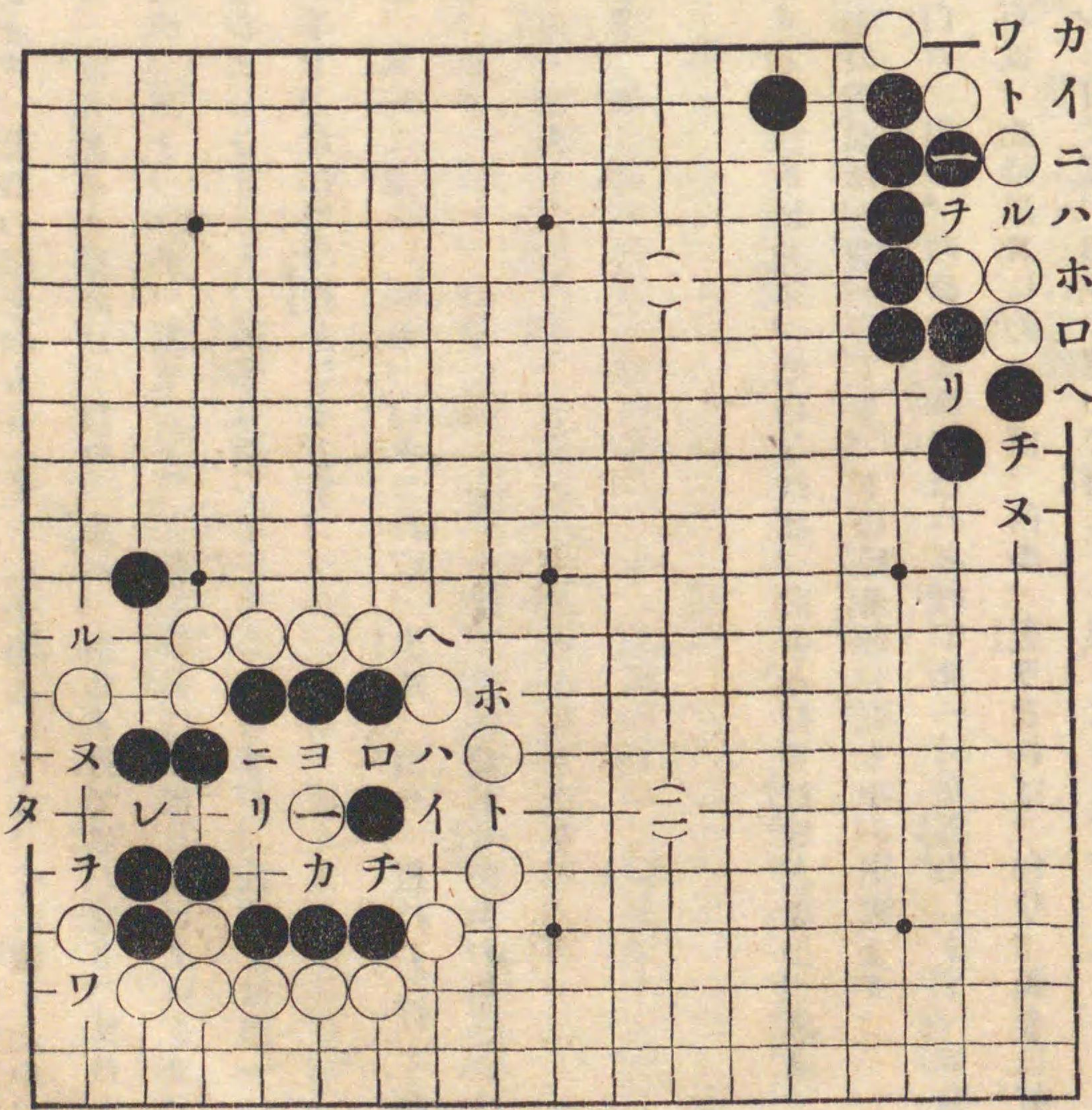
處が此白一、三の手順を誤つて、俗に白口と出てしまひますと、黒二と應ける迄で、其時白二に切るも、黒ホ、白イ、黒一に粘となつて、攻合白負であります。

第五圖 前圖の(一)と

(二)の一の手法、所謂手筋で大に趣のある好手でありますが、然し斯う打つに當りまして、其後の變化は、一通り考へて置かなければなりません。

着手は前に述べた通り、其形を見、次に其形に適する手筋を考へ、そうして變化を或る點までは考へなければならぬので、若し此變化を考へずに、たゞ形ばかりを見て輕卒に着手しますと、時に意外に悪い結果を招く事もあります。

手筋篇第五圖



假りに(一)の様な形があるときします。此石の眼を取らうとするに手筋としては、イに置くとか、又は〇と縛ねたい處であります。若し黒イと置けば、白〇、黒ハ、白ニと打て活となり。又〇と縛ねれば、白ホ、黒一なれば、白へ、黒ト、白チ、黒リ、白又、と打て半分は逃出してしまいます。では、如何打てば、白死となるかと云ひますと、通常は悪い手筋であります。此處では黒一に打つ手、此手が此形では大層善い手で、之れで白死となります。

變化は、此時白トに粘りますと、其時に黒〇に縛ね、白ホなれば、黒ル、白へ、黒ハと打て白死。又白トの粘をヲに打ちますと、黒トに切り、白ワに劫に受ければ、黒は劫を争はずイと行び、白ハ、黒〇、白ニなれば、黒へに粘、白カと二目打抜、黒ホと打て白死となります。

(二)白一は面白い手筋であります。黒は此手の爲に如何應けても、全部の石に二眼を作る手無く死となるのであります。

其變化は、此時に黒イに打ちますと、白〇に縛込、黒ハなれば、白ニと打て打替となし、黒ホ、白へ、黒トなれば、白チに打ち、上の黒四目は逃がしても、下の黒全部を取る事が出来ます。又黒イの手をりに打ちますと、白〇、黒カ、白ヨ、黒ニ、白ハと打て此一目を逃出します。で斯く此一目を逃出したあとの下邊の石は、此時黒又に約へれば、白ル、黒ヲなれば、白ワ、黒夕に打てば白レに點して一眼。又黒夕をレに打てば、白夕に置いて同じく一眼となります。

手筋練習 (十三目の戦)

第六圖 手筋を見出すについての、大體の要領は、前に述べた通りで、此要領をよく會得致しますと、大低の場合に於て其形に適する手筋を知る事が出来るのであります。

で次には手筋の練習としまして、十三目の置碁につき其打方を研究致しますと、初めに十三目の置碁で白一と高く二間に掛つた時、黒は普通の通り二と一間に高く應け、次に白三と黒石に接した時、之も常法通り、劇しく四と縛返し戦ふのであります。

之等の打方については、初めに白一と離れてカカれば、黒は如何に多數の味方がある時でも、直に此一の白に接しニ、或は十などに打つ手は、所謂事を好む手で、結局黒として危険の打方と云はねばなりません。

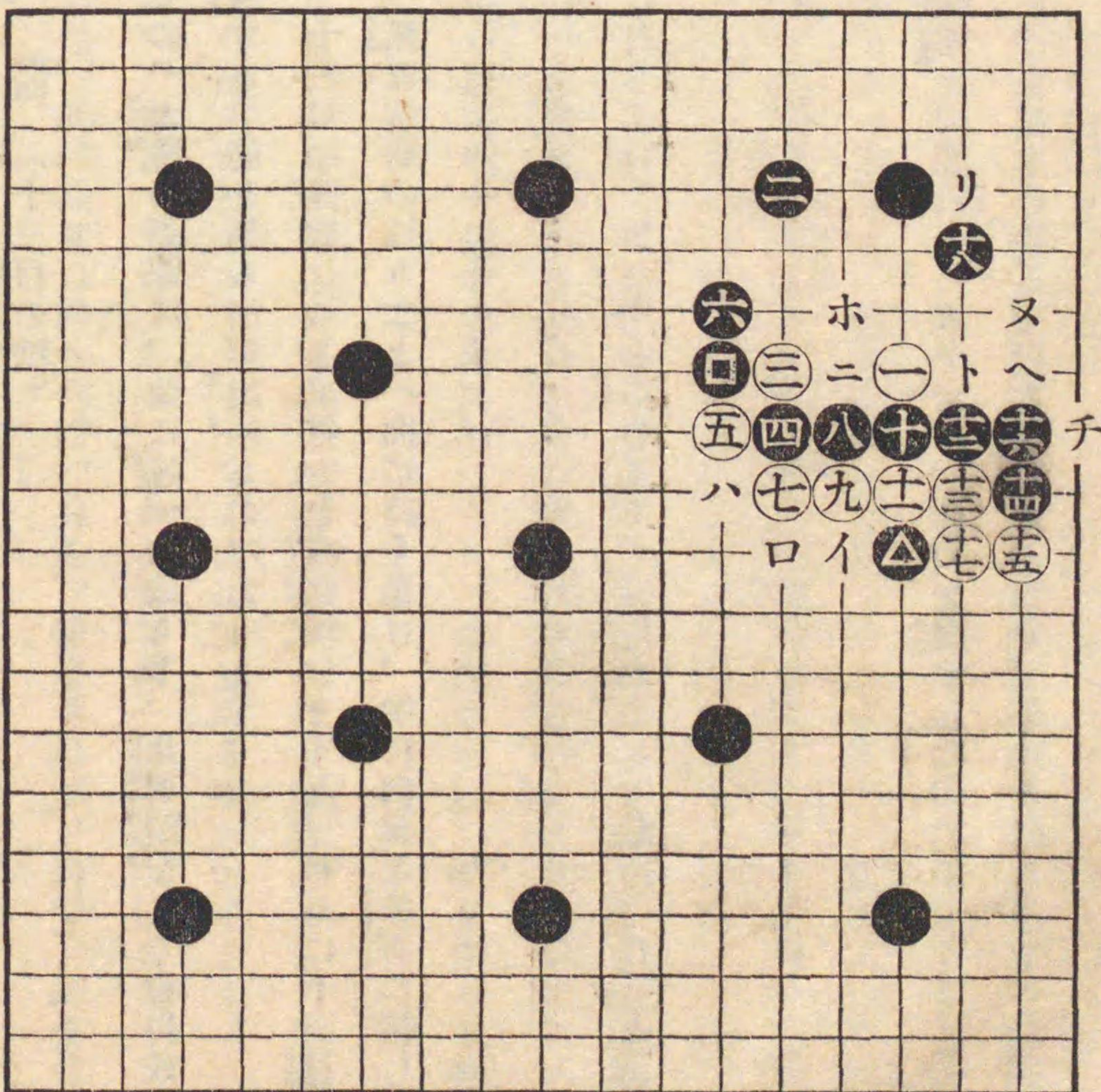
處が次に白三と附けた時は、此處では黒先着であり、且つ他に多數の味方もありますから、斯く四と縛ね攻勢に出たのであります。

白五の切違に對しては、之も常法通り、黒六と一方を行び、此石を堅くしたのであります。次に白七で、若し八から當りとしみますと、黒は七に逃げ、白九、黒イ、白〇、黒八となる迄で、以下白に良い手段はないのであります。

故に白は、止むを得ず七に當りとし、黒八、白九と押しつけて一、三の二目を犠牲として、外を厚くしたのであります。黒十で二に三の一目を當りしますと、白十、黒ホ白十一の粘となるので、之は黒としては只三の一目を取つたと云ふ丈で黒△を効力の無い石としますから好い結果てはありませぬ。

黒十四と綽ねた時、白十五で若し十六に切ると、黒へ、白ト、黒チ、白ニ、黒十六に粘、白十七に打てば、黒十八

手筋篇第六圖



と打つて、白四目は死となります。

次に白十七の手で十八に打ちますと、黒リ、白又なれば、黒十七と切るので之は内の一以下の白も、又外の七以下の白も、活とするに困難な石となり、白は前よりも一層悪い形となります。

白十七の粘は大切な處で、白は斯粘いで置きますと、黒△の一目は白の堅い處にクツツいて居て効力のない石となりますが、若し白が十七の粘を打つ、黒から十七に切られる形となりますと、白は石を二つに切られ且つ黒△の石は、効力のある善い石となるのであります。

黒十八は隅を守り、其上、一、三の白の活動を制限した好い手であります。總て布石攻合を問はず、守りには必ず攻を含み、又攻には守りを含んで居て、初めて善い手と云へるので、此攻守兩様の意味の無い、只敵を攻めるばかりの手、又は退いて守るばかりの手は、多く悪手となるので斯かる手を續出すれば結局敗となるは明かであります。

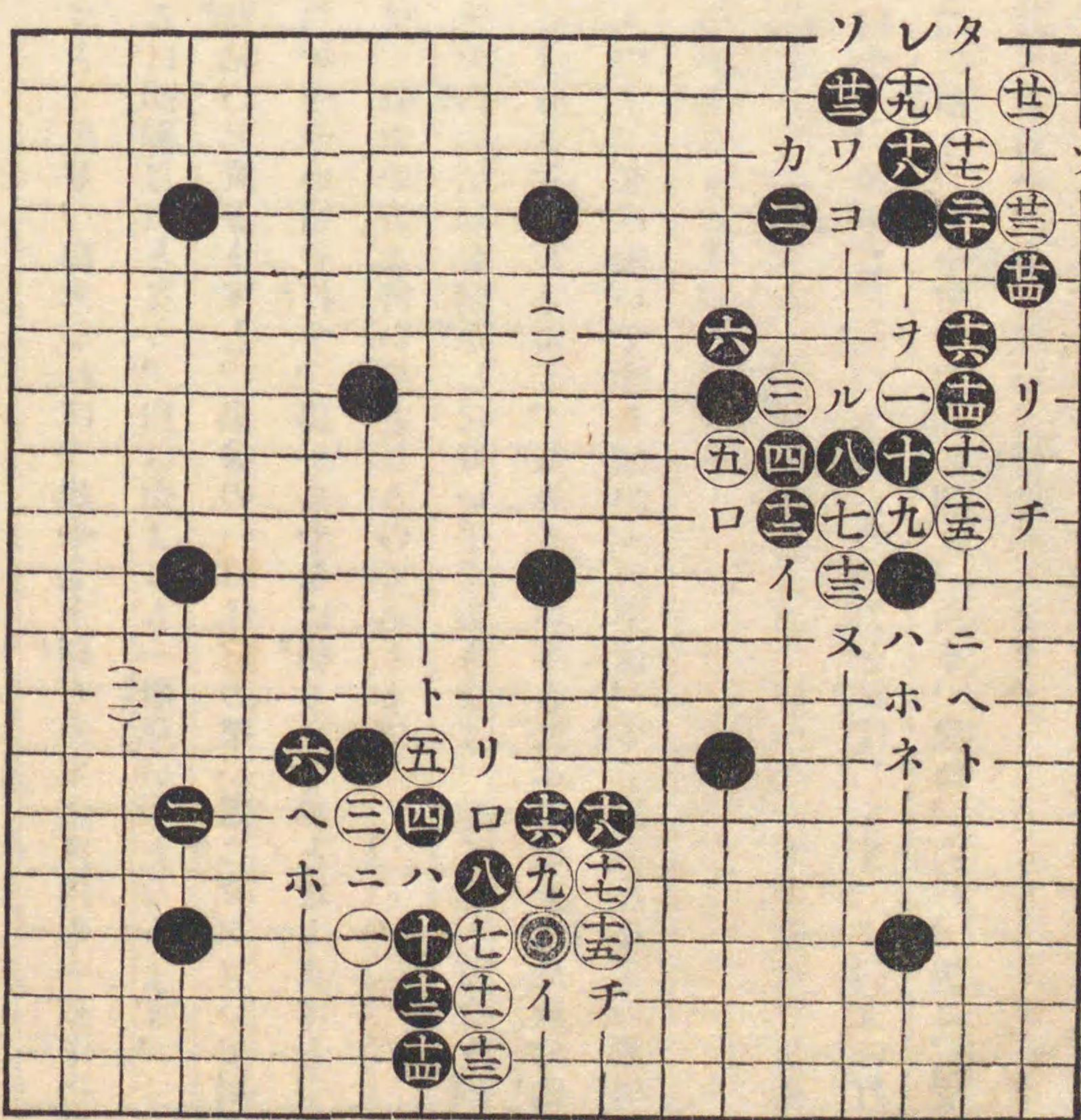
第七圖 (一)前圖白七からの變化、(二)圖の様に白が七とハズシて打つた時も、同じく黒八に出で、白九の時、黒猶十と出で、白十一、黒十二と曲つて其石の活力を延ばします。で白九に打つ手を若し十と打ちますと、黒は十二に曲り、白十三、黒九に切り、白イ、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホ、黒へ、白ト、黒チ、白ネ、黒リと打て白の一、十、三の三目を取ります。

故に白は圖の様に九に打ち、黒十、白十一、黒十二、白十三の時に、黒十四に切ります。此時に

若し白が十六に一目を當りと
しますと、黒は十五に切り、
白りに打抜、黒又と三目を征
に取ります。此三目は中原に
大きい影響を與ふる石で、此
三目を打抜いてしまひます
と、中は殆んど黒の勢力範圍
内となつてしまふのでありま
す。

又白十六に當りとする手を
イに打ちますと、黒ルに當り
白十五、黒ヲに打抜となるの
で、此形は圖に比較して一層
黒は堅く、此形となれば、隅
も同時に黒の地となつてしま

手筋篇第七圖



うのであります。

で此隅の變化の一例を擧げて見ますと、黒ヲに打抜いて次に白十七に打込んで來るとしますと、
黒は普通の應手十八には打ず、強く十九に攻め、白十八、黒二十二、白ワ、黒カ、白ヨ、黒二十三
に隅の眼を取つて此形は、前述の通りヲの打抜が働いて居りますから之れで白を捕虜とする事が出
來ます。

又圖の形で、黒十六となつた時、白十七の打込に對しては、黒は十八に應け、以下黒二十四の約
へとなります。

斯うなつては、次に白夕に手入れすれば、活となりますが、白は又手を抜いて他に打つ事もあり
ます。若し手を抜いた時は、黒レ、白夕、黒ソ（ソの手は一應はネに劫提）白ツとなつて、劫の形
となります。

(二) 白七は所謂手筋でありまして、又此手は黒の應手如何により、四の一目を劇しく攻める手
をも狙つて居るのであります。

で此時は黒は八に應けるのが善い手で、斯う打てば四の一目は完全に守れますが、若し此手を
九、十一、或はイなどに應けますと、白はその何れでも、ロに縛ね、黒ハ、白八と打ちます、次に
黒二に當りすると、白は三の一目を捨て、ホに打ち、黒へ、白十、黒三に粘、白トとなるので、

斯うなつては黒の形は重複して同志打の姿となり、大層悪い形となります。之に反して白の活力は充分活用され發展して大層善い形となるのであります。

白九の切で、ロに當り、黒八、白十に粘としますと、黒九に粘ぎ、白イ、黒子となるので、今度は前と反對に、白が切れ々々の姿となつてしまひます。

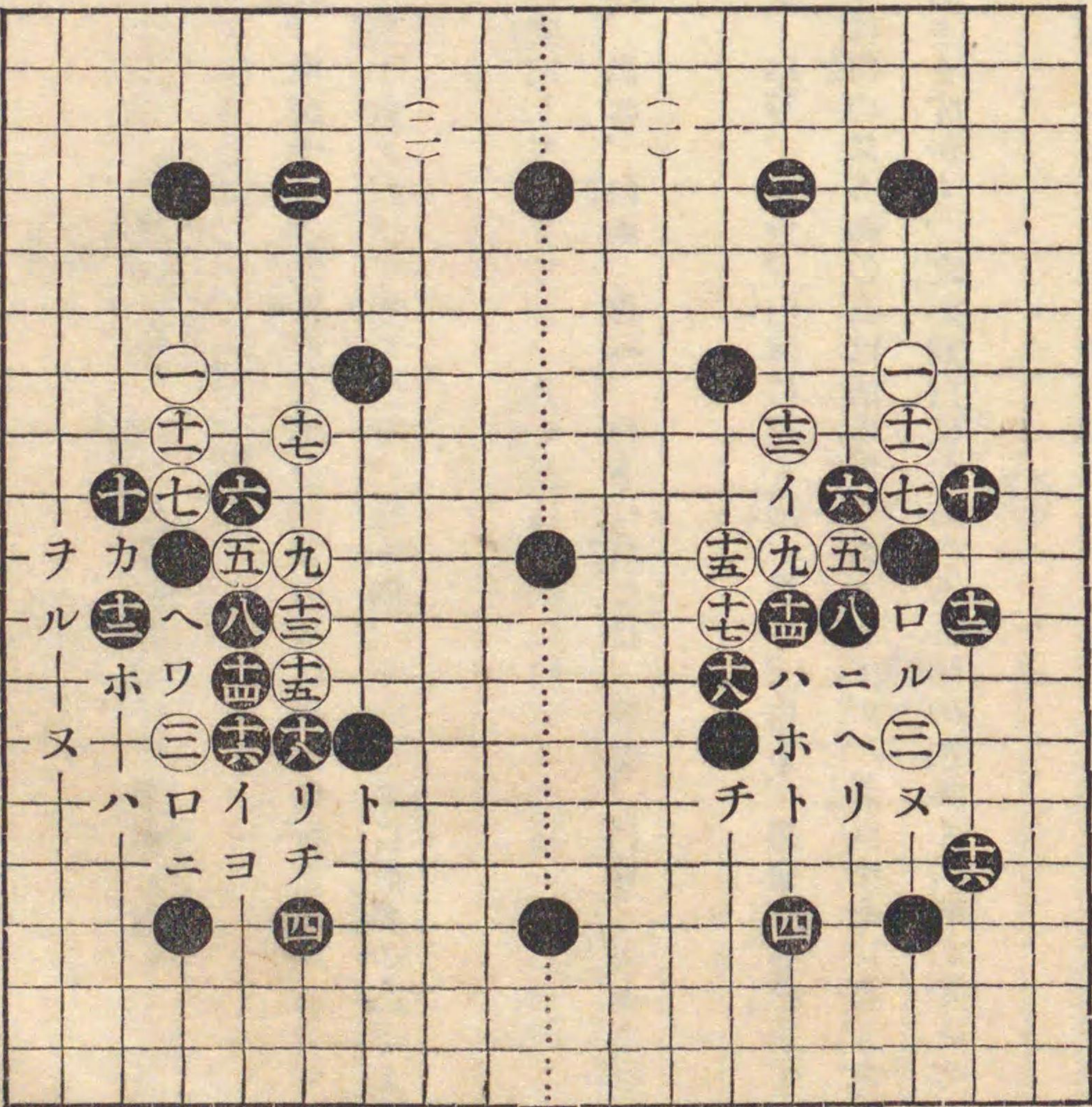
故に白は圖の様に九に切り、黒次に十、十二、十四と打て、一、三の二目を取り、黒の◎一目を捨てる結果となつたのであります。

白十五の提、此手で若しロに當りるとしますと、黒八に粘、白十五、黒十六、白十七、黒りに打抜となるので、之は黒の一層堅い形となります。

又圖の様に、只白が十五と提れば、黒は十六、白十七、黒十八と押したので、其結果を見ますと黒は只◎の一目捨てたのに對して、白の一、三、五を隔て、之等の石を効力の無い石として居りますから、之も黒優勢であります。

第八圖 (一)白一、三と高く二間に掛つて置いて、次に白五に急撃する手もあります。此時は黒は先づ六に綽ね、白七と切つた時、黒は此一目を棄て、圖の様に八に綽ね、白九、黒十に當り、白十一の時、黒十二と掛粘いで、其形を整へたので、黒としては之が一番安全な打方であります。で若しも普通の場合での切違に對しては、一方イ或はロに行て戦ふのが善い手ではありますが、此形

手筋篇第八圖



では近くに白一、三とありて、白の優勢の場所でありますから、黒は安全な方法によりて圖の様に打つたので、此形となつても、黒は決して悪くは無いのであります。次に白に十三と掛けられて、六の一目を門(アシダ)に取られた時、黒十四に押し、白十五、黒十六に尖んで、隅を守り、白十七、黒十八と突當つて、黒は數十目の地を確定する事が出来たのであります。

で斯様な形となつた時に、

次に白八に切るとしますと、黒二に當り、白ホ、黒へ、白ト、黒チ、白リ、黒又に切りて白の四目は死となります。

又初めに白八に切る手で、ルに覗きますと、黒ロに粘、次に白リに打てば、黒ホに曲りとなつて、白の三目は手段の餘地は無いのであります。

(二) (一)圖の白十三からの變化。白が十三と門に取る手を、圖の様に十三に押し來るとすると、黒は無論十四に行び、白十五、黒十六と行びて居るので、此十四、十六は共に肝要の處であります。

次に白十七に取る手で、猶十八に突出して來ますと、其時黒は十七に打て、六の一目を逃出し、白イに約へれば、黒ロと切り、白八、黒二、白ホ、黒へ、白トに打てば、黒チ、白リ、黒又と打て白死となります。

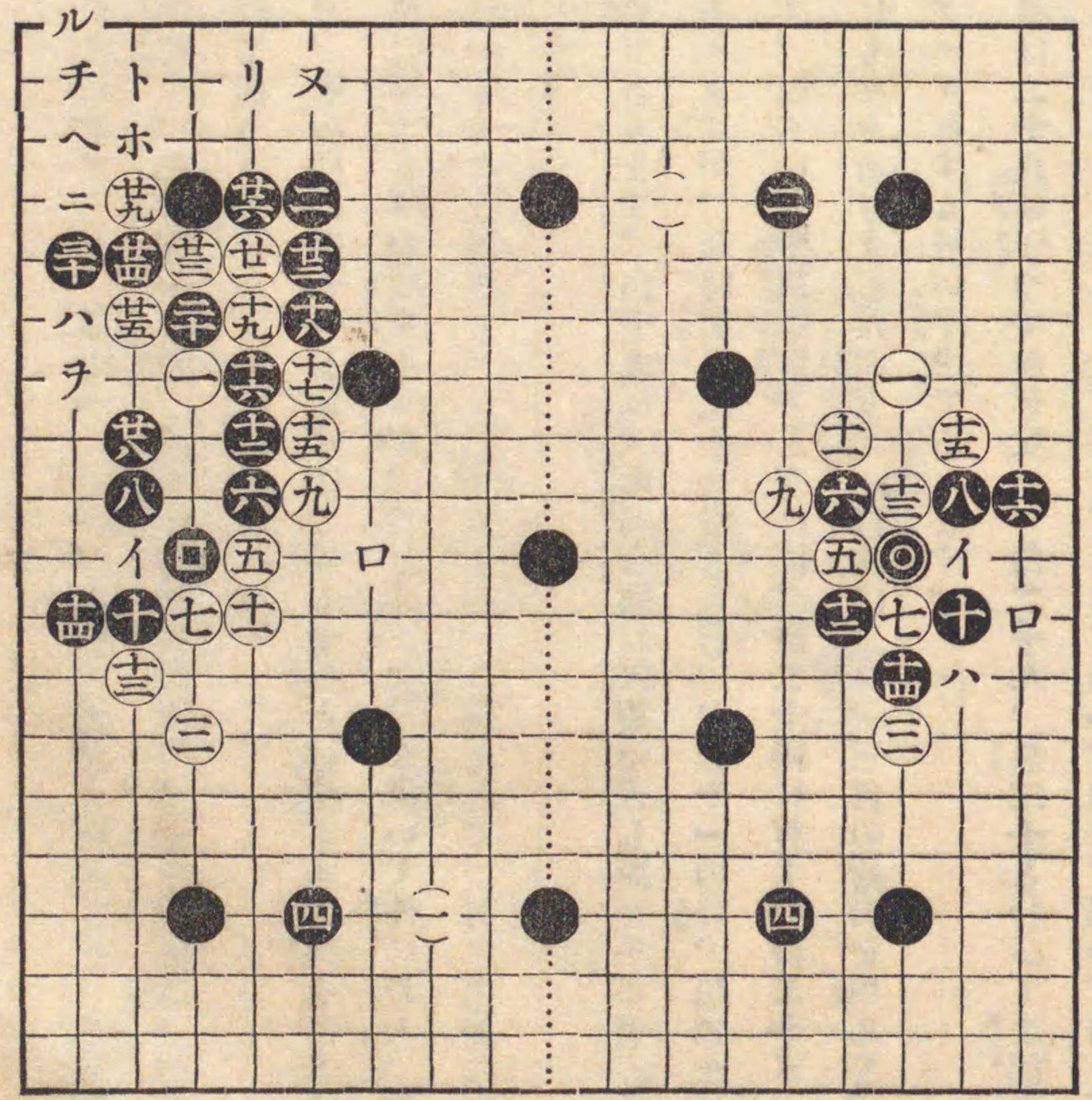
又白トの手をルに縛ると、黒ヲ、白ワ、黒カ、白又に打て活、黒リ、白ト、黒ヨに打抜いて、隅の石と連絡するので、斯うなつては白の又方面の石は活の形ですが、黒は十七に打て六の一目を取り、中の置石に連絡して居りますから、之が爲白は左右の石に活の形無く苦戦の形となつたのであります。

黒十八の粘は、白の十七に一目を抱へて後の、唯一の好點となつて居ります。

第九圖 (一) 黒八と十は

共に手筋であつて、此形では、黒は斯う打つのが一番好いのであります。で初めに、白七に打つた時、黒は形として先づ六と●を連続する處であります。但、扱之を連續する打方について、十三に堅く粘ぐ手、イに下る手、又八に掛粘ぐ手と、此三つであります。で其中では圖の八の掛粘が一番好形となるのであります。次に白九に二段縛した時、黒十の縛返しは、好い手筋で着手は總て斯かる形に打たな

手筋篇第九圖



二十の處ツグ

ければならぬのであります。

白若し十一に當りとする手を十二に粘ぎますと、黒十一に行び、白八、黒口と行びます。又圖の様
様に白十一に縛れば、黒は十二に兩當り、白十三の打抜、黒も十四の打抜となるので、此替りは同
じ目々々の打抜でも、稍黒が優つて居ります。

(二)(一) 圖白十一からの變化で、圖の様に白十一と粘げば、黒も十一と行びます。斯う打てば
黒は形は整ひ、又白の一と九を左右に隔てる事が出來ますが、若し此手を手を抜いて外に打ち、白
から十二に縛ねられるとすると、白一の一目は連続し、又黒以下以下の石は圍まれて、白に上面に厚
い模様を作られてしまふのであります。

黒十四も、前と同様斯う行びる形であります。白十九は、此場合他に緊要の點も無いから兎に角
斯う切つて黒の應手を試みたのであります。此時黒は二十に當りとし、白二十一の時、黒二十二
に粘ぐので、之が善い手であります。白次に二十三に當りとするれば、黒二十四に打ち、白二十五、
黒二十六と打つので、此形は、前にも度々ありました通り、一目或は二目、三目の捨石を用ゐて、
敵の形を重複せしめ、其石を駄目ヅマリとする好い手段であります。

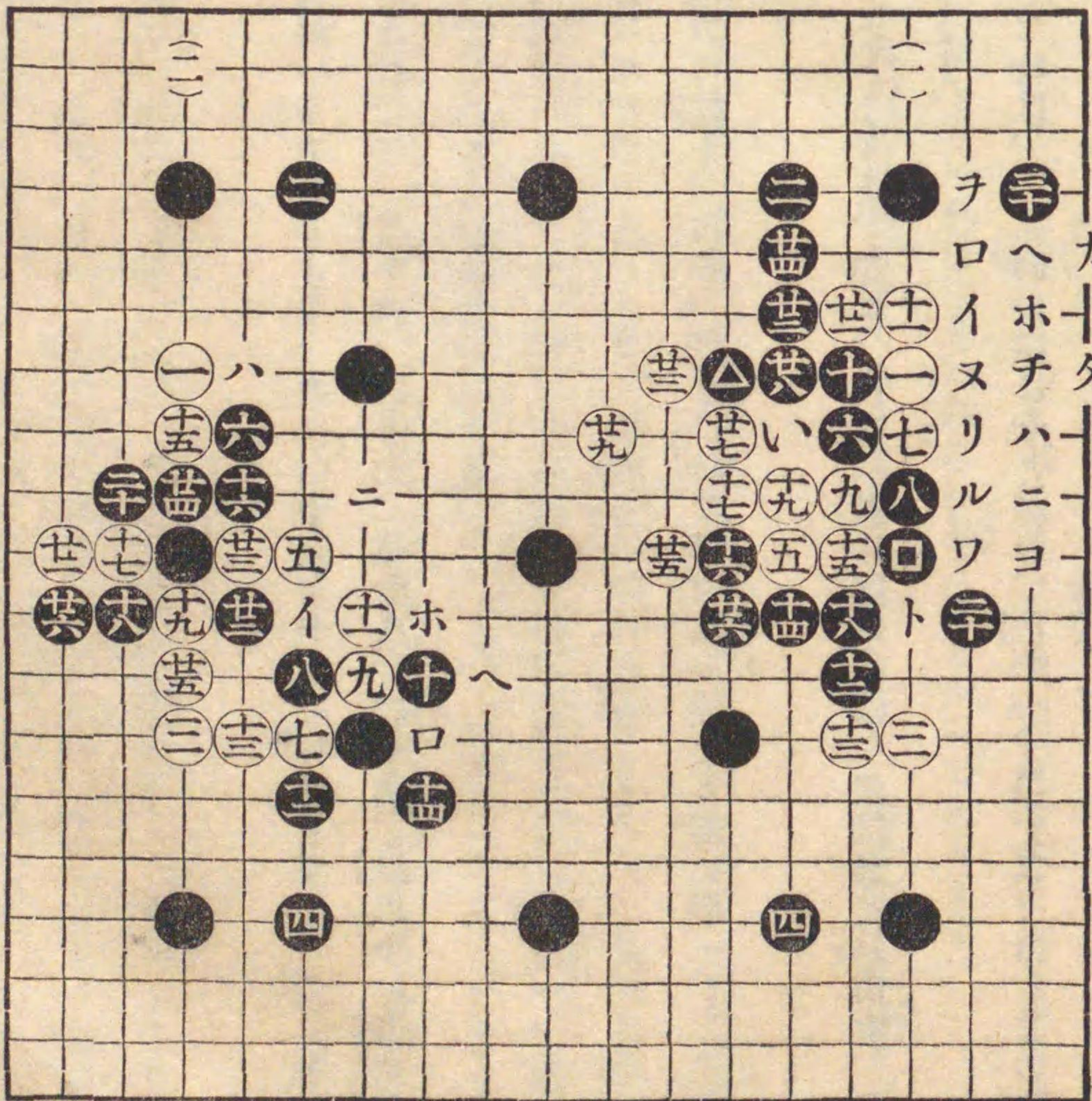
次に白二十七に三目を粘げば、黒は二十八に守つて白を攻め、白二十九、黒三十と行びて全部の
白は死となります。猶此時に、白八に約へるとしますと、黒二、白ホ、黒へ、白ト、黒チ、白リ、

黒又、白ル、黒ヲに打て攻合
黒勝であります。

第十圖 (一) 白五に帽子
に掛けた形では、黒六の斜走
が好い手筋であります。

黒八を、九に引いて居れ
ば、黒回とは確に連絡して居
りますが、其形が少し面白く
ないので、黒は、斯う突當つ
て、白に此處を切らせて強く
戦ふ手段を選んだのでありま
す。で若し白九に切らずに只
十に押しますと、黒「い」と行
びるので、之は前述九に引い
て居る形より優つて居ります

手筋篇第十圖



白十一の行で、若し十八に打て黒の出を止めますと、黒十一に打て此攻合は黒勝となります。變化は、此時に白イに綽ねますと、黒ロ、白又、黒ハに打て勝。又白イの手をハに飛びますと、黒ニ、白ホ、黒へ、白ト、黒イ、白チ、黒リ、白又、黒ルに打て、之も白三手、黒四手で、黒勝であります。

黒十四の尖附は手筋で、此形では好い手であります。次に白十五を十六に行びますと、黒は十五に當りとします。又圖の様に白十五と打てば、黒十六、白十七、黒十八、白十九、黒二十の掛粘となつて、之は白五目が礙り形となりましたから黒優勢であります。

白二十三の時、黒二十四の粘は大切の一手で、以下黒三十の飛までの形となりて、白の一、七、十一、二十一の四目は活の無い形となつたのであります。猶此時に白ロに覗きますと、黒ヲに粘ぎ白ル、黒ワ、白ニ、黒ホ、白へ、黒カに盤り、白チ、黒イに打て、白は一眼より無い形であります。

又此變化の中で、白ニをハに打つとしますと、黒ニ、白又に劫に應ければ、黒はヨに粘白ホ、黒タに打て、同じくイの一眼丈となります。

(二)、白七、黒八、白九と切違つた時は、黒は圖の様に十と綽ね、白十一、黒十二、白十三の時黒十四に掛粘いで、此八の一目を捨て、外を厚くするのが安全の手段であります。

黒十六は、此處では(一)の様に二十四に突當る手は悪手となります。何故かと云ふと、此形白は九、十一、七、十三と四着もあつて、此方面が堅くなつて居りますから、白に十六と切られると、黒は全く圍まれて下邊で何とかして活きなければならぬ様な結果となるからであります。

白十七に附け、黒十八の時、白十九の切は無理筋でありまして、之に對して黒は二十に當り、白二十一、黒二十二と當りとします。

白二十三で若し二十五に粘ぎますと、黒二十三の粘となるので、此形は、白は上の三目の連續を絶たれて宜しくありません。

故に止むを得ず白は二十三と當り、黒二十四、白二十五に粘いで、ようやく八、二十二の二目は取りましたが、其代り黒二十六となり、下の二目を取られたので、此替りは同じ二目であります。一方白の一、十五が非常に悪い形となつて居りますので、之も白の悪い結果であります。

地取篇 (其の四)

侵分の研究

侵分(ヨセ)とは、第一巻で説明致しました通り、戦終つて後、最早石の死活も無く、終局に近い形となつた時に、互に其一手の大きさ、其手が幾目にあたるか、之を計算して誤りなき様、最後の終局まで、完全に打終る手段を云ふのであります。

で此侵分の中には、一手が十数目の大きさの處もあれば、又最終ダメをツメる間際となると、一手一目或は半目と云ふ小さい處もあります。

故に侵分の巧拙も、細かい碁となりますと其碁の勝敗に關するのは云までも無いのであります。實戦では、中盤以後まで勝に見へた碁が、侵分の打方を誤つた爲に、敗となつた例も屢々あるのであります。

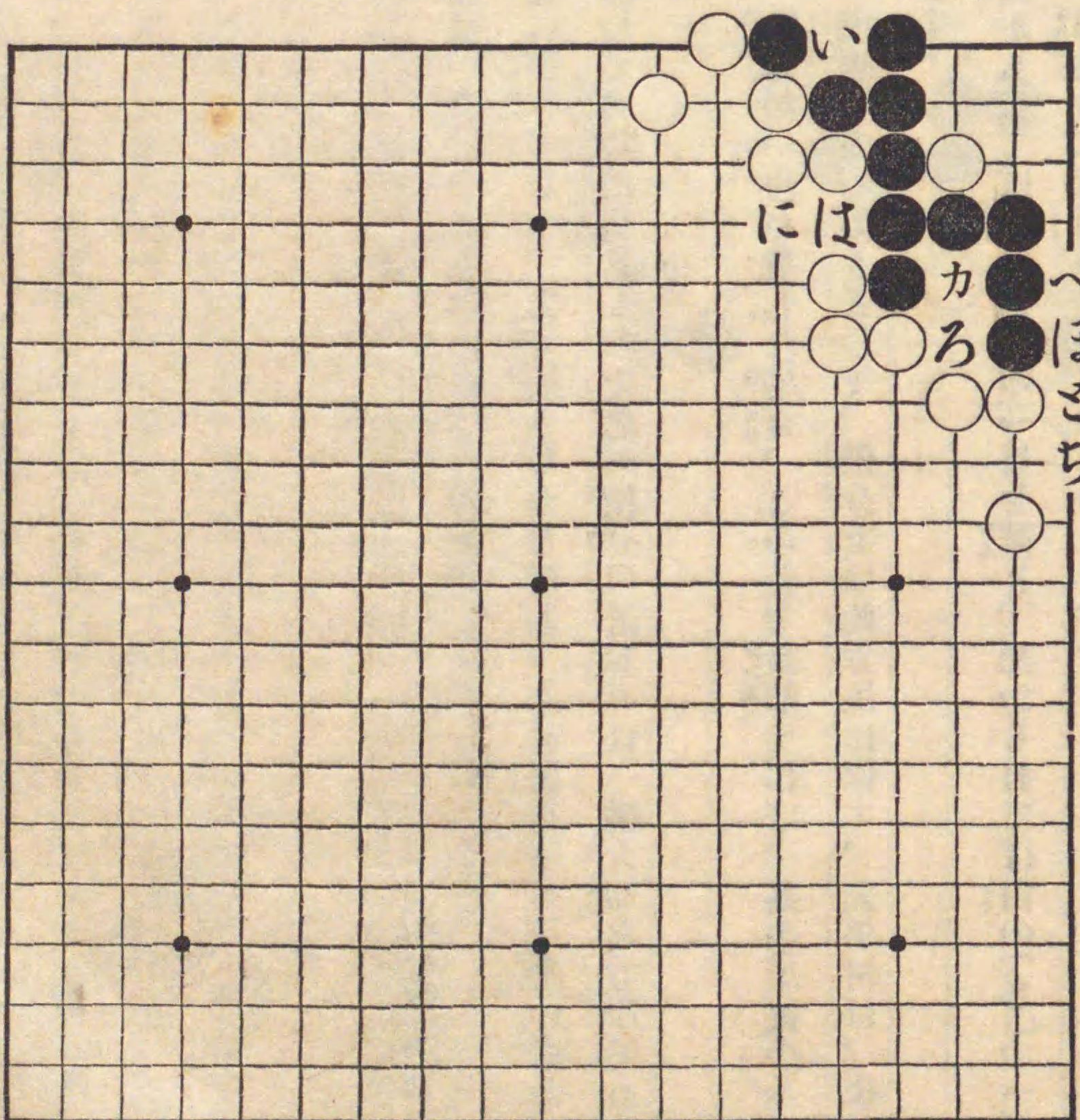
で侵分の計算をするについて初めには、先づ目數の少い着手から順次初める事と致します。

第一圖、白「い」後手半目得 一手に、其得が只半目丈と云ふ數は無いのでありますが、此形に限り白は「い」に一目を提つても、まだ劫が残つて居ります。故に白は此處を完全に一目の得とする

には、今一着此處を粘がなければなりませんので、つまり二着で一目となりますから、之を半目の劫と云ひます。

黒「ろ」後手一目得 圖の様「ろ」と打てば、黒は力に一目を作り、反對に白「ろ」と打てば力の一目は無くなります。又此黒「ろ」に打つ手は後手となつて居るので、之は後手一目の處となります。

黒「は」先手一目得 侵分に先手何目と、後手何目との別があります。後手何目の形では、相手は其處を手を抜い



地取篇(侵分之部)第一圖

て他に打つ事が出来ませんが、先手何目は、相手は猶其處を應じなければなりません。故に後手となつては一目、二目の處は小さい方で、最終最早打場所も無くなつた時に打つ手でありますが、先手の方は假令一目二目でも、猶先手を取つて他に打つ事が出来ますから、侵分にカカツた時早速着手しなければならぬ要所であります。今圖について見ますと、黒「は」と打てば、此點の白地一目を減じ、白は「に」に應じて居なければなりません。

白「ほ」後手二目得 此形は白「ほ」と縛ね、黒「へ」、白「と」までが、一つの侵分の打方となつて居るので、斯う打て白は二着、黒は一着、つまり白は後手一着を費した譯となります。

又此侵分の計算方法は、前の様に簡單でなく、先づ斯うなつた形と、之を黒後手で「と」に縛ね、白「ち」、黒「ほ」となつた形と比較して、其差を見るので之が侵分の計算では一番大切な方法であります。

即ち敵が一着を費した場合と、味方が一着を費した場合、この差を計算すれば、其手が後手（双方共に）何目に當るかを知らる事が出来るのでありまして、侵分では此方法に依て、先手何目、後手何目と計算するのが普通であります。

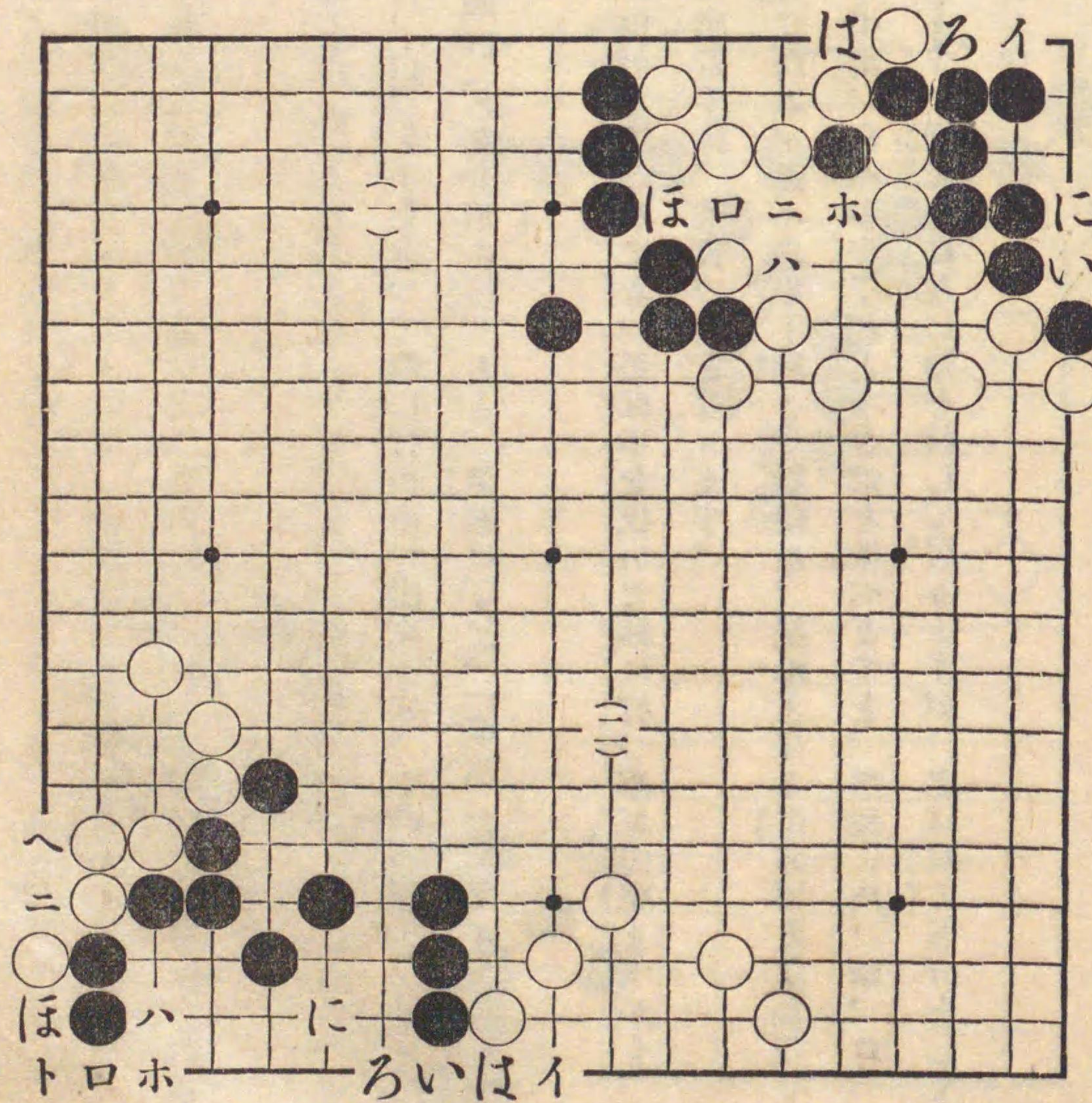
今圖の形について見ますと、白から打てば黒の「へ」の一目を減じ、黒から打てば白の「ち」の一目減するので、此差合して白「ほ」の縛ねは二目の手となるのであります。

第二圖(一)白「い」先手一目

半 此計算は、次に黒「に」と約へた時に其形を見ますと白「い」に一目を打抜、猶「に」に黒地一目を減じ、(黒「い」に粘ぐ形と比較して)合して二目となりませんが、此處は劫残りで、後に黒から一目を提返す手が残つて居ります。故に此處を半目と見て先手白一目半の得となります。

黒「ろ」先手一目得 斯う打てば白は「は」に後手を引かなければなりません。此形と、白から「ろ」に出で黒「い」、白

地取篇(侵分之物)第二圖



「は」となる形と較べると、黒はイに一目を増して居ります。

白「ほ」後手四目得 之も前に述べた計算法によりまして、此形と、之を黒からロに縛込、白ハ、黒「ほ」となり、次に黒先手ニ、白ホとなる形と較べますと、白地にハ、ロ、ニ、ホの四目の違があります。

(二)、「白「い」先手三目得 之も白「い」と打ちますと、黒は「ろ」、白「は」、黒「に」となるまでが一つの侵分の打方で白黒共二手に、白猶先手を取つて他に打つ事が出来た。で此計算も、之を反對に黒から「は」に縛ね、白イ、黒「い」となる形と較べると、黒地は「ろ」、「に」、白地はイ、合して三目の違ひとなります。

白「ほ」後手五目得 圖の様に白が「ほ」に打ても、黒は手を抜いて他に打つ事が出来たから、後手となりますが、斯く白「ほ」に出る手は、五目の手となります。

で斯様に白「ほ」に出ますと、次に白ロ、黒ハの先手利き、猶白ニ、黒ホとなる迄の形となるので此形と、黒から「ほ」と約へ、次に黒ニ、白への先手利となる形と較べますと、黒地にハ、ホ、ロ、トの四目、白地にへの違ひがあります。猶此形は互に劫を残して居りますが、之は双方五分として其得は五目となるのであります。

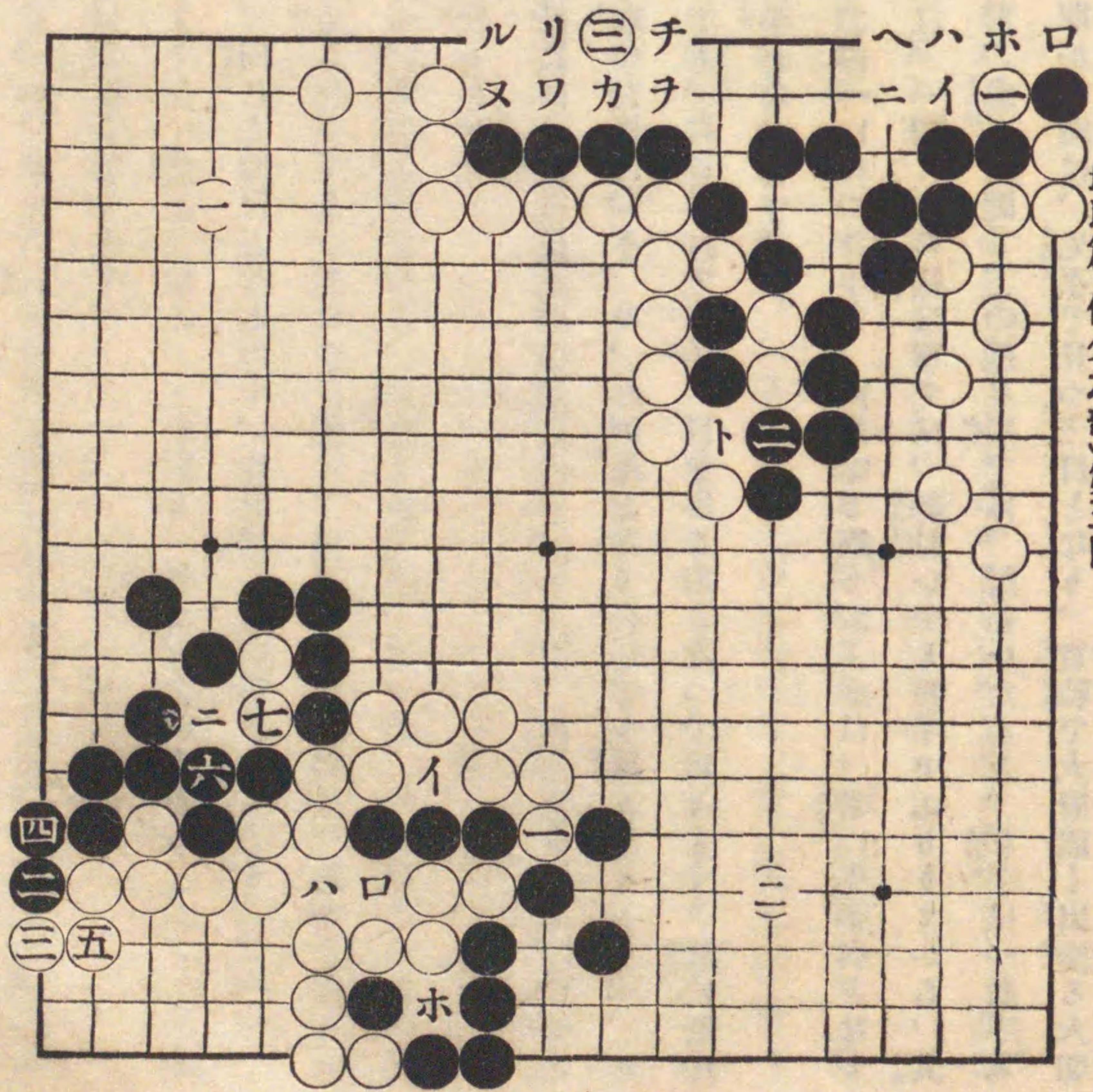
第三圖

侵分も目數が多

くなれば、夫れ丈計算も困難となりませんが、然し方法は前に述べた通りで、大抵は同一の方法で、其幾目に當るかを知らる事が出来ますから、若し前述の方法を能く了解して、之を應用する事が出来れば、假令少し込入つた形でも、又目數が多くなつても、容易に其數を知る事が出来るのであります。

(一)、「白一後手七目得 斯う打つと、黒イ、白ロとなり、後に白ハ、黒ニの先手利

地取篇(侵分)第三圖



きを合して、黒の地口、ホ、ハ、イ、ヘ、ニの六目を破り(黒一に粘ぐものと比較して)且つ黒の一目を打抜いて居りますから、白七目の得となります。

黒二、後手八目得 斯う打ちますと、黒は二目のハマを取り、且つ二目の地を得、合して四目、又白からトに打抜きましても、同じく四目となるので、合計黒八目の得となります。

白三、先手六目得 斯う三に走られますと、黒は子に應け、白リ、黒又、白ル、黒ヲとなります。で此形と黒から先きにルに約へた形と比較すると、黒地にチ、ヲ、三、カ、リ、ワの六目の違ひがあり、且つ白は先手となつて居ります。

(二二)、白一後手八目半得 此計算は、先づ黒三目の死石は、ハマ三目、地三目と合して六目となり。且つ其上に白は三目の黒を取つた爲に、イ、ロ、ハが地となり合して九目となりますが、此中八目は、假令黒一に三目を粘いでも、白ロに打て後手一目を作る形となつて居ります。故に斯かる處は半目と計算し、合して八目半となります。

黒二、先手三目得 二圖の(二二)白一に打つた手も、同意味で斯う云ふ處は、常に先手得となります。又圖の様に第一線での綽粘は、一圖にある様な形では、綽粘いでも後手でありませぬから、其差は二目でありませぬが、圖の様な形、或は二圖(二二)の様な形では、綽粘いだと、相手は一着手入れをしなければなりません。故に斯かる處は、先手で且つ三目となり、實戦で大層能く出来る大切

な侵分の場所となつて居ります。

白六、先手三目得 圖の様に白六、黒七となる形と、之を黒から六に粘ぐ形と較べると、黒地には七及び、ニの違ひ、且つ白は一目を提つて居りますから、合して三目となります。

て斯様に一目を打抜く手にも、只打抜いた石丈で、一目の得より無い石と、一目を打抜いて二目の得となる處とあります。圖の様な白九に抜く手は、只其打抜いた石丈の得で、後に黒ニに打つと、白は粘がなければなりません。處が圖中白木の打抜は二目となります。此手は前にも説明した通り一目の取石と、打抜いた跡に一目の地が出来、合して二目となるのであります。

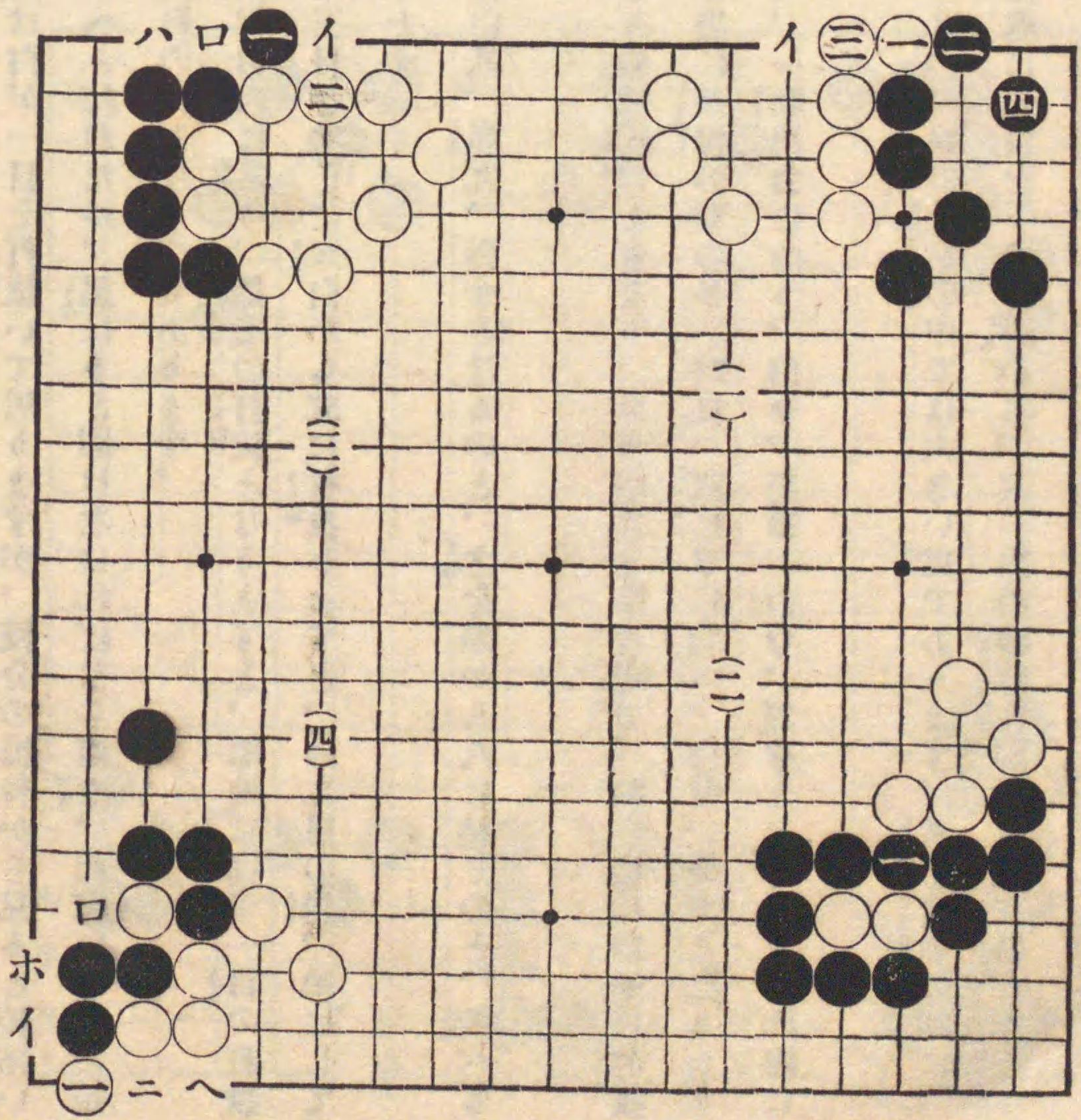
第四圖 侵分の中では、前の三圖(二二)黒二の様に一線での綽粘は、先手三目と、一圖の後手二目との二種であります。若し其れより一線上、二線の綽粘となりますと、其得も大きく最小六目の得から、大きい綽粘になりますと、十目十數目のものもあります。

で侵分での「綽粘」の手は此一線と二線に限られて居るのであります。若し其れ以上の三線からになりますと、其手が幾目になるかは、侵分として、計算の仕悪いもので、之は布石或は戦の中に多く着手する手となつて居ります。

て此處には、第二線の綽粘について實戦に多く出来る形を二、三掲げて見ますと、
黒一後手六目得 此手は二線の綽粘の中での、一番少い手であります。之は圖の様に黒から粘

で此形の計算は、圖の様に黒から十一に綽、白十二、黒十三と粘ぎますと、後に黒レ、白リ、黒ツ、白ネ、黒ナ、白ヤの先手利き。又白から十三に綽ね、黒ラ、白十一となりますと、後に白ム、黒ウ、白牛、黒ノ、白オ、黒クの先手利きとなるので、此差、十四目となります。

第五圖 侵分についての計算法は、大略以上の通りであります。其形が如何なにか變つて居ても、此方法によれば、先づ誤りはありませぬ。



地取篇(侵分之部)第五圖

故に本圖よりは、此計算法を省略致しまして只侵分についての形と、其目數を大略説明する事と致します。

(一)白一、先手三目得 圖の様に白一に綽、以下黒四に粘となつた形と、之を黒先三に綽、白一、黒一となつた形と較べると、其差三目となります。

(二)黒一、後手四目得 此打拔は、前に述べた通り一目を二目と計算し、合して四目となります。

(三)黒一、先手三目得 黒一、白二となつた形は、後に白イ、黒ロとなります。又白から此處を打てば、ロに綽、黒ハ、白一となるので、此差は三目であります。

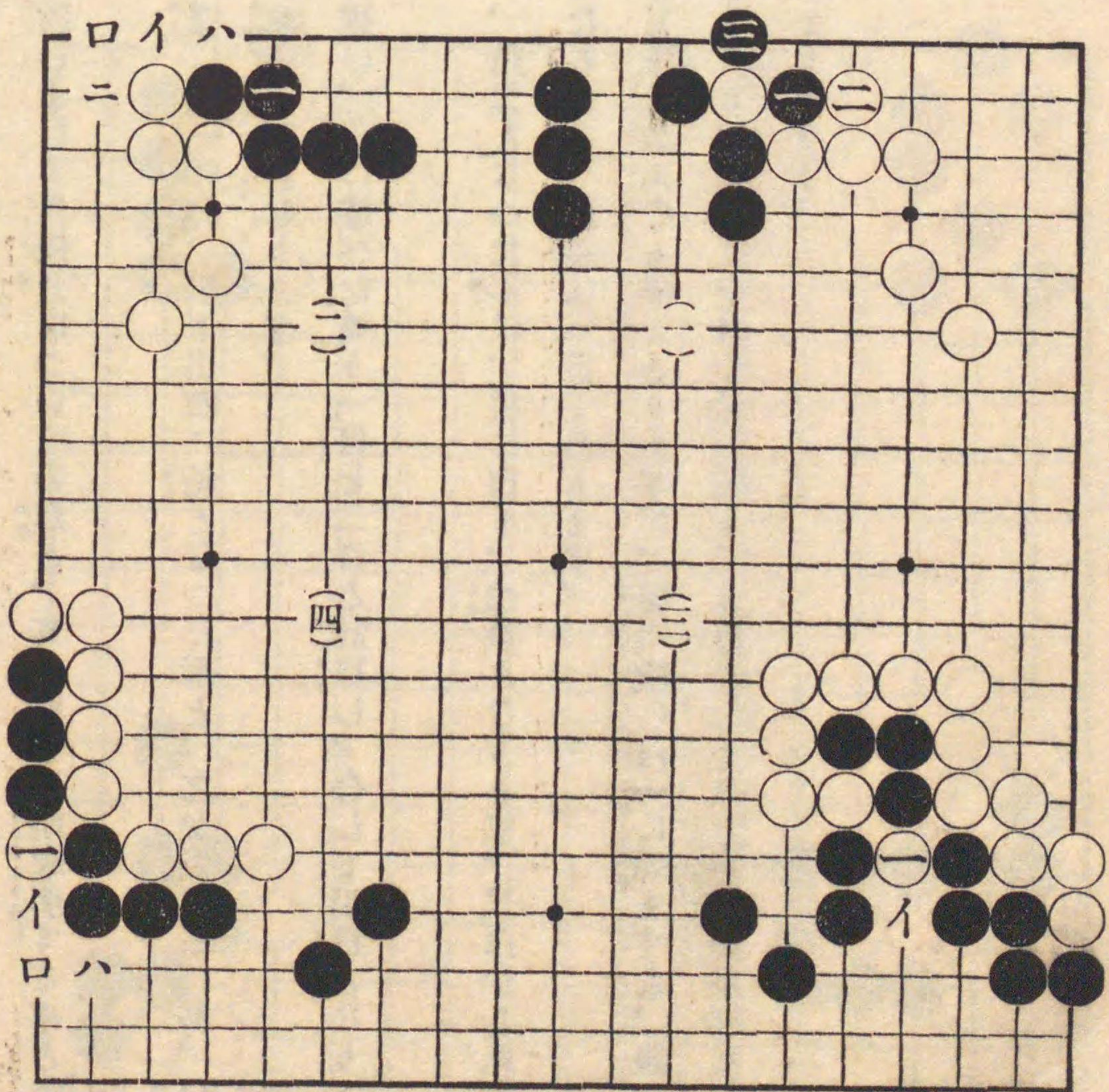
(四)白一、後手約五目得 約五目と云ふのも變であります。圖の様に白一に綽ますと、後に白イに綽、黒ロ、白ニ、黒ホとなるので、此處に半目の劫が残り、五目としては之丈白が不利な譯で、此手は五目弱、の得となるのであります。

地取篇(侵分部)第六圖

第六圖、(一)黒一、後手六目得 圖の様に黒一に切り白二、黒三に抜く手は、前に述べた通り、普通の綽粘と同じで、其中此形は一番小さく、六目の得であります。

(二)黒一、後手八目得 斯様に黒一に粘ぐと、後に黒からイと綽ね、白ロ、黒ハ、白ニの先手綽粘があり。其れ丈(一)圖よりは大きく、此手は八目の得となります。

(三)白一、後手六目得 此三目の打拔は、後に黒イ、白は一目を粘ぐ形となります。



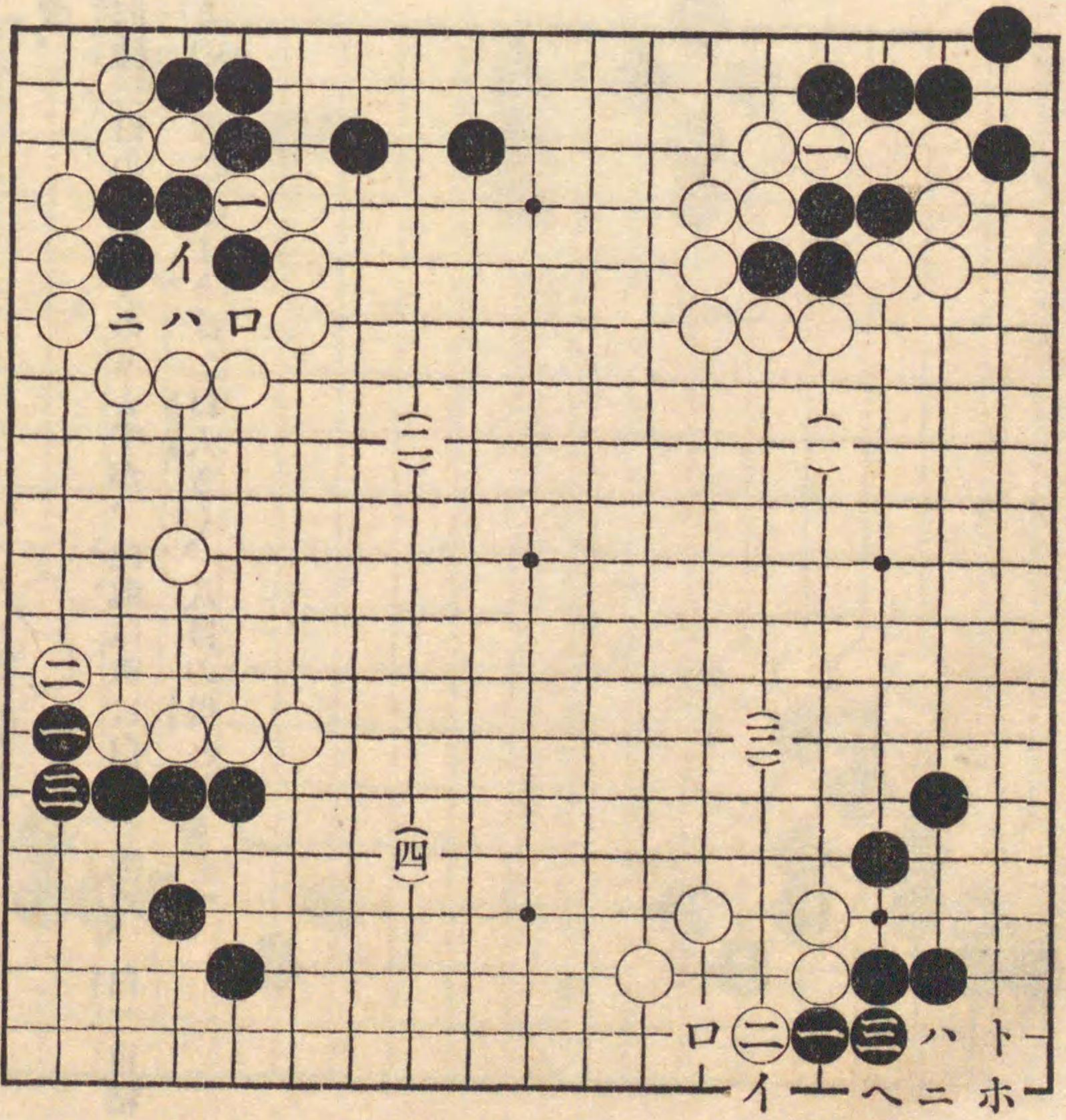
から、普通の三目よりは一目小さく五目となり、それに黒から一に粘ぎますと、黒地にイの一目の違ひを生じ、合して六目となります。

(四)白一、後手八目得 前と同様三目の打拔でありますが、此處は次に白イ、黒ロ、白二目粘黒ハとなる、先手綽粘が残つて居るので、(三)よりは二目大きく、八目の得となります。

地取篇(侵分)第七圖

第七圖、(一)白一、後手八目得 四目の打拔でありまして、且つ此處は白から後で手入れの無い形でありますから、一目を二目と計算して、合して八目の得となります。で斯う云ふ打拔の中には、他の石との關係上、其得は只八目丈でなく非常に大きい處もあります。それは布石又は分れの中の形で、侵分としては夫等の關係は既に無くなつたものとして、只損得丈の計算としてあります。

(二)白一、後手十二目得



之も四目の黒の斷切であります。前と異ひ、イ、ロ、ハ、ニと四つの駄目がついて居りまして圖の様に白から切ると、之が皆白の地となり、合して十二目の得となります。

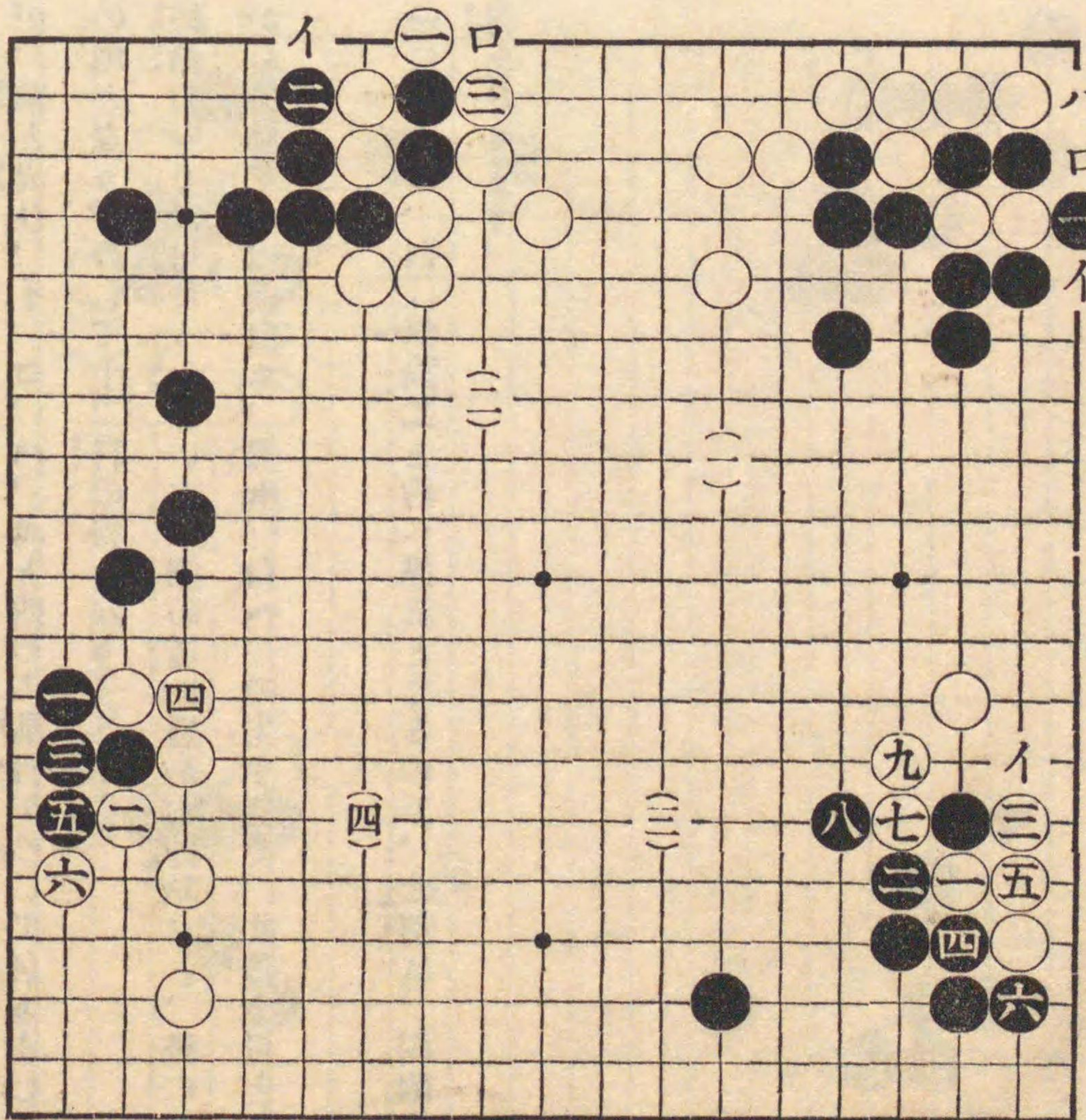
(三)黒一、後手十目得 之は綽粘の中では可なり大きい方で圖の様に黒から綽粘ぐと、後に黒イ、白ロの先手利きとなり。又白から綽粘ぐと、後白ニ、黒ホ、白ヘ、の先手利で、此差十目となります。

(四)黒一、後手十四目得 黒一に綽れば、白は無論二と約へ黒三となるので、此形は、四圖黒十一の綽粘と同じく、黒十四目の得となります。

地取篇(侵分)第八圖

第八圖、(一)黒一、後手十
 一目強得 圖の様に黒が打
 抜くと、黒は二目の打抜、損
 得にして四目と、イの一目と
 合して五目の地を得られ。又
 白が打抜くと、同じく四目と
 ハと合して五目、双方を加へ
 ると十目となりますが、猶後
 に黒ハに打つ手が二目あまり
 でありますから、之を一目餘
 と見、合して十一目強となり
 ます。

(二)白一、後手十六目得
 之は同じ二目の打抜であり
 ますが、侵分の計算では(一)



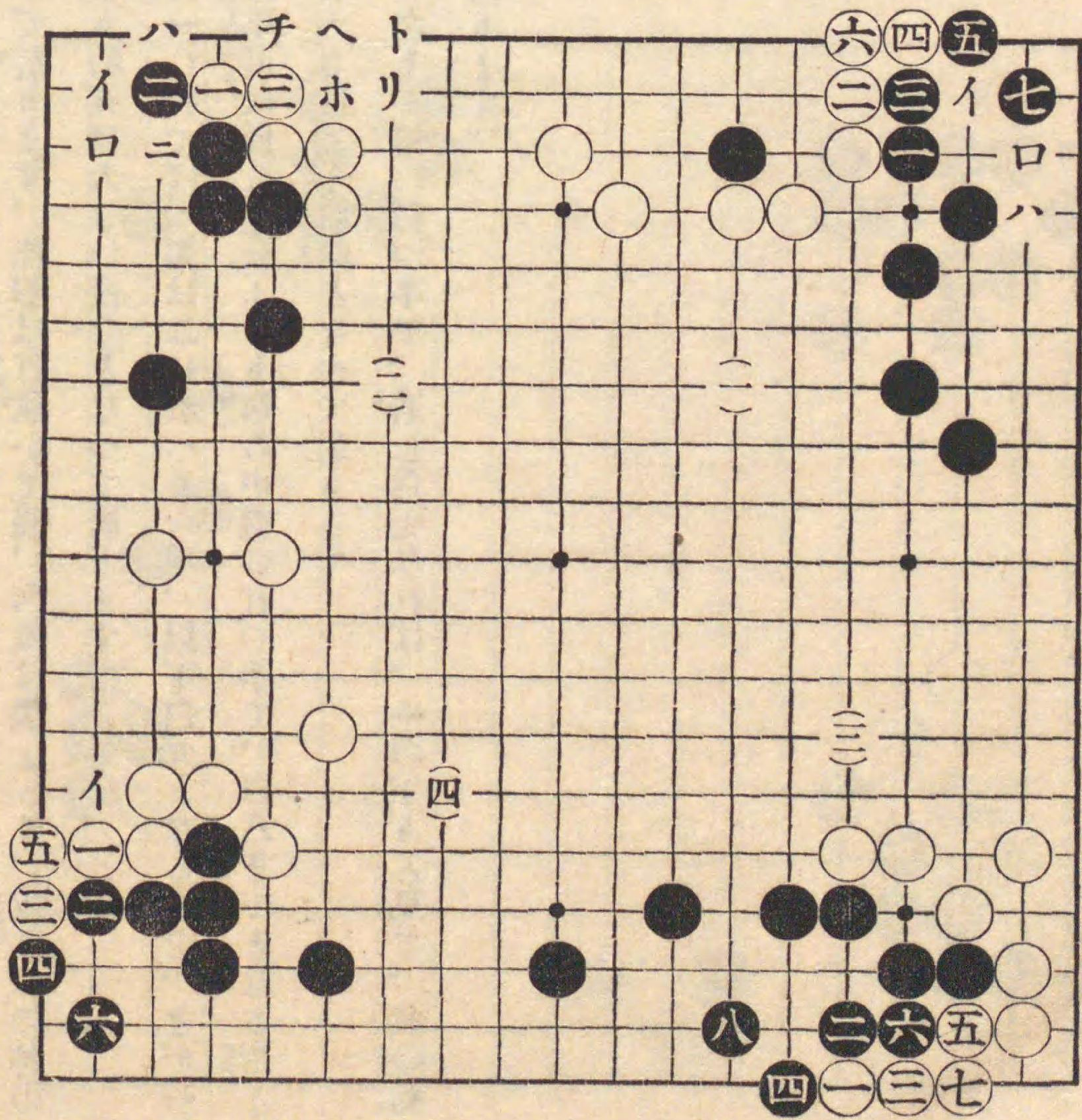
よりずつと大きく、十六目となつて居ります。此形は打抜いて後、白或は黒よりイ、或はロの緯の
 先手利となつて居る關係上、前より約五目大きい侵分となつて居ります。
 (三)白一、後手二十目得 白一に打てば、黒は二に約へる一手、以下白九となるまで、之が一
 つの打方となつて居ります。此手段は侵分と云ふより寧ろ中盤に打つ手で、白八までとなる形と
 黒からイに尖む形と較べると、其大さは二十目餘となつて居ります。
 (四)黒一、先手凡十五目得 之も中盤に打つ手で、若し白先なれば、一の下りと見て、其差約
 十五目、且つ黒は先手となつて居ります。

地取篇(侵分之部)第九圖

第九圖、(一)黒後手十八目得 圖の様は、黒一と隅に尖附ける手は、互先の棋で常に見る大層大きい手で、損得にすれば十八目、且つ損得以外に種々なる意味があつて、大層好い打場所であります。

で此計算は、圖の様は、黒七となつた形と、之を反對に白からイに走り、次に白ロ、黒ハの先手利となる形と比較して、其差十八目となります。

(二)白一、後手十五目得 圖の様は白から一、三と綽粘ぐと、後に白イ、黒ロ、白



ハ、黒ニの先手利き。又黒がら三、白ホ、黒一に綽粘ぐと、後に黒へ、白ト、黒チ、白リの先手利きで此綽粘は十五目の得となります。

(三)白一、先手八目得 白から一に打ち、以下黒八に手入れとなる形と、黒から五に約へる形と比較する、其差八目となり、且つ白は先手となつて居ります。

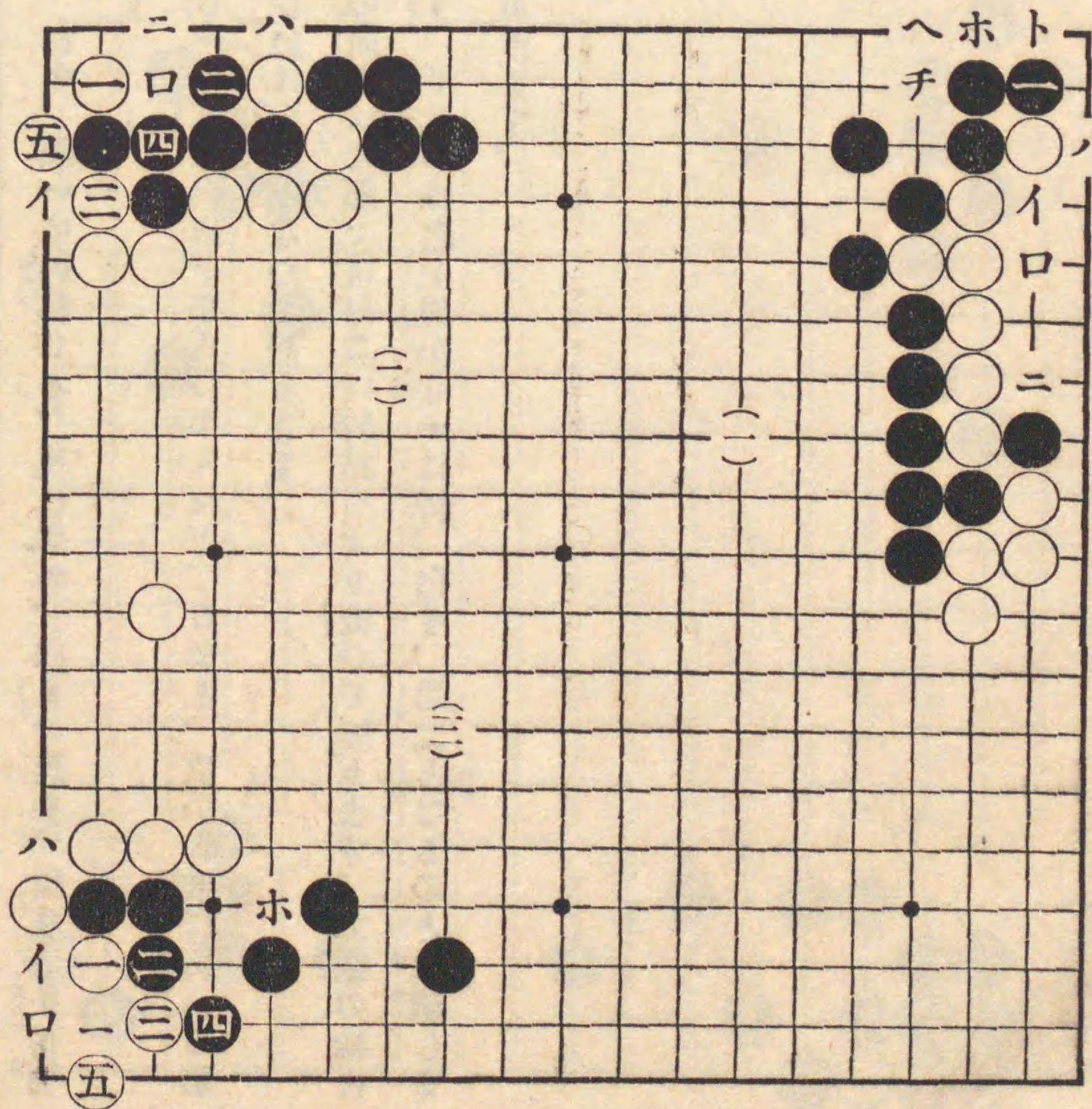
(四)白一、先手七目得 白一の曲りは此形では白二に綽粘ぐより優つて居ります。で圖の様は打てば、黒二、以下黒六となります。で此形は之を黒から一に綽、白イ、黒二となるのと比較しますと、七目の得となり且つ先手であります。

地取篇(侵分之部)第十圖

第十圖、(一)黒一、後手十六目得 黒一は、それ程大きくもない様に見へますが、此曲りは、後手十六目の得となる處であります。

で圖の様に黒一に打てば、次に黒イ、白ロ、黒ハ、白ニの先手利きとなり。又白から一に打ちますと、次に白ホ、黒へ、白ト、黒子の先手利きとなります。

(二)白一、後手十二目半得 白一は面白い手筋で、斯う打てば、黒は二に應けるの外なく、次に白三、黒四、白



五の盤となり、此盤りは十二目の手となります。て此計算は若し黒先とすれば、黒は四に粘、白イ黒五となります。又圖の様に白五に盤りとなつて後は、次に白ロ、黒ハ、白ニに打つ手が五目となりますから、此半數二目半を加へ、十二目半の手となります。

(三)白一、後手十四得 此手は大きい上に、且つ味の好い處であります。若し黒先とすれば、黒一に曲り、白イ、黒ロ、白ハ、黒ニの粘となるので、斯うなれば、隅は安全であります。圖の様な形となると、白からホに尖附らるゝ味もあつて、猶此石を攻めらるゝ手が残つて居ります。

第十一圖

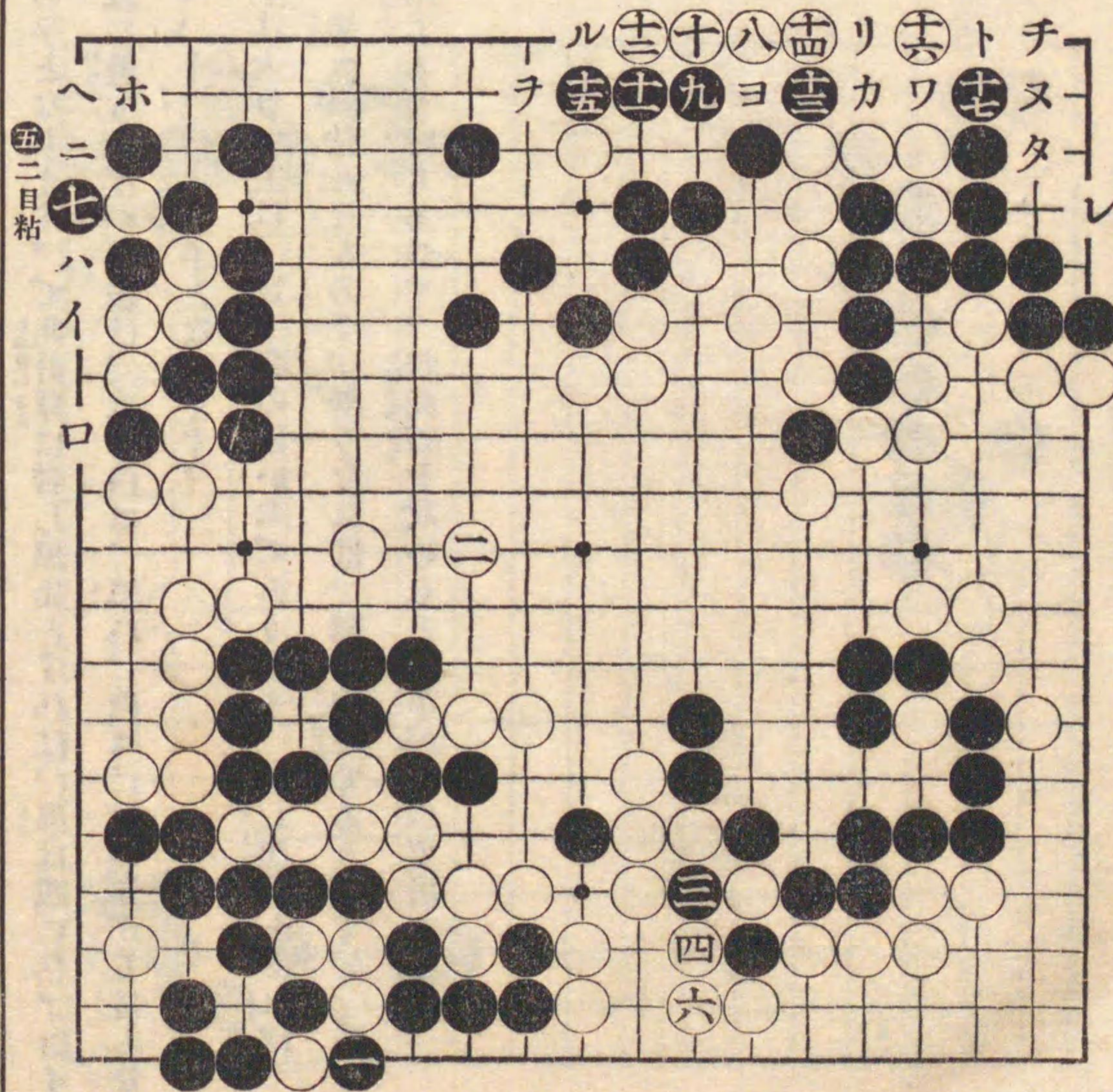
前圖までは、

實戦に能く出来る圖について、其一部分の形を取り、其手が幾目に當るかを説明したのであります。此處には實例として實戦圖を掲げ、其收束の手段を説明する事に致します。

此圖は明治初年本因坊秀甫(八段)と、水谷縫次(七段)との對局で、水谷氏先相先番五目敗に終局した碁であります。

で圖の形で、黒一に劫を打抜、白二に打て中の黒八目を

地取篇(侵分之部)第十一圖



圍んで後は、最早死活の變化も無く、侵分に移つたのであります。

で初めに黒一の打抜は、白から打てば寄劫となりますが、然し、此黒の大石の死活に關する大劫でありますから、黒は止むを得ず一に打抜、次に白二に打て黒を圍み之を捕虜としたので、此二の手は侵分から見ると計算しますと、約二十四目の手となつて居ります。

黒三は、圖の様に白四に當て、黒五に粘、白六に守りとなり、先手となるので、此手は、白から四に抜かれる形に較べると、先手五目得となります。

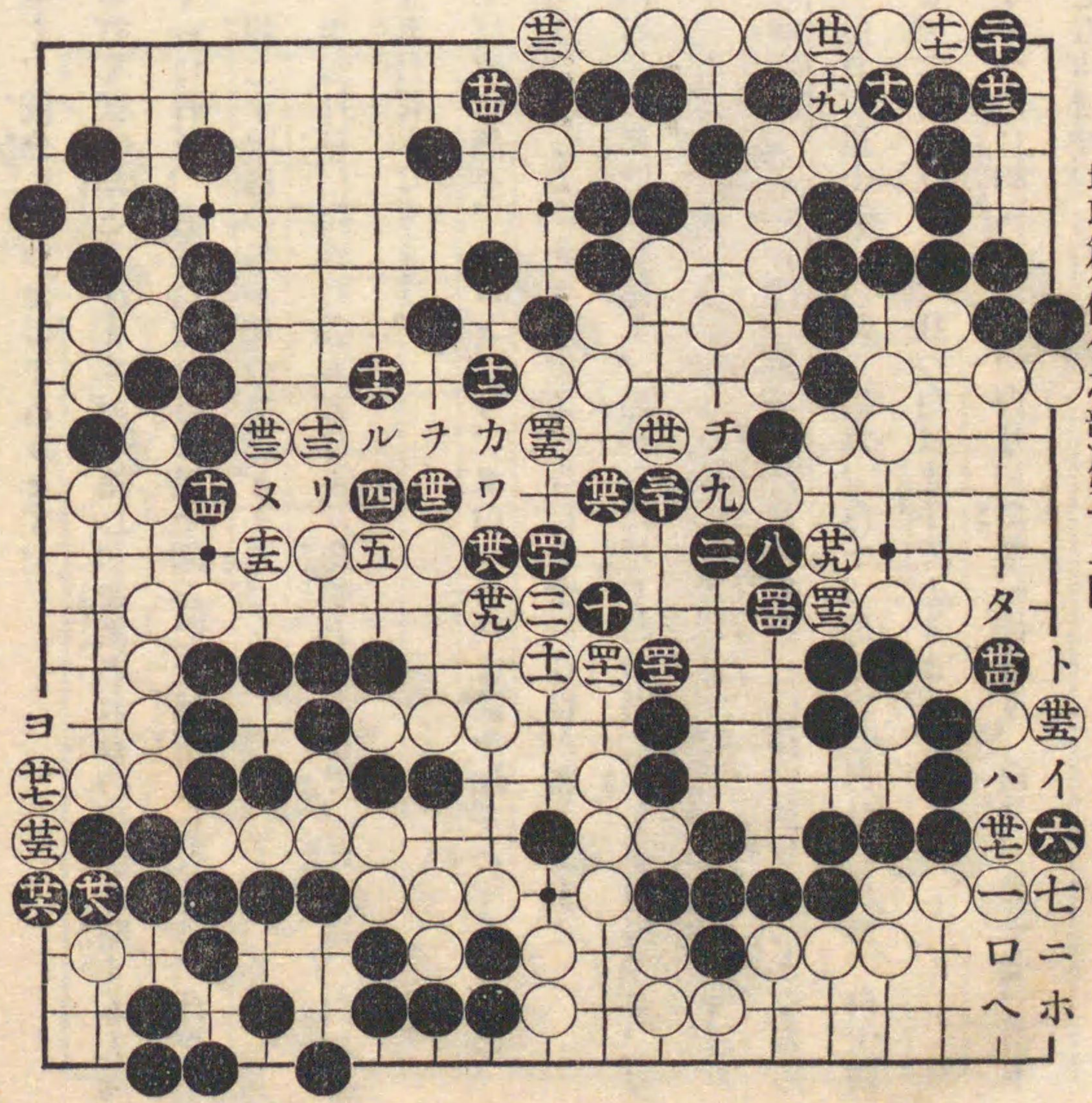
黒七後手十一目得 斯う打てば次に黒イ、白ロとなり。又白から八に抜かれると、次に白ニ、黒ホとなり。次のへに打つ手は約五目として、此半數を見、合して十一目得となります。

白八、先手七目得 此處は隅の黒の死活の關係上、黒からは早く白の出を塞ぐ事の出來ぬ、黒に取つては打悪い場所であります。て斯様に白が八に打つた時は、黒は九に應け、以下黒は十五に守り、白十六、黒十七と應け、猶次に白トに出れば、黒チ、白リ、黒又、白ル、黒ヲ、迄となるので、此形を黒先としてワに緯ね、白カ、黒十七、白八、黒九、白十、黒十二、白リ、黒ヨ、白十四、黒十一までとなつた形と較べると、七目の違ひで、且つ白は先手であります。

又圖の變化の中で、黒十一の手で十二に約へますと、白リ、黒十一に守り、白又、黒十七、白ト黒夕、白レとなつて隅の白は死となります。

第十二圖 (前圖のつゞき、前圖十七までを、白〇、黒●にて記す)

白一、後手七目得 侵分も進行するに従ひまして、追々細くなるので、最早圖の形となりますと、白一に下る手、後手七目の手が一番大きい處となつたのであります。此計算は、圖の様に白一、に打てば、黒六、白七、黒イ、白三五と見。又黒から打つには先づ一に縛ね、白ロ、黒ハ、白三十四、黒ニ、白ホ、黒七、白へ、黒三十五、白ト、黒イ



地取篇(侵分之部)第十二圖

と見て、其差七月となります。

黒二は侵分の手と見るよりは、寧ろ中央の關係で打つた手で、之れは白の隙をウカガつて居る面白い意味の着手であります。故に白も三と打つて確に黒を圍み、中の形を定めたのであります。

黒四の時は、最早八目の黒を逃出す手も無くなりましたから、外から覗き、白五に粘、次に黒六白七も當然の應答。黒八は、子に逃出す意味と、且つ中に數目の地を作る手であります。故に白は九に守り、黒十、白十一の守りとなつたのであります。

黒十二は一層此方面の地を擴張しようとする手で、此際では他に善い侵分の打場所もありませぬから期く打て白の應手を覗つた譯であります。

白十三の時黒十四の手で、若しりに出、白又、黒三十三と切りますと、白ル、黒三十二、白ヲ、黒ワ、白カと打て逃出します。

白十七、先手三目得 此形は、外側の關係により其損得も多少異なりますが、前にも説明した通り實戦では一番多く出来る形で、侵分として大切の處であります。

白二十三、先手三目得 之も黒先二十三に約へる手と較べると三目の違ひとなります。

白二十五、先手三目得 黒先此處を打つとすれば、二十七、白ヨ、黒二十五となります。で此

二十五、二十三、及び十七の三手は、皆同様先手三目の得で侵分として先づ同意味の場所と見てよ

いであります。

白二十九後手五目得 此時には白に先手も無くなり何處も後手ばかりでありますから、其中では一番大きい白二十九に打つたので、此手は黒から二十九に出られる手と較べますと五目の處であります。

黒三十六では先手でイに打ち、白々となつて後に、三十六に打つ手もありますが、此處に至つては最早黒の敗は歴然として如何に能く收束するも、黒には勝の無い形勢となつたのであります。

死活篇 (其の十)

死活の概要

前卷までに、種々の形、又其形による種々の手筋によりまして説明致しました、死活を、此處に大別して見ますと、左の數種とになります。

- 一、活
- 二、死
- 三、攻合
- 四、盤
- 五、斷
- 六、小を捨て大に就く形 (提返し、打替、押つぶし、追落)
- 七、劫

以上七つとなります。又此七つの中の各々に、形、手筋、時機の三つがあります、此三つは總ての死活を研究するに必要でありまして、之れを若し能く了解し實戦に應用すれば、如何に難解の形でも、容易に其石が死、活、或は劫、攻合となるかを知る事が出来ます。

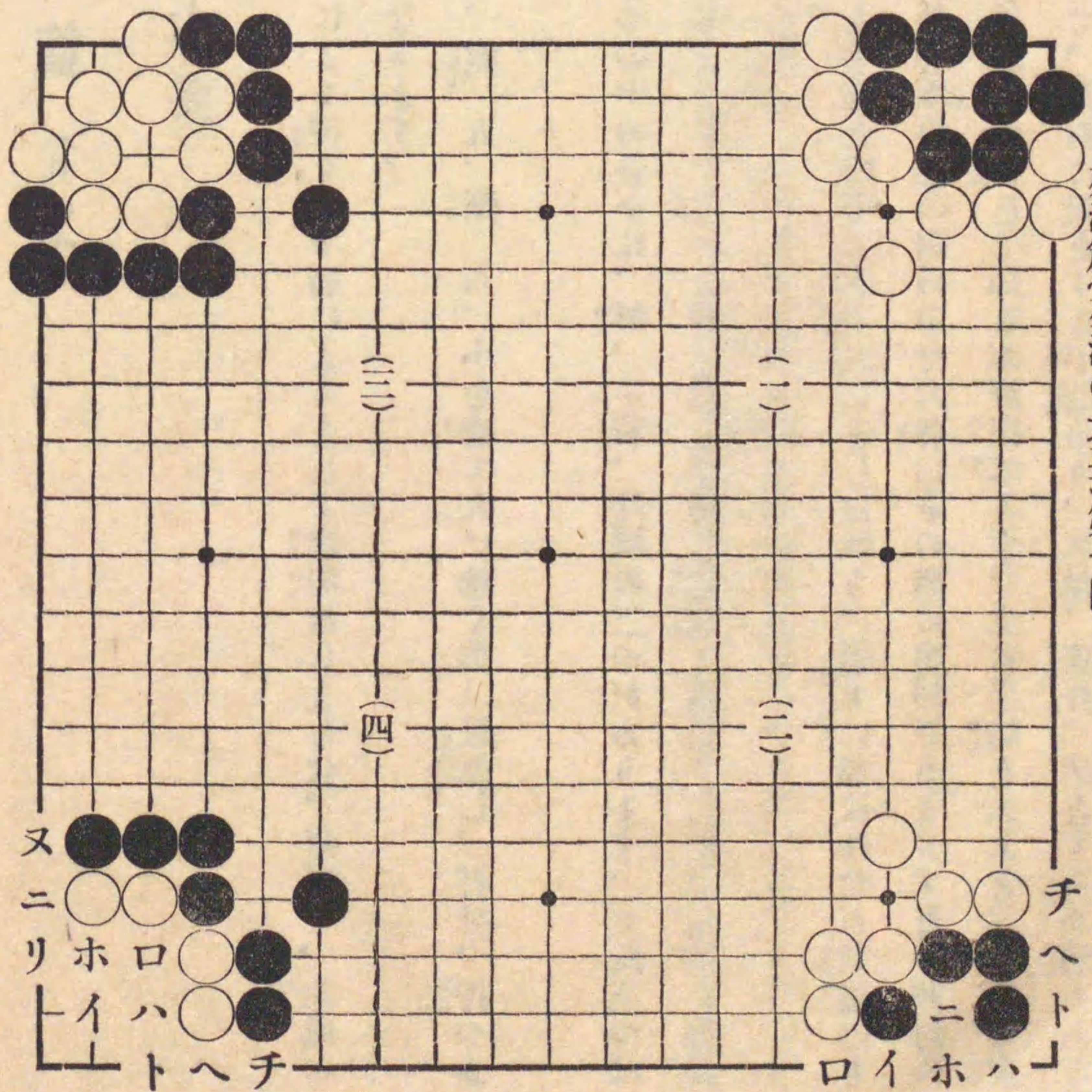
で此中、形と云ふのは、前の形と手筋との中で説明致しました通り、盤上に現はれた石其儘のものを云ふので、斯く盤上に現はれた有りの儘の圖の中で、若しその形に明かでありますと、其何れが死となり、攻合となり、劫となるかを一見して知る事が出来ます。次に手筋と云ふと、前にも度々説明した通り、形の異なるに従つて、其石に死とする手筋あり、又劫、攻合、活とする手筋もある

ので之等をよく研究すれば變化を考へるまでも無く、簡単に其結果を知る事が出来るのであります。

時機と云ふと、實戦に臨みまして或る形に遇つた時に、単に形、又は手筋で此石は死或は劫であると云つても、若し其局面の全體の形勢を見ず、時機を誤る時は却て不結果を招く基となる事もあります。

で時機を知るは、局面の時々形勢によるの外はないのでありますから、之は實戦、

死活篇(死活の大要)第一圖



打碁の中の研究にゆする事としまして此處では形と手筋につき、實戦に多く見る圖を掲げ説明する事と致します。

活の形と手筋 活と云ふと、簡単に云へば、組織に缺點の無い眼を二つ、或は以上有するもので、之は今更説明する迄も無いのでありまして、種々變化した形となつて現はれても、要するに、之が複雑したものに過ぎぬのであります。

第一圖、(一)二眼の活つ 活の原形であります。此二眼活は、實戦では何んな形から變化して、斯うなるかと云ひますと。

(二) 此形は今の處では無論(一)とは異つて居りますが、若し此形で黒先イと打て活とし、白口黒八に手入れとなりて後、白ニ、黒ホ(此ニ、ホは所謂地入りハコ入りで損得はありませぬ)、白へに綽ね、黒ト、白チの侵分を打ち終りますと、全く(一)と同形となります。

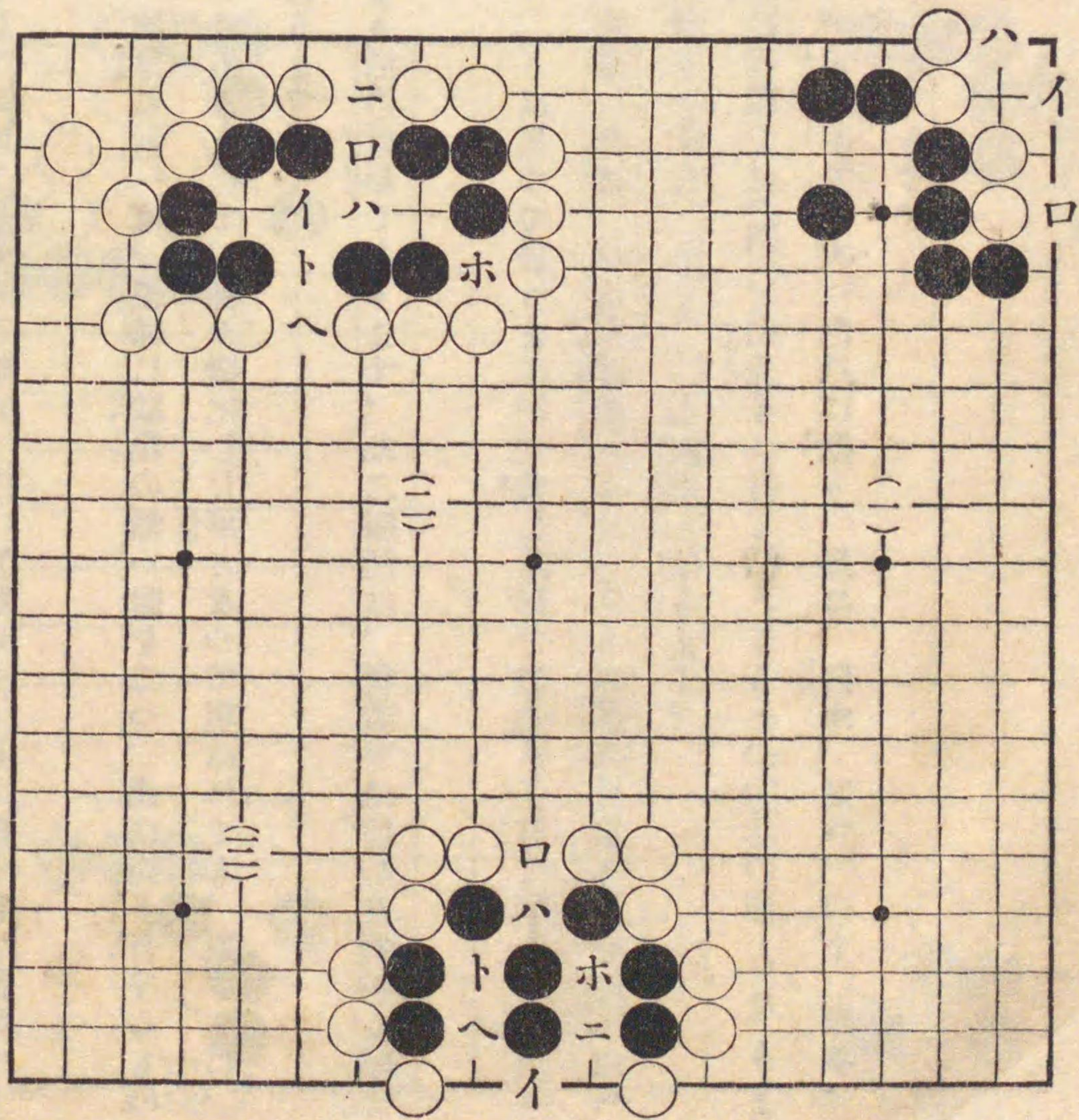
(三) も二眼活の原形で、此形は實戦では(四)、白先イに打て活とすると、(三)の形となります。侵分に入つて後黒ロに切るのが善い手で、次に白ハに提り、黒ニ、白ホ、黒へ、白ト、黒チ、白リ、黒又となつて、(三)と同形となります。

第二圖、(一)二眼の活

白先イに打ち、黒ロ、白ハと打て二眼の活となります。

(二)、黒先イに打ち、白ロ、黒ハ、白ニ、黒ホ、白へ、黒トに打て二眼の活。此形では黒イに打つ手が善い手で、外の手では、何處へ打ても黒死となります、假りにイをハに打つとしますと、白ト、黒イ白へと打ち、一方は缺眼となり。又黒ハをトに打ちますと、白ハ、黒ロ、白イに打て、三目點死となります。

(三)、此形は黒先イに下る

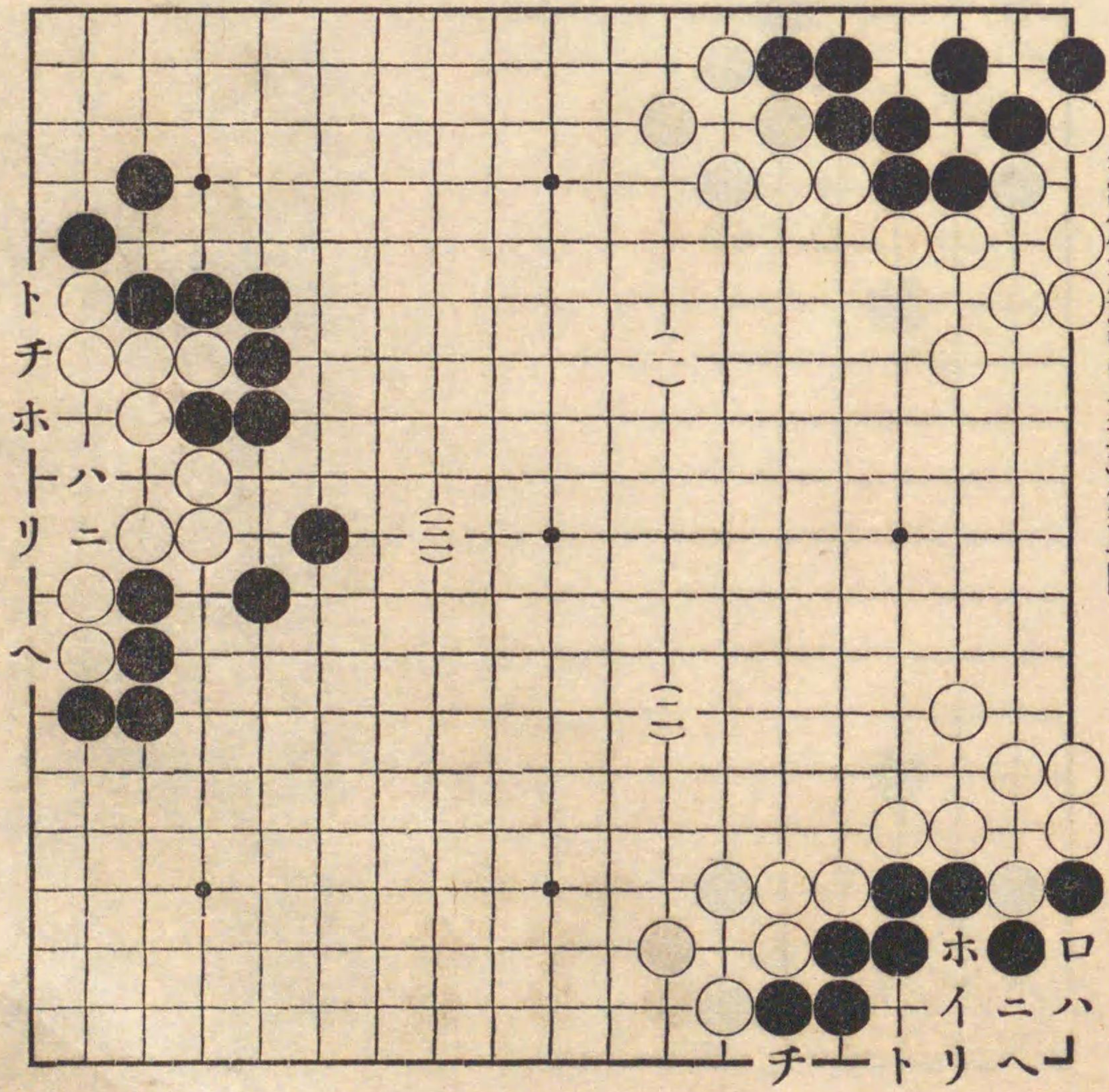


死活篇(死活の大意)第二圖

のが好い手で、之て黒活となります、此時白ロに打てば、黒ハ、白ニ、黒ホ、白へ、黒トに打て二眼活となります。

第三圖、(一)二眼以上活の

形 形によりては一着で二眼以上を得られる活の形もあります、相手に若し其要點に打たれると一度に之等の眼の形を奪はれて死の結果となる形もあります。(二)は其一例で、斯うなつて居れば、黒は多くの覗の持ち、無論活てありません。此形は(二)圖、黒先イの要所に打ち、白ロ、



死活篇(死活の大意)第三圖

黒ハとなつたのと同じであります。處が此形を若し白先、此要所に先着を下されますと、一度に眼の形を失ひ、黒死となります。變化は白先二と付けます。黒口、白イ、黒ホ、白へ、黒ト、白チ、黒ハ、白リと打つて、五目點死となります。

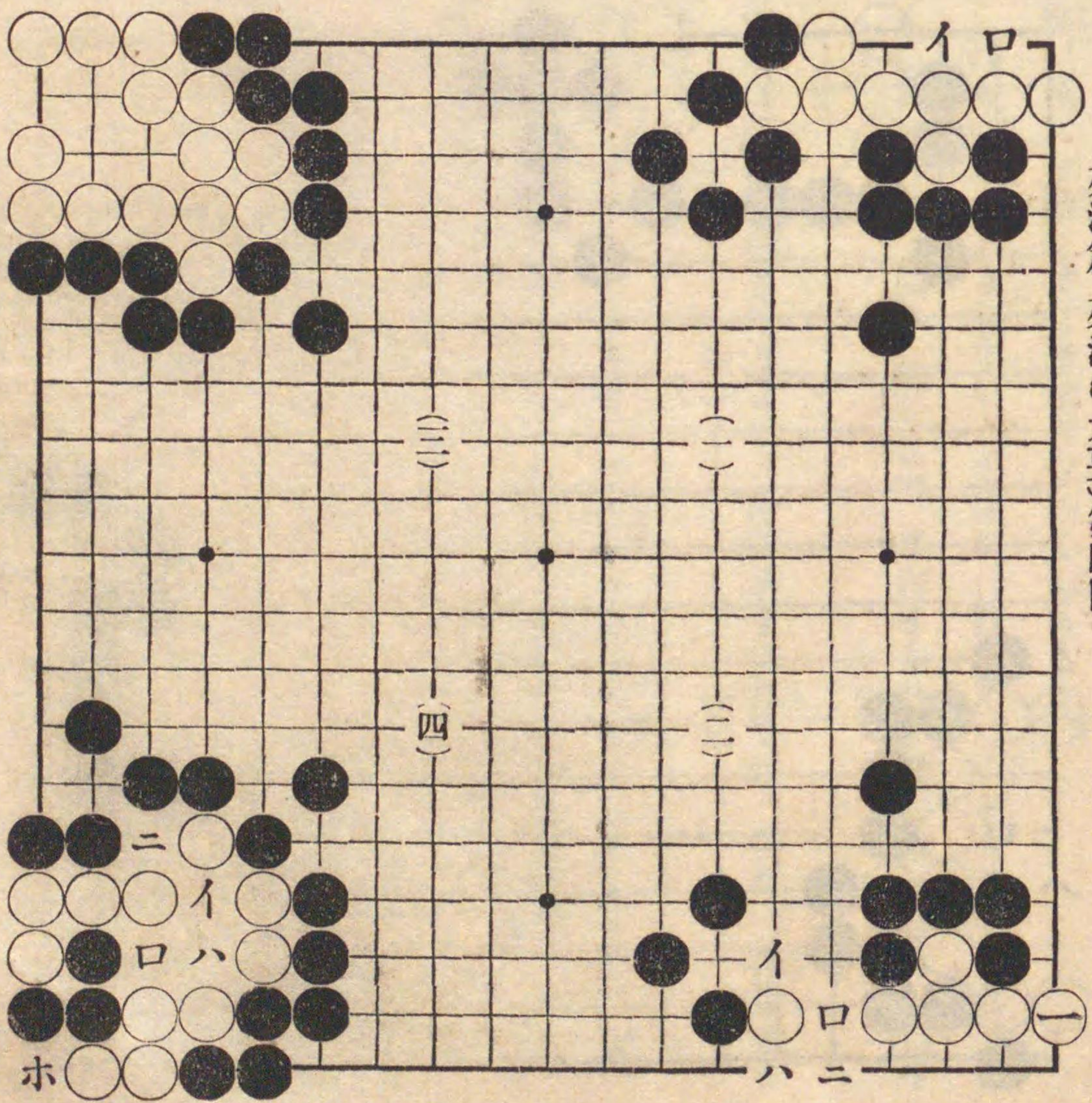
(三)白先ハの要所へ打てば、多くの眼形が出来ますが、若し此點を黒から先きにハと打たれますと、白二に粘ぎ、黒ホに尖み、白へ、黒ト、白チ、黒リと打て、同じく五目點死となります。

第四圖、(一)四目活の形

活も前に述べました通り、一眼づゝ別々に二つ無くとも若し四目或は以上の形となると、(四目、五目點は別)組織に缺點が無ければ大抵は活となつて居ります。(一)は長四目の活で、黒イなれば、白口又黒口なれば白イと二眼となります。で此形は、(二)白先一に下り、黒イ、白口、黒ハ白二となると、前同様、長四目の形となります。

(三)は同じ四目でも、曲り四目の活であります。で此形

死活篇 死活の大意 第四圖

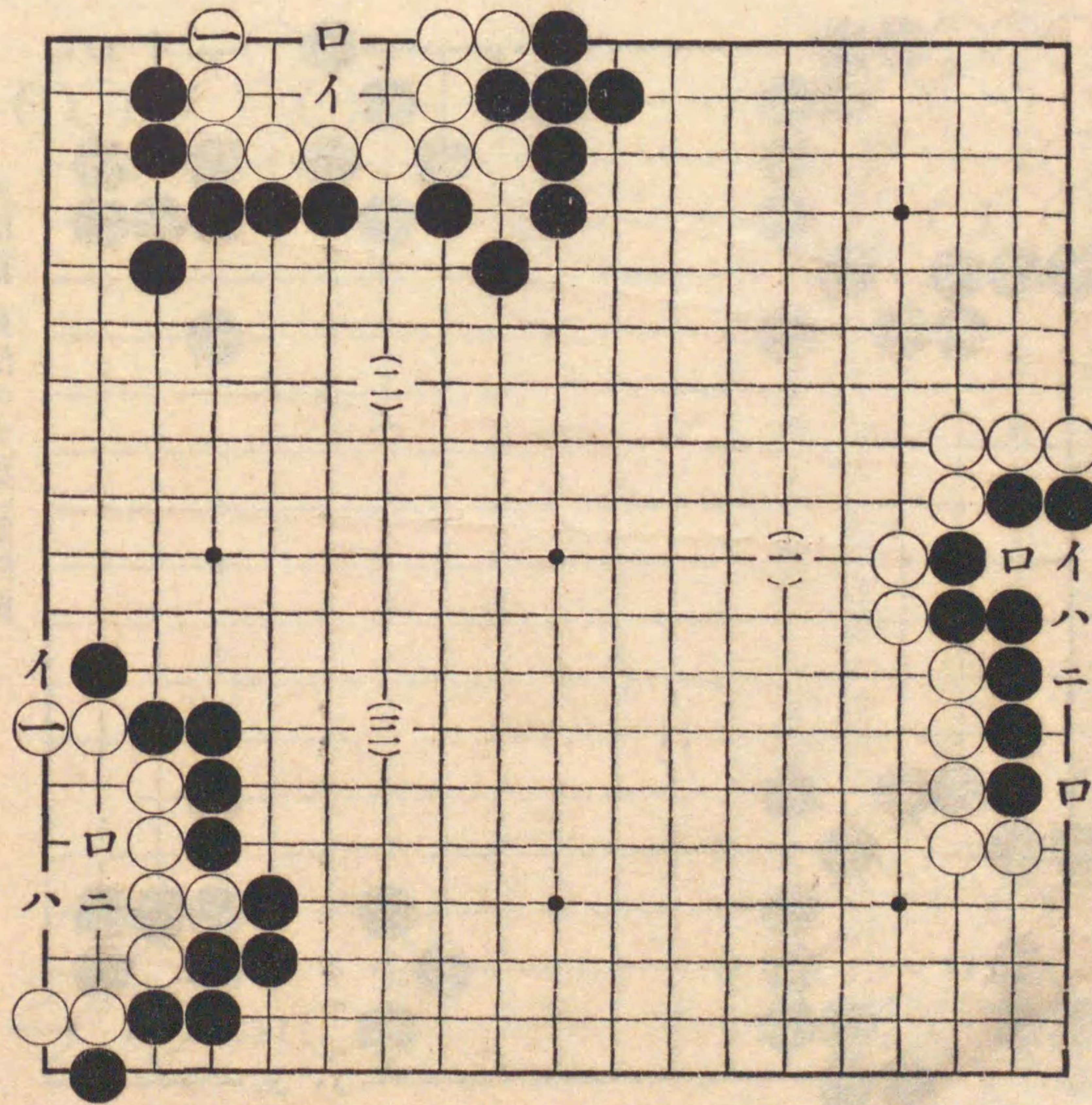


は、(四)圖白先イに打ち、黒
ロ、白ハ、黒ニ、白ホに打抜
きました結果、(三)と同じと
なります。

で此變化の中で、白はイに
粘ぐ手が善い手で、外の手で
は、死或は持となります。變
化は此時白ロに打てば、黒イ
に打缺、白ハ、黒ニと打て缺
眼一眼、又白ロをハに打てば、
黒ニに當り、白イの粘となる
ので、之は白後手の持であり
ます。

第五圖、(一)五目以上活の
形に缺點のある場合は

死活篇(死活の大要)第五圖



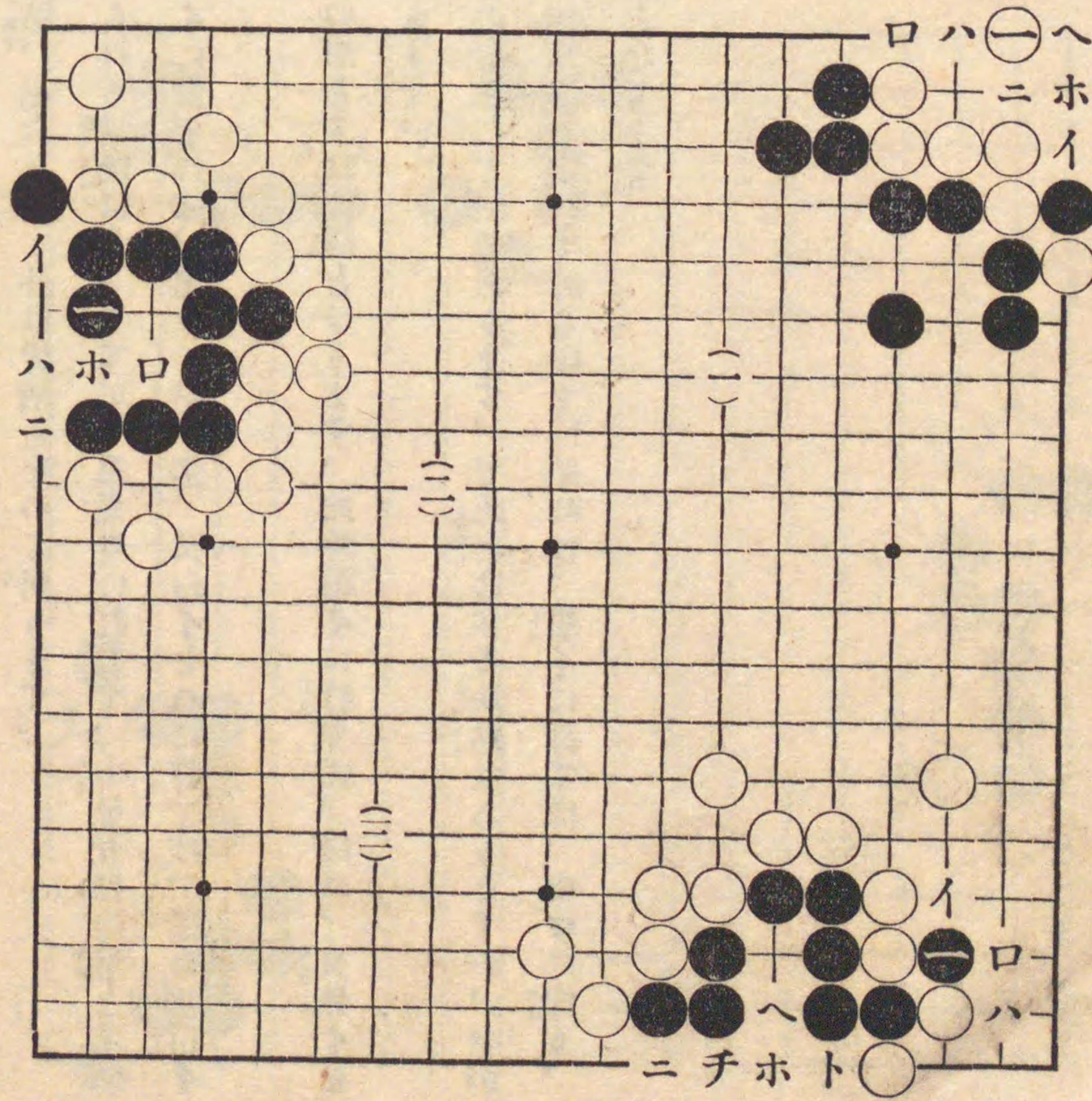
別として、五目以上の形では五目點、花六を除く外は皆活となつて居ります。

其例は(一)では白からイと當てられる缺點はありますが、黒先ロに打つて、中を五目の形とすれば活となつて居ります、此時に白イに當てれば、黒ロに粘ぐ迄。又白イをハに打てば、黒ニ、白イ
黒ロに打抜いて二眼となります。

(二)、白先一に下り、中を六目の形とすれば活となります、此時黒イに打てば、白ロ。又黒イを
ロに打てば、白イに打ち二眼となります。

(三)、白先一に下り、中を八目の形として活であります。で此形は多少缺點はありますが、中が
八目もありますから、此缺點を補つて活となつて居るので、此時に、黒イに打てば、白ロに守り、
黒ハに打てば、白ニと打つて二眼となります。

第六圖、(一)三目を提て活とする形 普通二目を打抜く形は次に敵に打抜かれて、缺眼となるので、之は前にも、度々實例に出た通りでありますが、三目の打抜となると敵に打抜かれても猶一眼を作る餘地があるのであります。故に形によりては、敵の石を三目として打抜く様に打て、二眼を得る手段もあるので、其例は、(一)白先若しイに打抜きますと、黒はロと縛ね、白ハ、黒ニと打つて死となります。



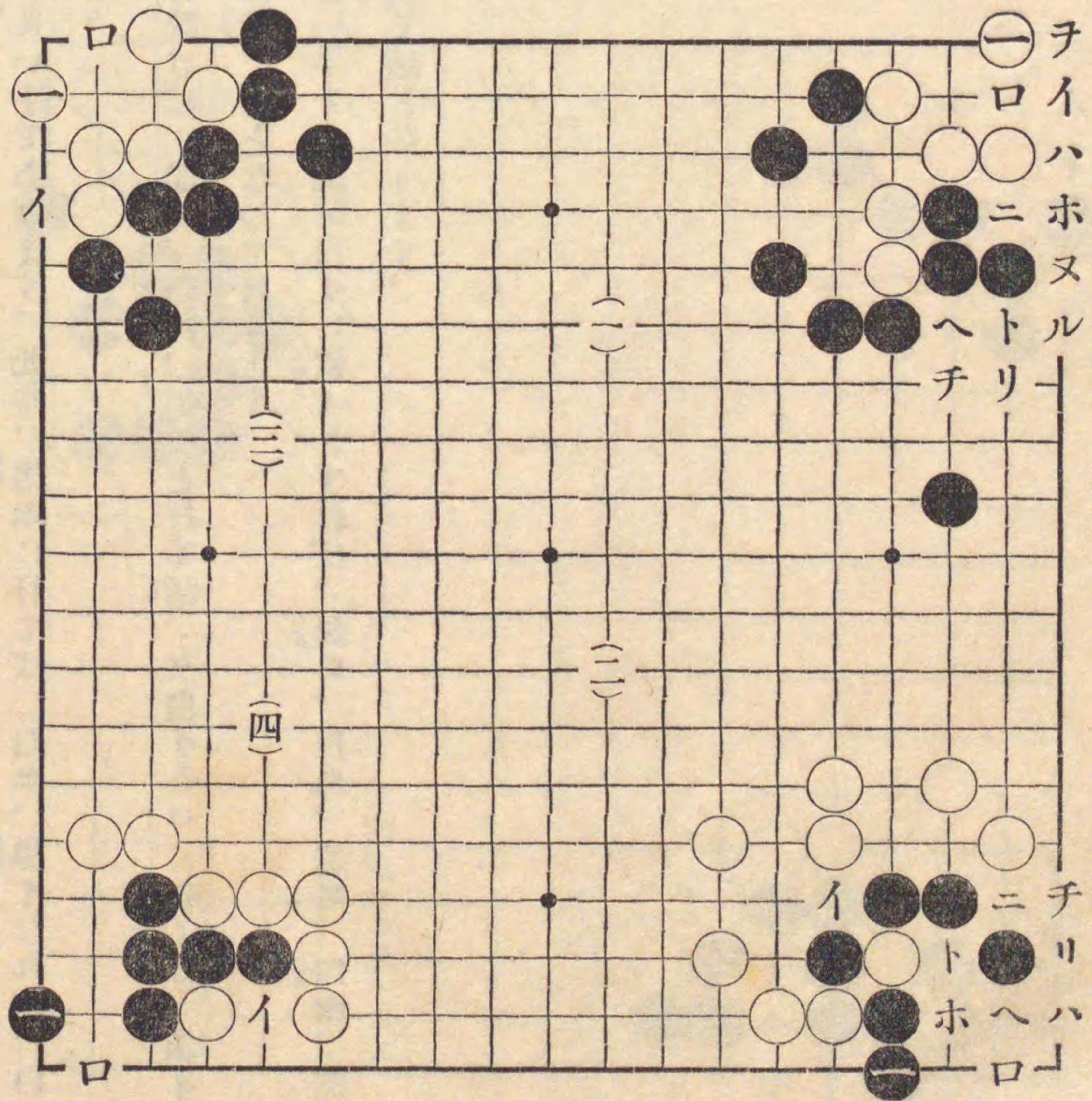
死活篇(死活の大要)第六圖

故に此形では、白一と打つ手が良い手であります。此時、黒ホに打てば、白ニ、黒イなれば、白へに三目を打抜いて活となります。 (一)、黒先一に打ち、白イに打抜けば、黒ロ、白ハ、黒ニと打て活。又白イをロに打てば、黒イ白ハ、黒ニ、白ホに打つも、黒は持て活となつて居ります。 (二)、黒先一と切る手が大層善い手で、此時白イに當りとすれば、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホ、黒へ、白ト、黒子に打ち、三目を提て活となります。

第七圖

(一)と(二)三目を提て活とする形 (一)、白一に打ち、黒イ、白ロに粘ぐ手が善い手であります。黒ハに引いた時、白次にホに二目を取れば、黒ニとなり、此二目の提では、黒に打缺かれて死となりますが、白はホをニと打ち黒ホ、白へ、黒ト、白チ、黒リ、白又ニに打缺、黒ル白ヲと三目にして提て、活となります。

(二)此圖は込入つた形で、變化も複雑して居りますが、此時、黒一に下る手が善い手



死活篇(死活の大意)第七圖

筋で、之で黒活となつて居ります。白イに打缺けば、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホの時、次に黒は直にトに抜かず、へと打て活となります。

(三)、(四)二ノ一に打て活とする形 二ノ一に妙着あり、とは昔から云ひ傳へられて居るのであります。隅の死活では、此「二ノ一」の筋が一番急所となつて居ります。

今二、三其例を擧げて見ますと、(三)、白一と二ノ一の筋に打つて活となります。此時に黒イに縛れば、白ロ。又黒イをロに打てば、白イに打て、二眼となります。

(四)、黒一と、二ノ一に打つのが好い手で、此時白イに粘れば、黒ロ。又白イをロに打てば、黒イと打て活となります。

た跡に點とせられて死となつてしまひます。處が若し取らずに置けば、相手からも取る手は無く、其形は其まゝで、持、即ち活となつて居ります。

(一)では、黒先一に打ち、白イなれば、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホの時へと打て持とします。

(二)、白先一、黒二、白三、黒四、白五と打て持となります。で前述の通り、此石は若し白からイに打てば、三目は提れますが、其代り次に白ロに打抜いた時に、中間に點せられて死となり。又黒から此石を取るふと、イに打ちますと、白に打抜かれて、長四目の活となります。

之は簡単な一例でありますが、持とは皆斯かる形となつて出来るもので死活には此持の形は、かなり多いのであります。

(三)、黒一に附ければ、白二、黒三の時、白四に打つ手が此場合の妙着で、之で持となります。

此時黒イに打てば、白ロ、黒ハ、白ニ、黒ホ、白へと打て持、又黒イの手をロに打ちますと、白黒ト、白イに一目を取返して活となります。

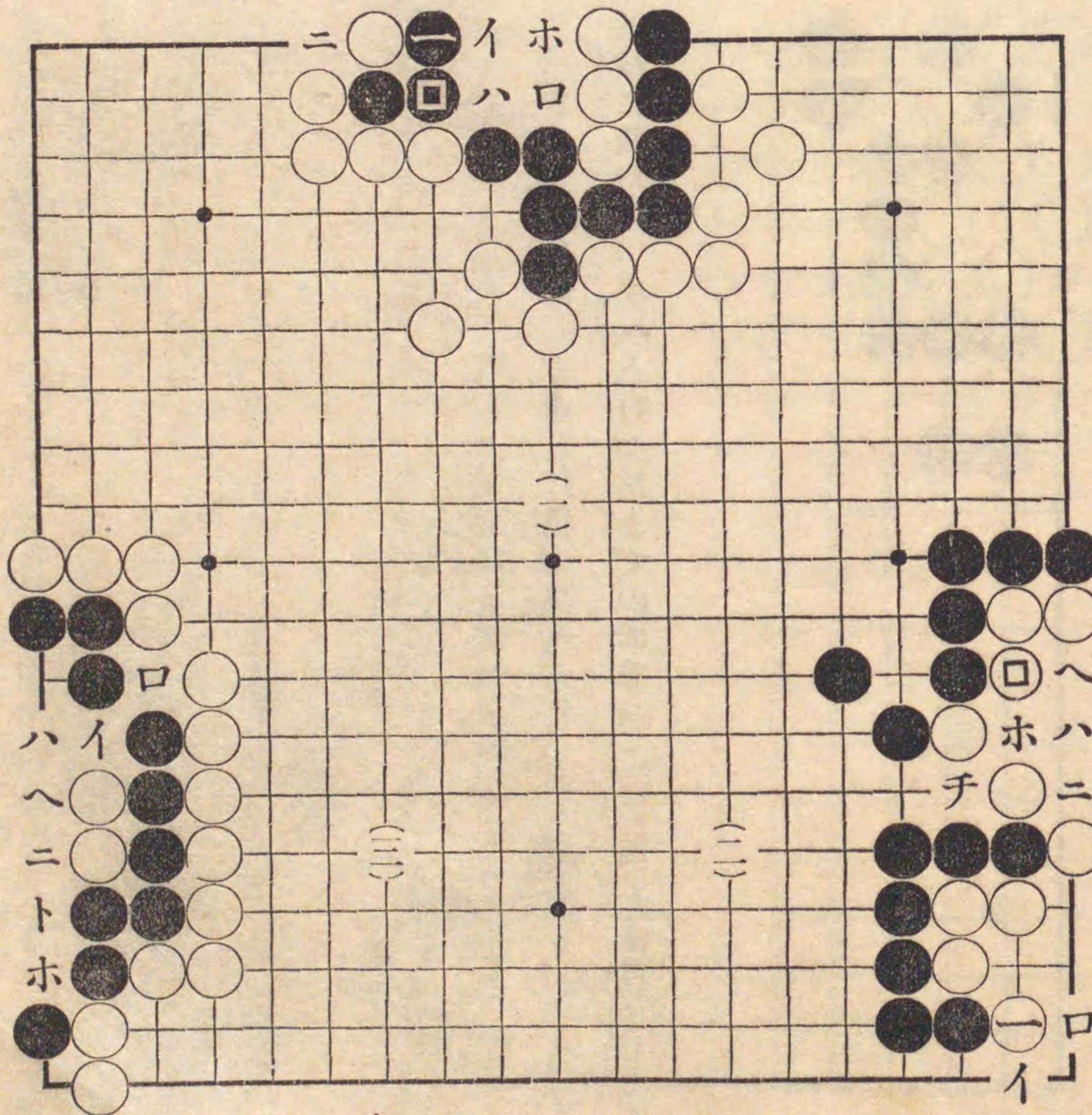
(四)、黒一、白二黒三に打ち、(三)と同じく持の形となります。

第十圖、(一)、(二)石の下

石の下とは、活の中での妙形でありまして、之は一旦石を捨て、次に、其捨てた提跡について活を得る方法であります。今(一)圖で見ますと、黒は此際イに掛粘げば、白にロと打たれ。又イをロに打てば白に一と打たれて何れも死となります。

で此形では黒一に約へる手が面白手であります。斯う打ちますと、白は無論ハに切り、黒ニ、白イとなつて黒三目は提られますが、其時、黒

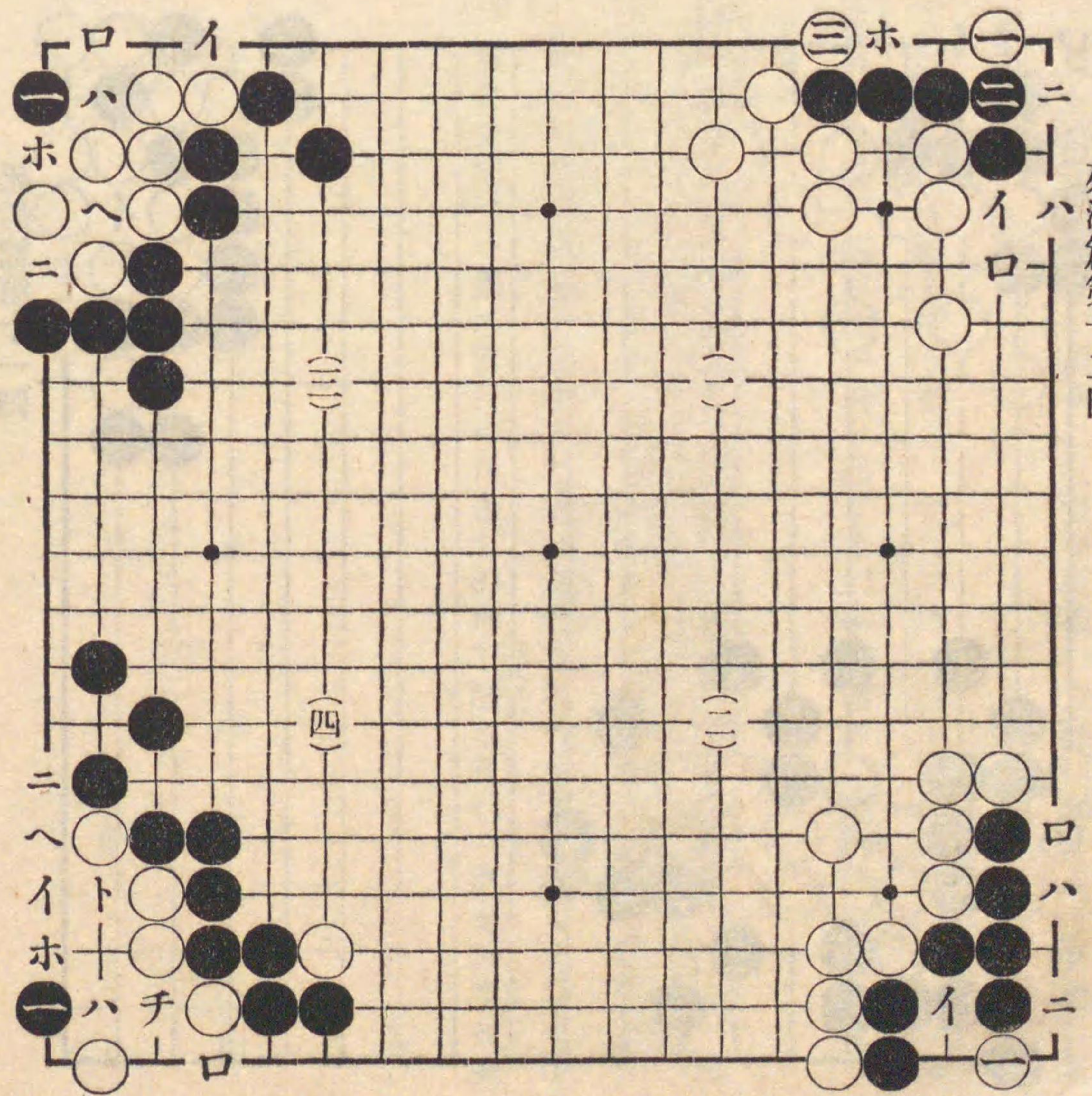
死活篇(死活の大意)第十圖



(三)、黒一に打ち、白いなれば黒口、白ハ、黒ニと打缺又白イを口に打てば黒ホ、白イ、黒ニ、白ハ、黒ニと打缺いて、同じく缺眼一眼の形とするのであります。

で此形では、初めに黒一に打つ手が、白の眼を取るに、一番善い手で、外の手では、何處に打ても、劫、或は活となります。

第十二圖、二ノ一に打て死とする形 二ノ一は石を活とするにも緊要の處でありますが、又眼を取るにも同じく



緊要の筋となつて居ります。

(一)、白先一（普通は此場所及び二の二點、之を四隅合して八點を二ノ一と稱へて居ります）、黒二に粘げば、白三、黒イ、白口、黒ハ、白ニと打て眼を取ります。で此時に黒ホに打つも、隅は隅曲四（コウツクシ）と稱へ、隅に出来る場合に限つて死となつて居ります。

(二)、白一に置き、黒イ、白口、黒ハ、白ニと打ち、前と同形、隅曲四の死で、隅では此隅曲四の形となつて、死となる場合が多いのであります。

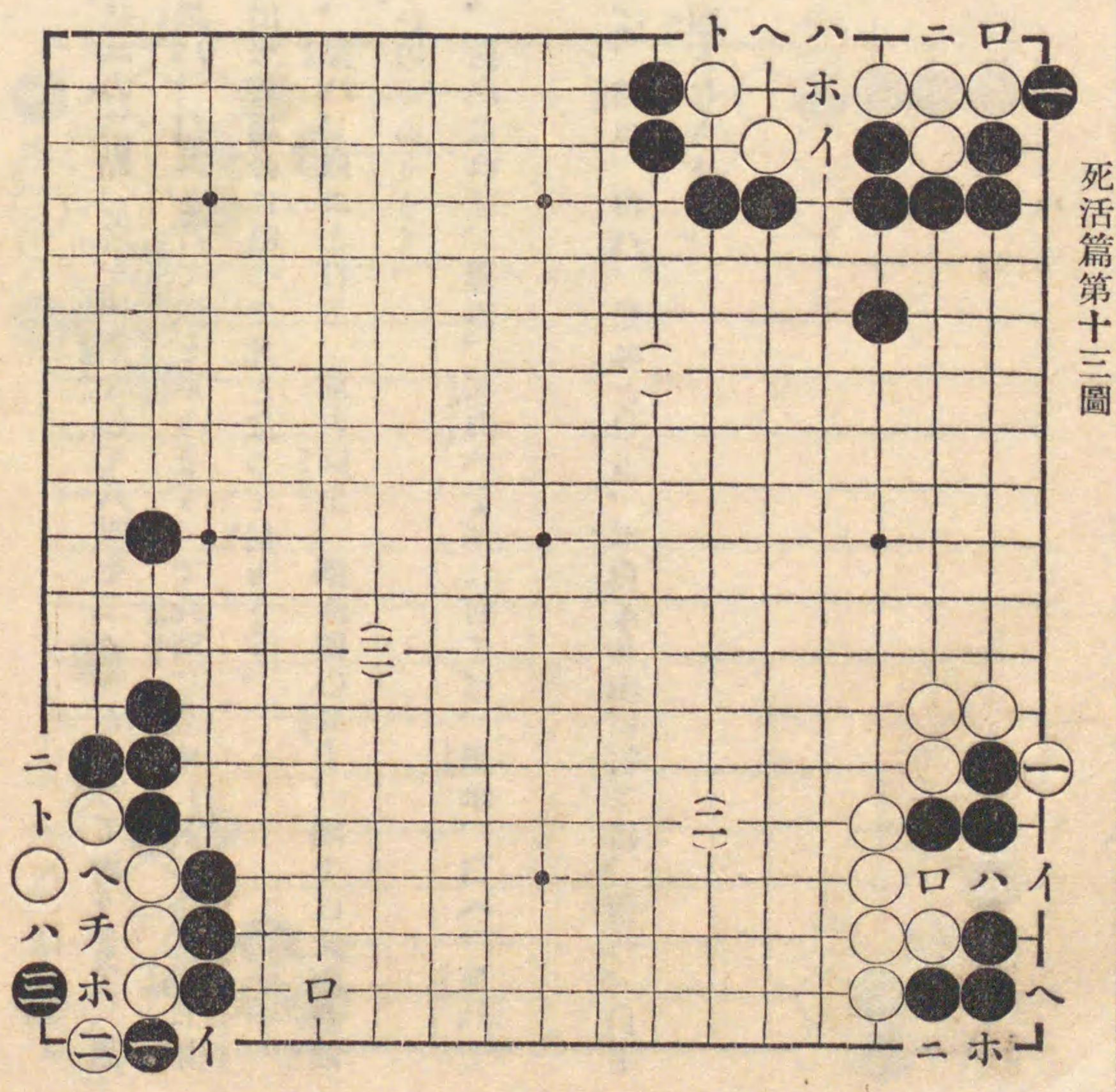
(三)、黒一に置き、白イ、黒口、白ハなれば、黒ニ。又白ハをニに打てば、黒ホ、白へ、黒ハと打て死となります。

(四)、黒一に置き、白イに打てば、黒口、白ハ、黒ニとなり。又白イをホに打てば、黒へ、白ト黒ハ、白子、黒口と打て何れも一眼となります。

第十三圖、縛殺し (一)

縛に妙あり、と云ひ、先づ眼を取らふとする時には、直に中に飛込むより、簡單に外から縛ねて、敵の眼を作る範圍を狭める方が、善いのであります。(一)圖で見ますと、黒は只一と隅から縛ねれば、白は二眼とする手無く死となります。此時に白いと打てば、黒は猶口と縛ね、白ハ、黒ニと打ち。又白イをホに打てば、其時黒への要所に打ち、白ト、黒口と打て死となります。

(二)、白一と外から縛ねる

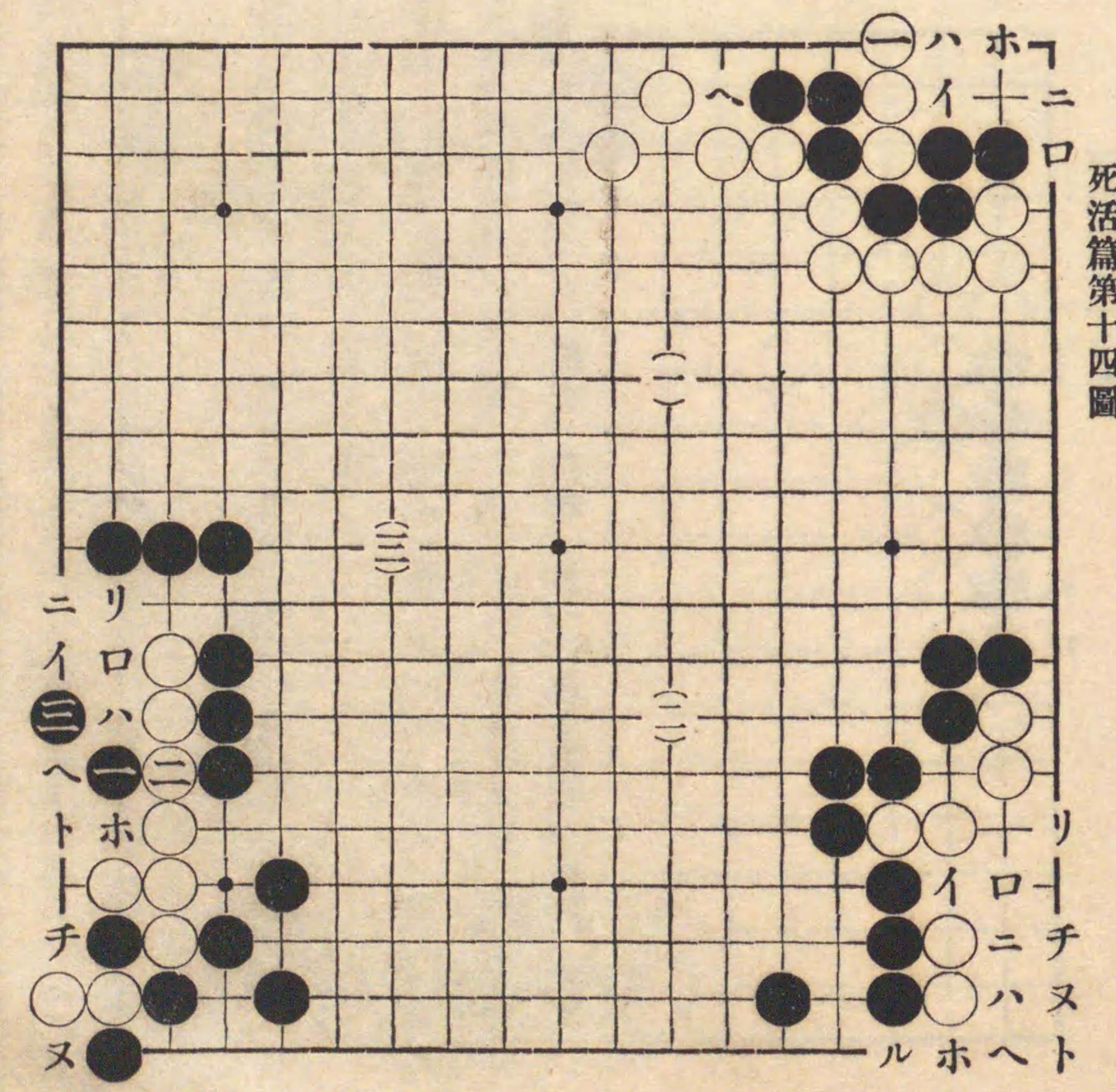


死活篇第十三圖

手が好い手てあります。此時に黒いと打てば、白口、黒ハ白ニ、黒ホの時に白へに點して死となります。

(二)、之は實戦に多く出来る形で、此時黒先一に縛ね、白二、黒三に置きます。次に白イに抜けば、黒口、白ハ、黒ニ、白ホなれば、黒への打込。又白ホを、トに打てば、黒チ、白へ、黒ホと打て、三目點となります。

第十四圖、石を捨て眼を缺く形 (一)眼を取るに先づ捨石を打ち、此手によりて眼



死活篇第十四圖

を缺く場合もあります。(一)圖は、白一に下り三目にして捨てる手が、大層良い手があります、黒次はイなれば、白ロ、黒ハ、白ニと打て死。又黒イに取る手をホに打てば、白先づニと置き、黒ロ、白へと打ちます。

(二)、黒先イと出、白ロ、黒ハ、白ニ、黒ホ、白へ、黒ト、白チ、黒リに飛込み、白又、黒へに粘いで四目にして捨て、白ル、黒へと點して、白死となります。

(三)、黒先一に覗き、白二、黒三とまづ盤りを打ちます。白次にイに打てば、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホ、黒へ、白トに三目を當りとすれば、黒は此三目を捨て、手に打ち、白イに打抜、黒三と提返して死となります。又白イに附ける手をハに打つと、黒イ、白ホ、黒へ、白ト黒チ、白ニ、黒リ、白ロ、黒又に打て死となります。

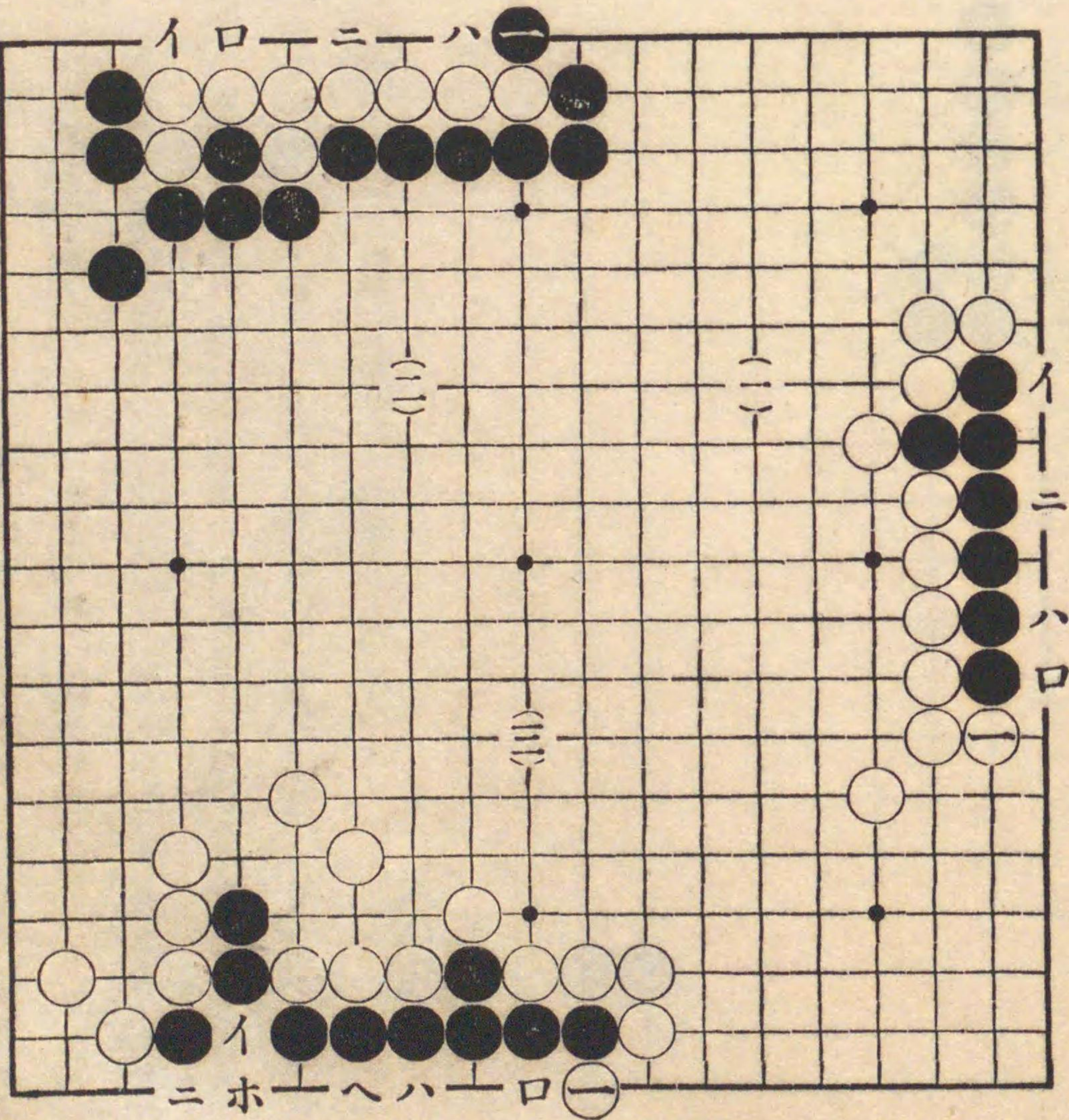
第十五圖、二線の連行六手

から八手までの死活 (一) 二線を這つて居る石では、其長さによりて、死活が各々異なります。

先づ六子では手を抜いても死となり、七子は一着カケレば死。八子となると、先きに打つても、活となつて居るのであります。然し之も其形の缺點の有無により異なるのでありまして、若し形に缺點のある時は、八子の長さでも、死となる事もあります。

先づ(一)では、黒は連行且

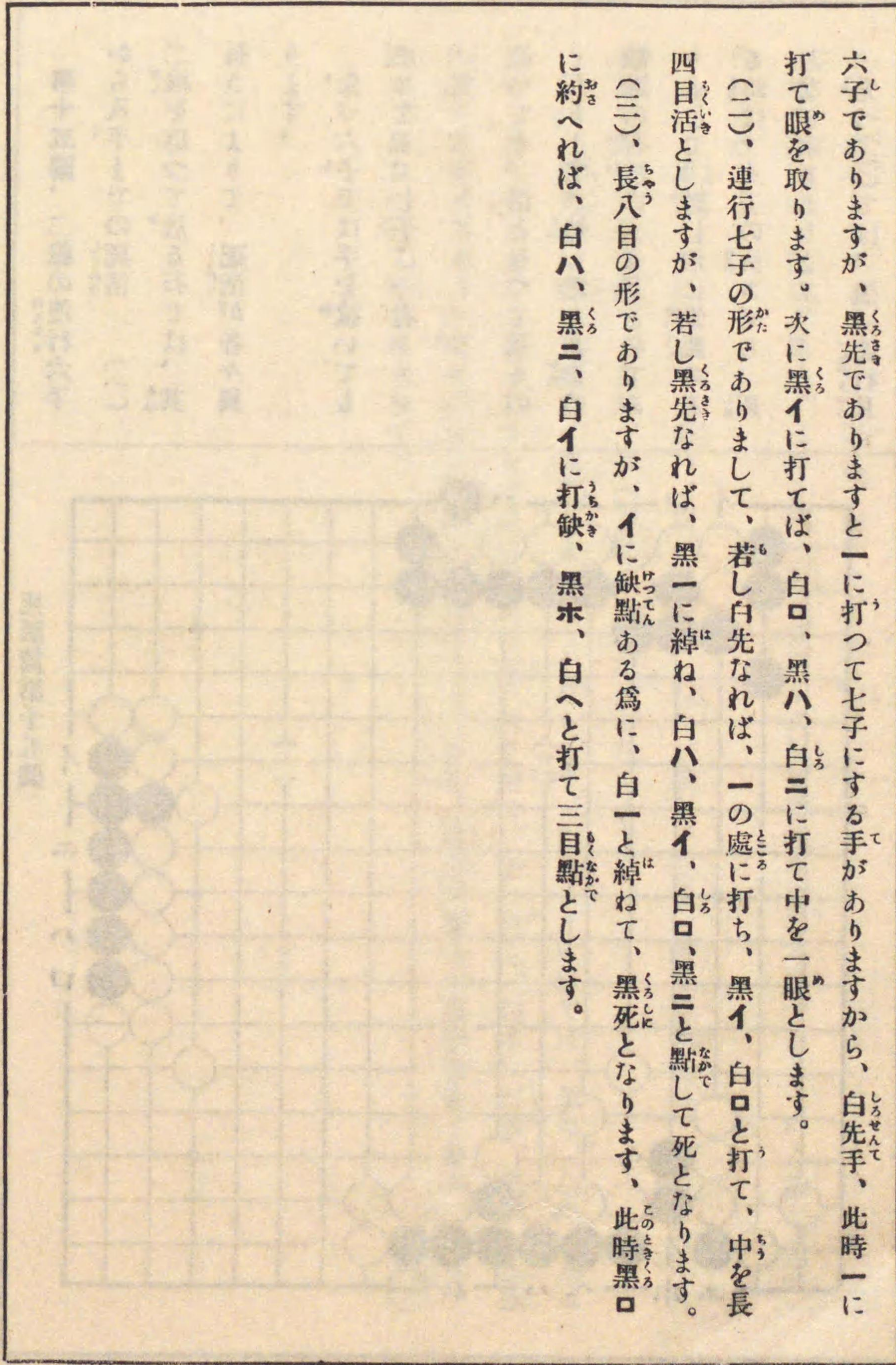
死活篇第十五圖



六子であります。黒先であります。一に打つて七子にする手がありますから、白先手、此時一に打て眼を取ります。次に黒一に打てば、白口、黒八、白二に打て中を一眼とします。

(二)、連行七子の形でありまして、若し白先なれば、一の處に打ち、黒一、白口と打て、中を長四目活としますが、若し黒先なれば、黒一に縛ね、白八、黒一、白口、黒二と點して死となります。

(三)、長八目の形であります。イに缺點ある爲に、白一と縛ねて、黒死となります。此時黒口に約へれば、白八、黒二、白一に打缺、黒ホ、白へと打て三目點とします。



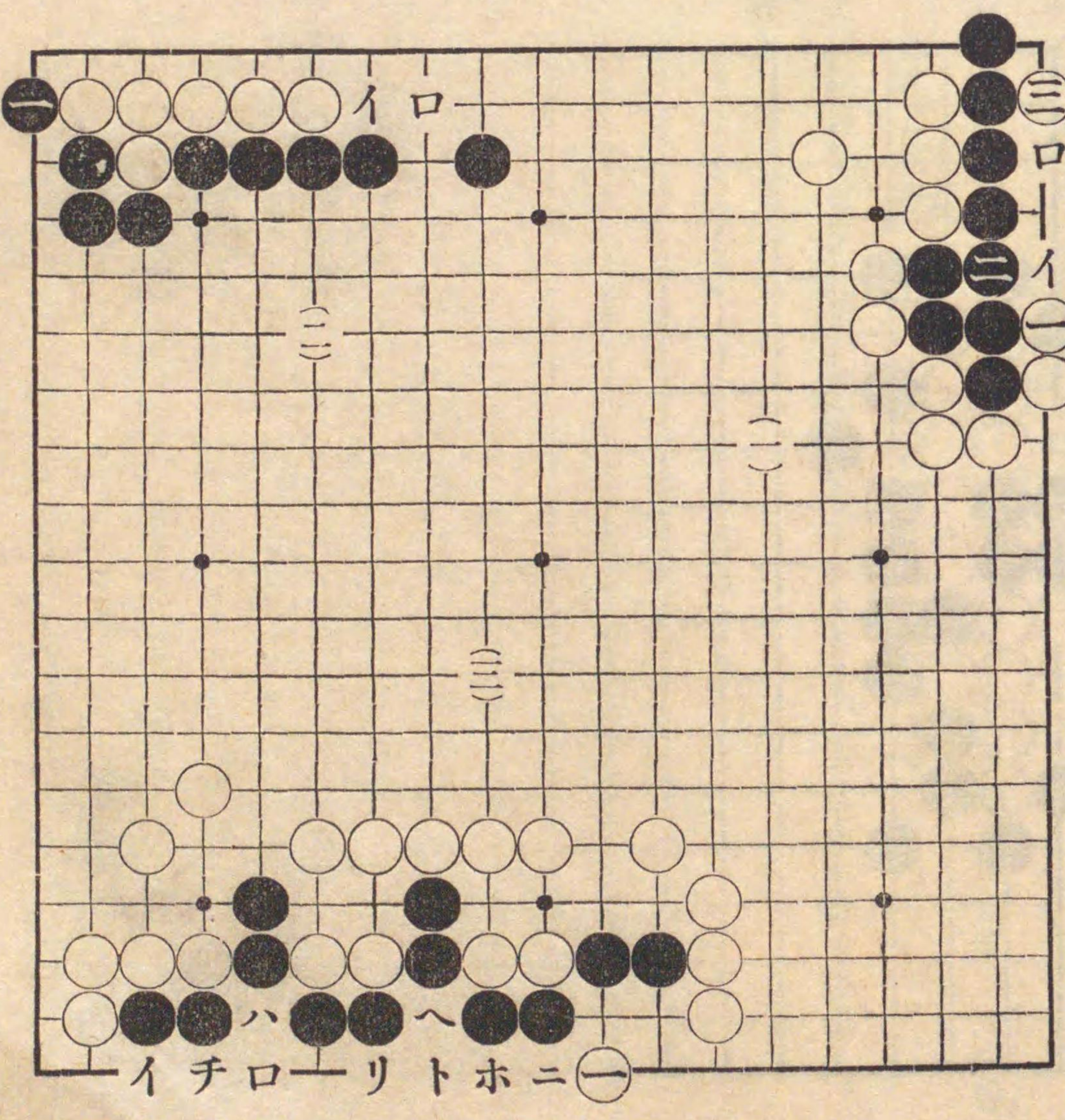
第十六圖、連行六子から八

子までの死 (一) 白先一に當り、黒二、白三と點し、黒一、白口に打て死となります。

(二)、黒先一と隅から縛ね白一、黒口に約へ、白は六子の長さで死となります。處が初め黒一に縛ねる手をイと約へますと、白一と隅に下るので之は同じ六子でも、其位置が隅にありますから、之で白活となつて居ります。

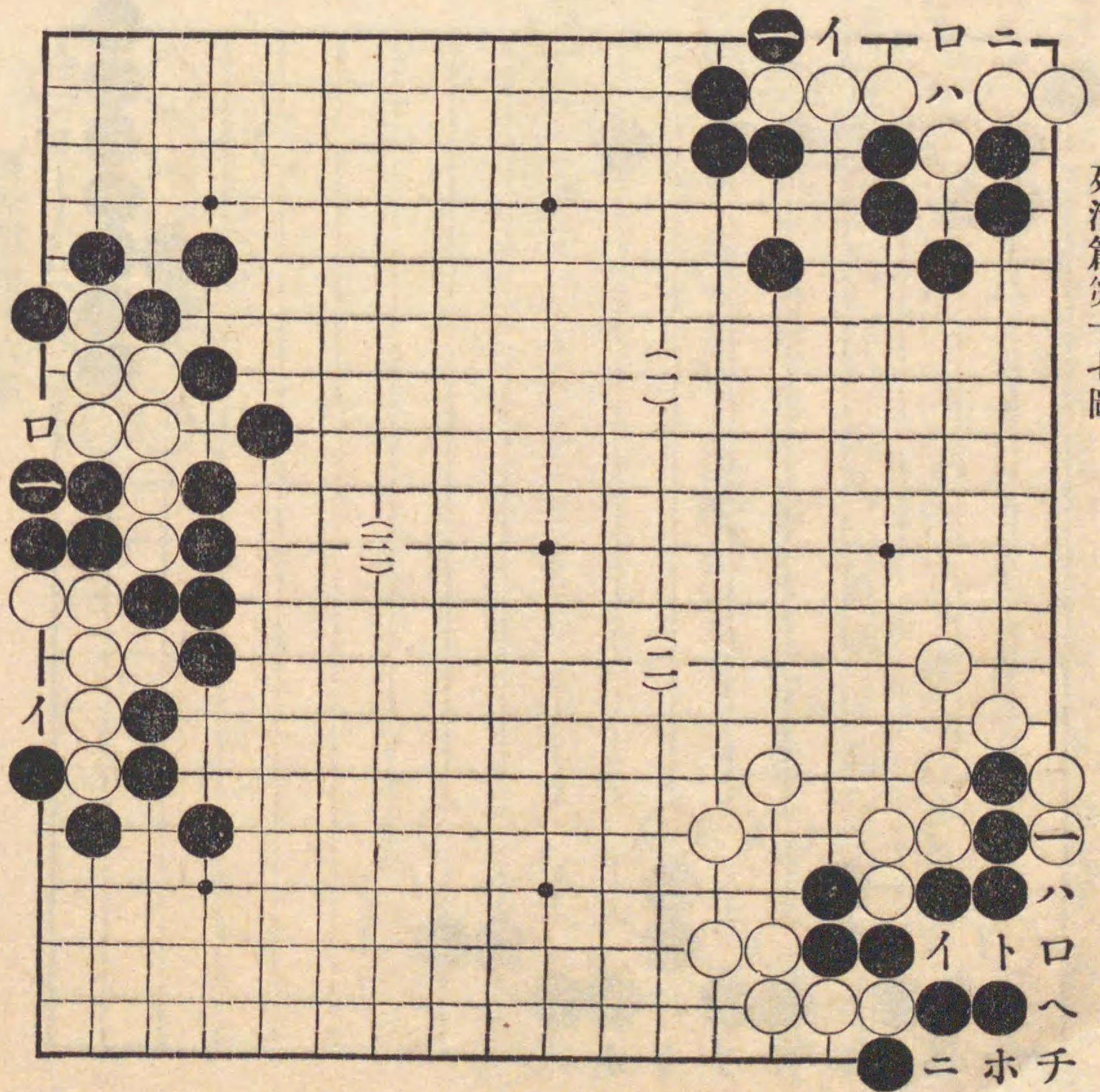
(三)、甚だ複雑した形であります。此時白先に斜走

死活篇第十六圖



し、黒死となります。此時に
若し黒イに下れば、白ロ、黒
ハ、白ニ、黒ホ、白へに打缺
いて一眼。又黒イをニに約へ
れば、白ト、黒へ、白イ、黒
チ、白ハ、黒ロ、白りに打て
三目點とします。

第十七圖、(一)、(二)三目
點に三目、四目、五目
と花六目とあるのは、前述の
通りでありまして、之等は實
戦に出来る場合が大層多いの
でありますから、茲に、普通
出来る點死の形について説明
致しますと、(一)黒先一に緯



死活篇第十七圖

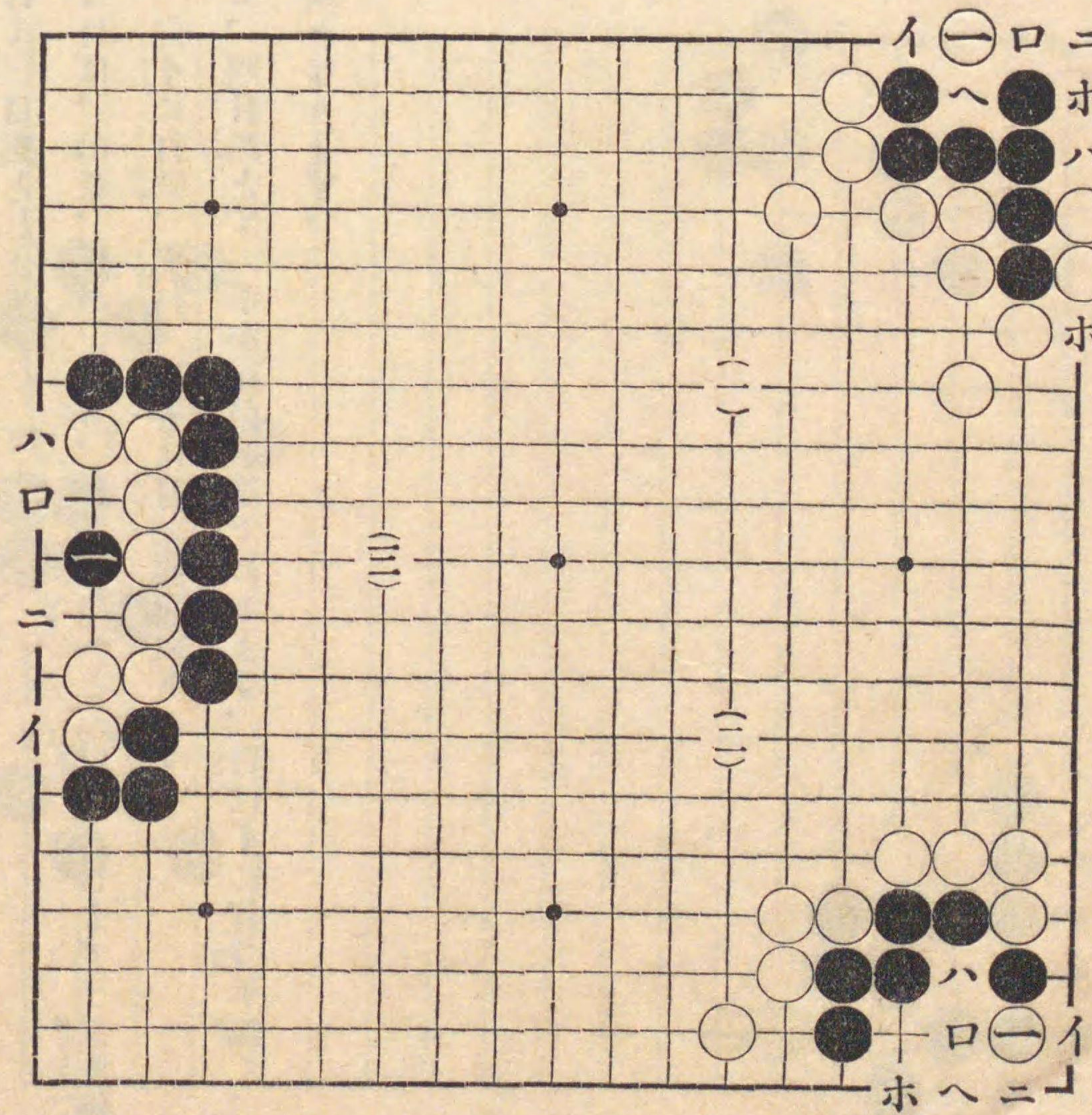
ね、白イ、黒ロ、白ハ、黒ニと打て三目點とします。

(二)は白先一と打ち、黒イなれば、白ロ、黒ハ、白ニ、黒ホ、白へと三目點とします。又此變化の中、黒イをニに粘ぎますと、白イに打缺、黒ハ、白チに打て眼を取ります。

(三)四目點 黒先一に打つて、四目點とする手が面白い手であります、白はイに打つ手無く、ロと四目を抜けば黒イに打て一眼となります。

死活篇第十八圖

第十八圖、(一)隅曲四の形 白先一と點し、黒イ、白ロ、黒ハ、白ニ、黒ホと二目を打抜けば、白は打缺いて隅を隅曲四死の形とします。此隅曲四の形は若し之れが邊或は中で出来ると持てあります。何故なれば、此形當分は持で、何れからも打つ手はありません。ありませぬが、白からは隨意此石を取りカケに行く手はありません。



其打方は、外側の駄目が盡く、ツミ終つて後、白ホに打ります。

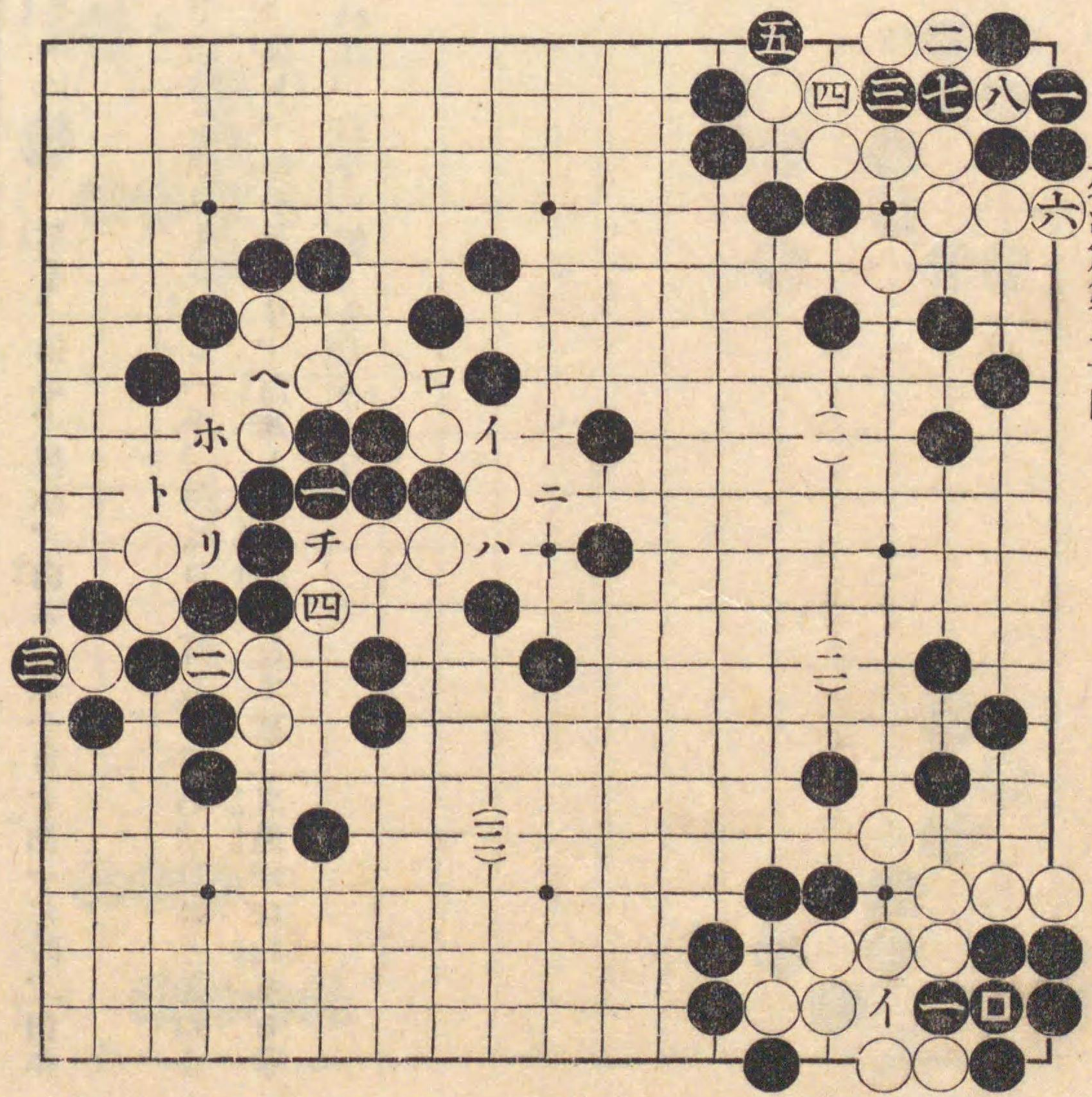
ちます、黒へに抜いた時、白猶口に打ちます、黒此石を活とするには、二に打つので、其時白先きはにホと劫を取ります。

先手で白劫取りとなる爲に、白としては他の劫抛を盡く無くして打つ事が出来ますから、結局此石は死とする事が出来るのであります。

(一)、(二)では白一と付け、黒イ、白ロ、黒ハ、白ニ、黒ホの時、白へと打て五目點とします。

(三)は、黒先一と置き、白イなれば、黒ロ、白ハ、黒ニと打つて、此形、結局五目點死となります。

死活篇第二十圖



第二十圖、(一)、(二)花六目。花六目は六目の形の目では只一つ丈此形に限つて死となります。 (一)圖で黒一に曲り、白二、黒三と打つ此一三は極めて妙着で此二着で白は六目點死となります。次に白四に當りとすれば、黒五、白六、黒七に引き、白八の二目打抜となるので、此形は(二)と同形となり、次に黒一に取返し、白イの時、黒ロに粘ぎ、花六の形として、一眼とします。

(二)大點 點は前述の通

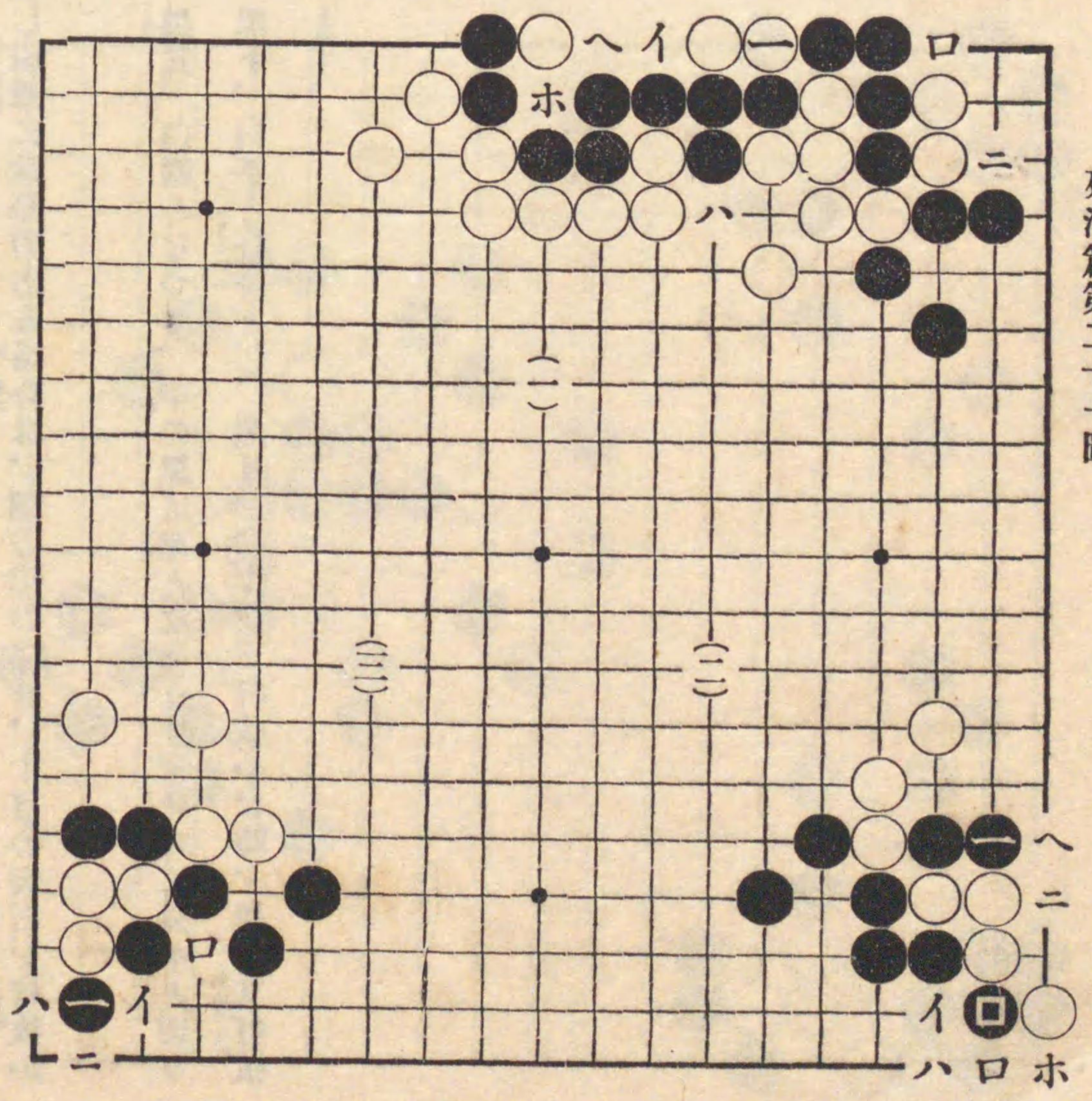
り、最大六目迄であります、若し組織に缺點のある場合は、圖の形の様に、十目の大石を打抜かれても猶死とする事が出来ます。

圖では、黒先に粘ぎ、白二、黒三、白四となつて、中の黒は死となります。此時に黒イと切り白ロ、黒ハ、白ニ、黒ホ、白ヘ、黒ト、白チと打替とし、黒リ、白十目を打抜いた時、黒は其打抜かれた跡、リに、切つて眼を取ります。

第二十一圖 攻合、石を捨て、勝とする攻合

攻合の中は、先づ犠牲子を投じ、此捨石の効力で、相手の手数を減じて勝とする形もあります。

(一)の形で隅の白二目と、外の黒大石との攻合では、一見黒の手数が長い様に見えますが、白は石を捨て、だんだん黒の手数をツメテ遂に勝とする打方があります。即、先づ白一に投じ黒イ、白猶一、黒一目を打抜いた時、白ロに當り、黒四目粘ぎ、白ハに打



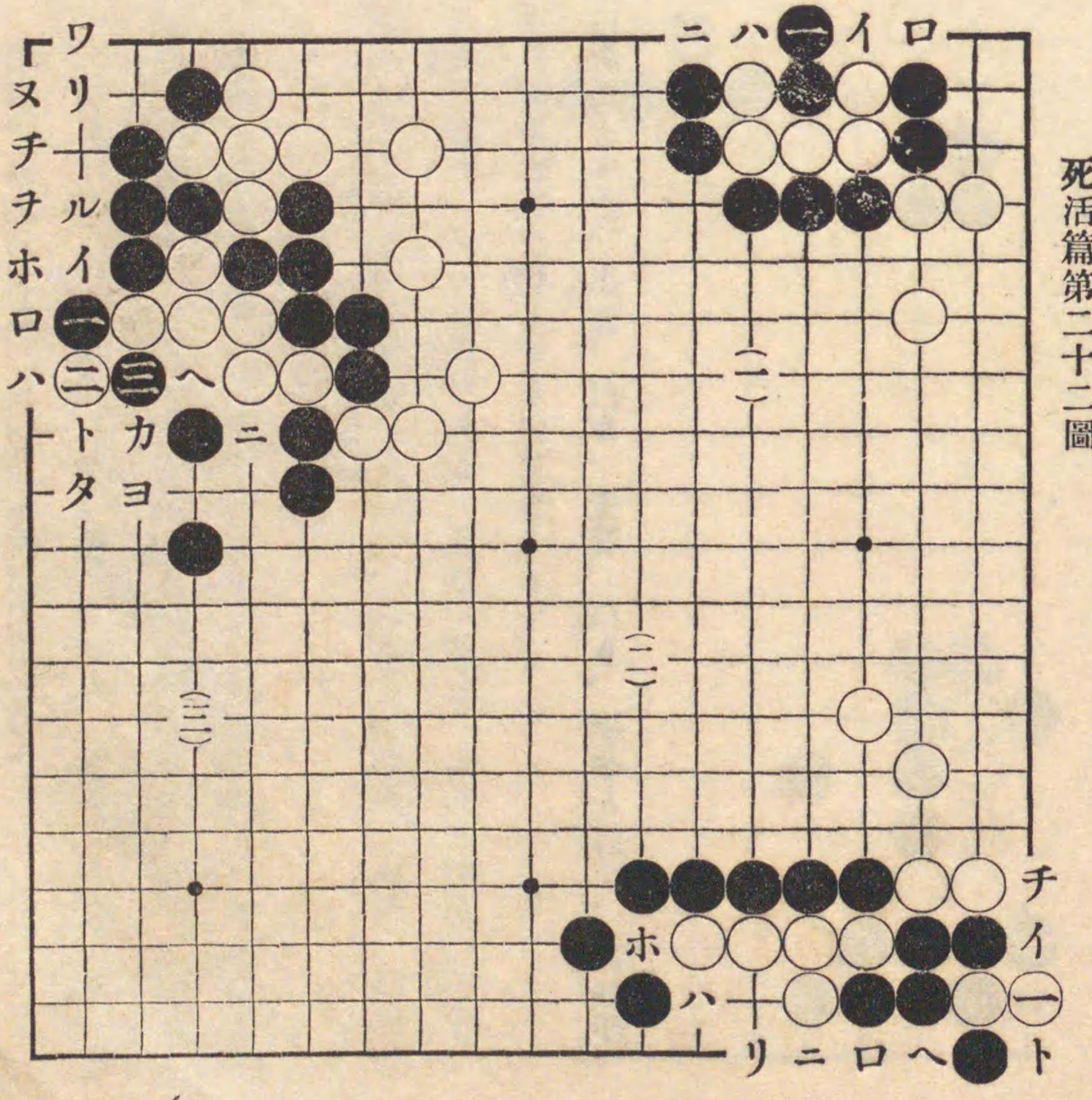
死活篇第二十一圖

ち、黒二、白ホと打つて二目を捨て、黒へ白猶ホに打込んで勝となります。

(二)、黒一に約へ、白イの時、黒はロに下り二目にして捨て、白ハ、黒ニ、白ホ、黒猶ロに打込、白ロ、黒へと粘りて攻合勝となります。

(三)、之も前と同じ方法で黒は一に二段約へ、白イ、黒ロ、白ハ、黒ニと下るので、以下の打方は、(二)と全く同じで黒勝となります。

第二十二圖、石を捨て、勝とする攻合 (一)では、黒



死活篇第二十二圖

一に下つて二目にして捨て、白イ、黒ロ、白ハ、黒ニ、と打つて勝となります。

(二)之も同じく、白は一と打ち、黒イ、白ロ、黒ハ、白ニ、黒ホ、白へ、黒トに二目打抜、白猶一に打込んで勝となります。處が同じ黒の手をツメルにも、白ニと粘ぐ手を先きに子から當りとしますと、黒トに二目打抜、白ニ、黒ホ、黒一に打てば、白イに打つて、眼有眼無となり白負となります。

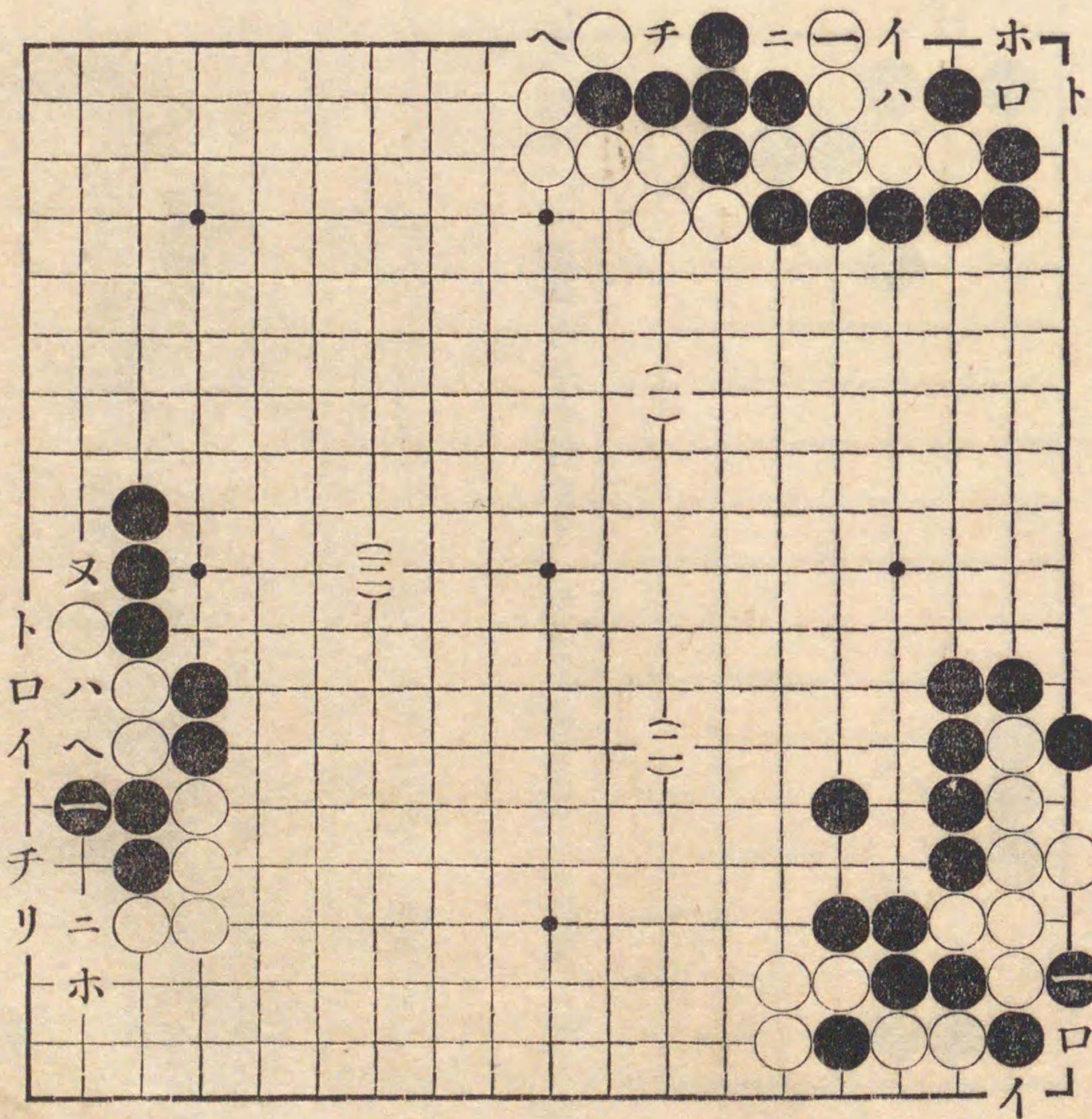
(三)黒一に縛ね、白ニ黒三と切つて攻合勝となります。此時に、白イに切れば、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホ、黒一に打込み、白ロに提、黒へ、白一に粘、黒ト、白子、黒リ、白又、黒ル、白ヲ、黒ワと打ち、何處までも、白を三手に詰め通して勝とするのであります。

又初めに、白ニと約へる手を三に曲りますと、黒二、白カ、黒ヨ、白ト、黒夕と打て、之れ亦、白は三手で、白負であります。

第二十三圖、外の石との關係で勝となる攻合

(一)白一に下り、黒イ、白ロと切り、斯うなると、只石の活カ丈で見ると白も黒も、只二づ、で此時黒先であります。然し之を攻合の手數から見ると黒三手、白四手で白勝となつて居ります。即此以下の攻方は黒からは何らからもツメル手無く、白を攻めようとするには、ホに打ち、此一目を打抜いて後に、攻める外は無いのであります。次に白へに粘ぎ、黒ト、白子と打つて勝

死活篇第二十三圖



となります。

(二) 之も前と同様で、黒先一に縛ね、白イ、黒ロに粘いで勝となります。

(三) 之は形は簡單でありますが、割合に變化多く、攻合としては六ヶ敷い方でありませう。扱此時黒先何處に打てば勝となるかと云ふと、黒先づ一に曲ります、白イに飛べば、次に黒ロの附が妙手で、之で黒勝となります。白ハに粘げば、黒ニ、白ホ、黒へ、白ト、黒チと打つて勝。

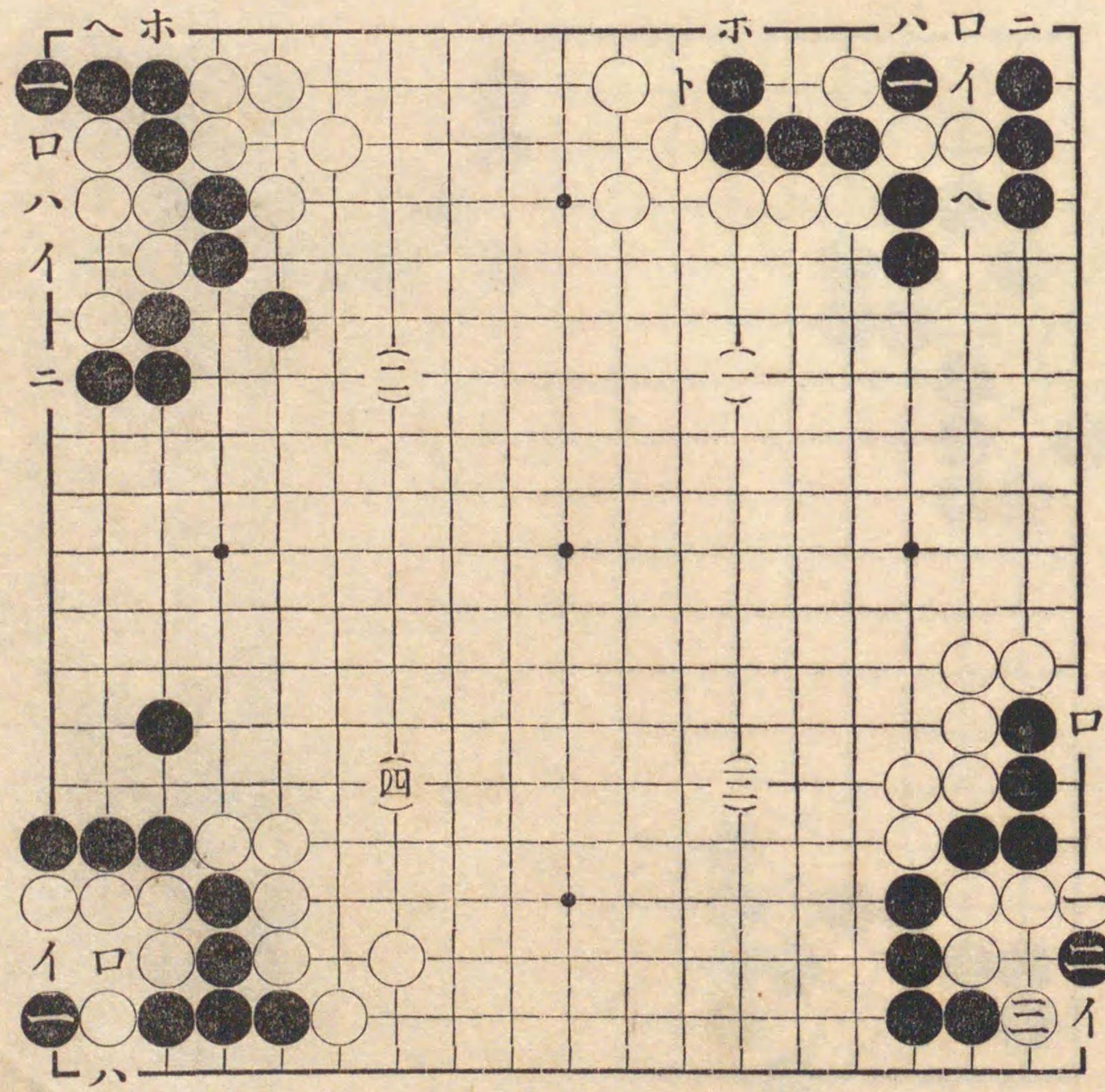
又初めに白イに飛ぶ手をへに打ちますと、黒イ、白ハ、黒ニ、白チ、黒リ、白ホ、黒又と打つて勝となります。

處が前の變化で、黒一、白イとなつた時に、黒ロの手を打たず、只二と縛ますと、白チに置く筋があつて、却て黒負となります。

第二十四圖、變つた攻合の

形 (一) 黒先一に切つて一目を捨て、白イ、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホ、黒へと打つて勝となります。處が此形、黒は普通の様にイに打ち、白一、黒へと攻めると、白にトに打たれて、黒敗となります。(二) 黒先一と下る手が、善い手で、之で黒勝となります。次に白イに打てば、黒ロ、白ハ、黒ニの下り。又白イの手をホの方から攻めれば、黒ロ、白へ、黒ハとなつて勝となります。

死活篇第二十四圖



(三)、普通の場合では、白一手、黒三手で、白敗となりますが、此形では、白は隅に關係をツケル手があつて勝となります。即、白一に下り、黒二、白三と縛ね、黒イ、白ロで勝となります。處が黒若し一の手をイに當り、白ロ、黒ハに當りとなりますと、白一に提り、眼有眼無となつて、黒敗となります。

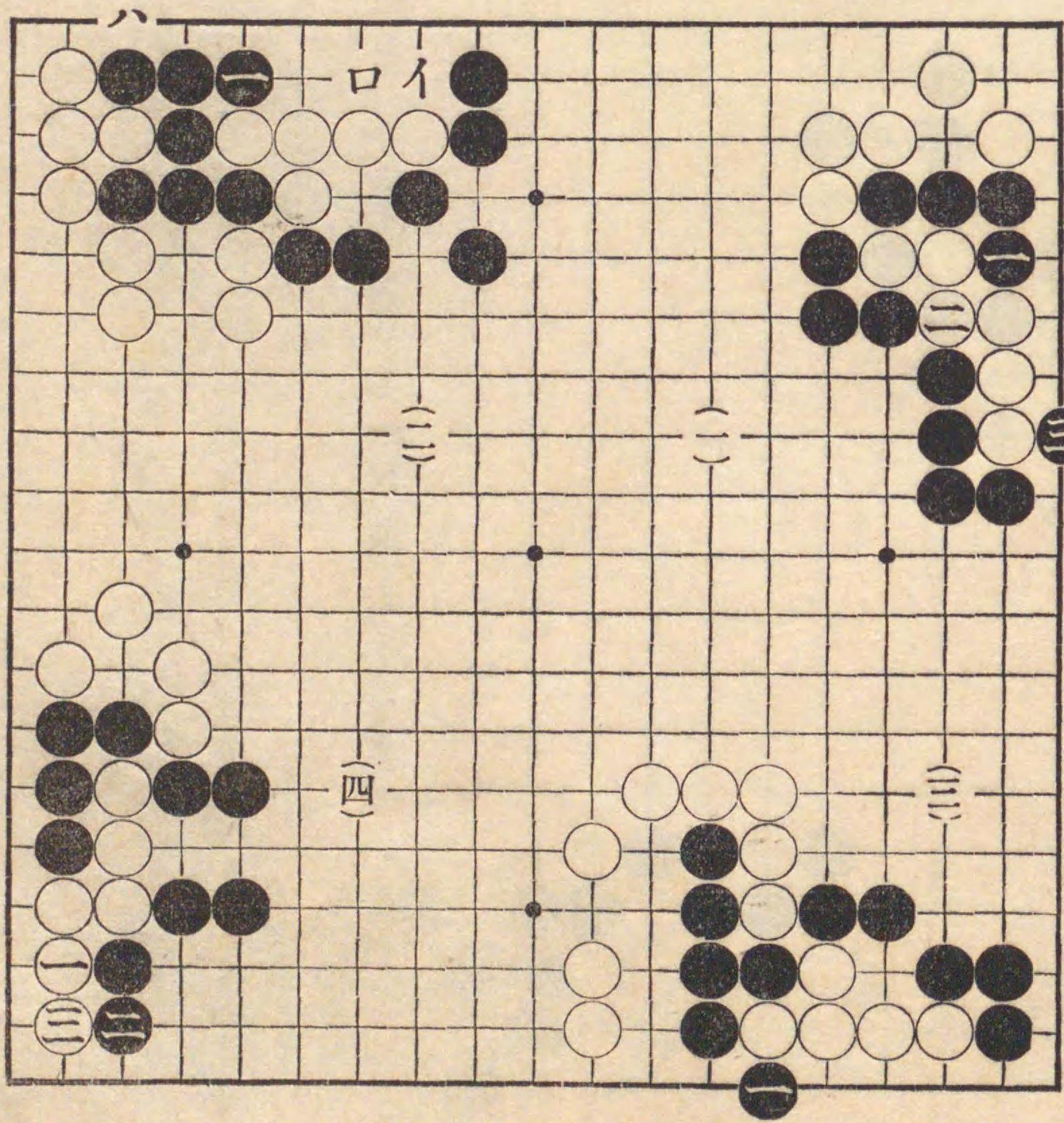
第二十五圖、正しい攻合の形

(一)實戦では、正しい攻方によりて勝とする場合の多いのは云ふまでもないのであります、斯かる攻合では第一に手数と、第二には變化と此二つを能く考へて後着手するのが大切であります。

(一)では、黒一に當り、白二、黒三と打つて勝となるのであります。で此形では、黒一白二との交換が大切で此交換を打たなければ如何攻めても、結局黒敗となります。

(二)、黒先一の手が、此形

死活篇第二十五圖



での肝要の點で斯う打ちますと、黒は一手増し、且つ白を一手減じ、合して二手の差になりて、遂に黒勝となるのであります。

處が黒一を打たず、口の方から攻めますと、白一、黒口、白ハとなつて黒敗となります。

(三)、此形は、只手数の多少によつて、決する攻合の形であります。此時に黒先とすると、黒は一に打ち、手数は五手、四手となりて、黒勝となります。

(四)、白先に曲り、黒二、白三と白は手数を延ばして簡単に勝となります。

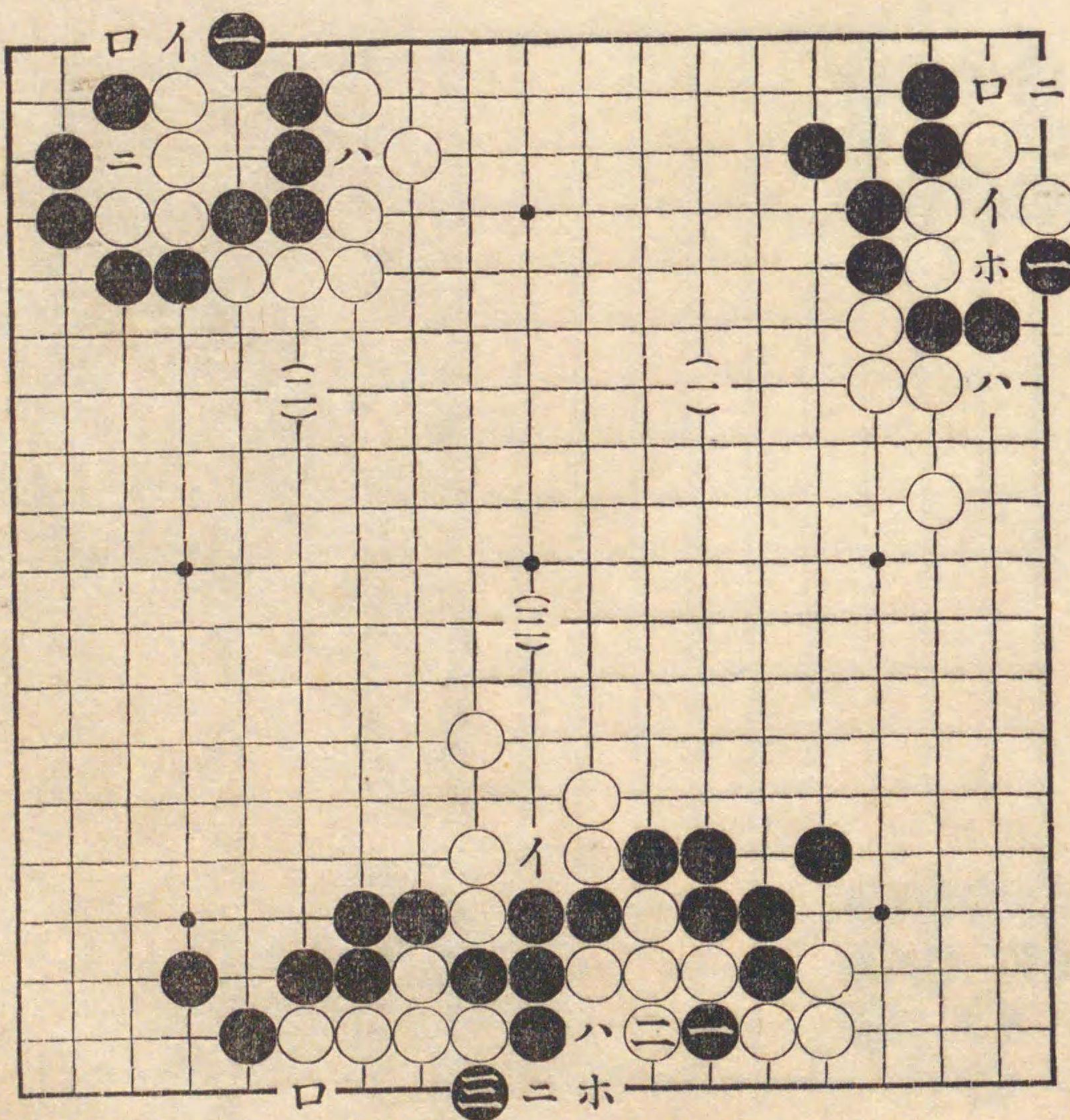
第二十六圖、双方眼無の攻

合 攻合では、一眼を持つて居る石と、一眼も無い石。又は大點の石と、小點の石とでは、只其手数の多少ばかりによらず、其石の共通の活力の有無又は多少により、大いに手数に相違のあるものであります。

此處に其形の違ひを實例により區別して見ますと、先づ双方眼の無い石の攻合では勿論手数の多少によつて勝敗は決するのであります。

(一)は黒先に尖附、白イ

死活篇第二十六圖



黒〇、白ハ、黒ニと打つて、黒勝となります。

此形では、初め黒一に尖附ける手が良い手で、之で黒勝となりますが、此手を若しホに打ちますと、白イ、黒〇、白ハと打つて、黒敗となります。

(二)、双方眼無の石で、形も亦似て居ります、此時に黒先なれば、黒一に尖み、白イ、黒〇、白ハ、黒ニと打つて黒勝となります。

(三)、黒先一と切を入れ、白二の時、黒三と縛ねるのが、好い手順であります、次に白イにツメれば、黒〇、白ハ、黒ニとなつて、黒に一の切りがありますから、白からはホとツメル手無く、黒勝となります。

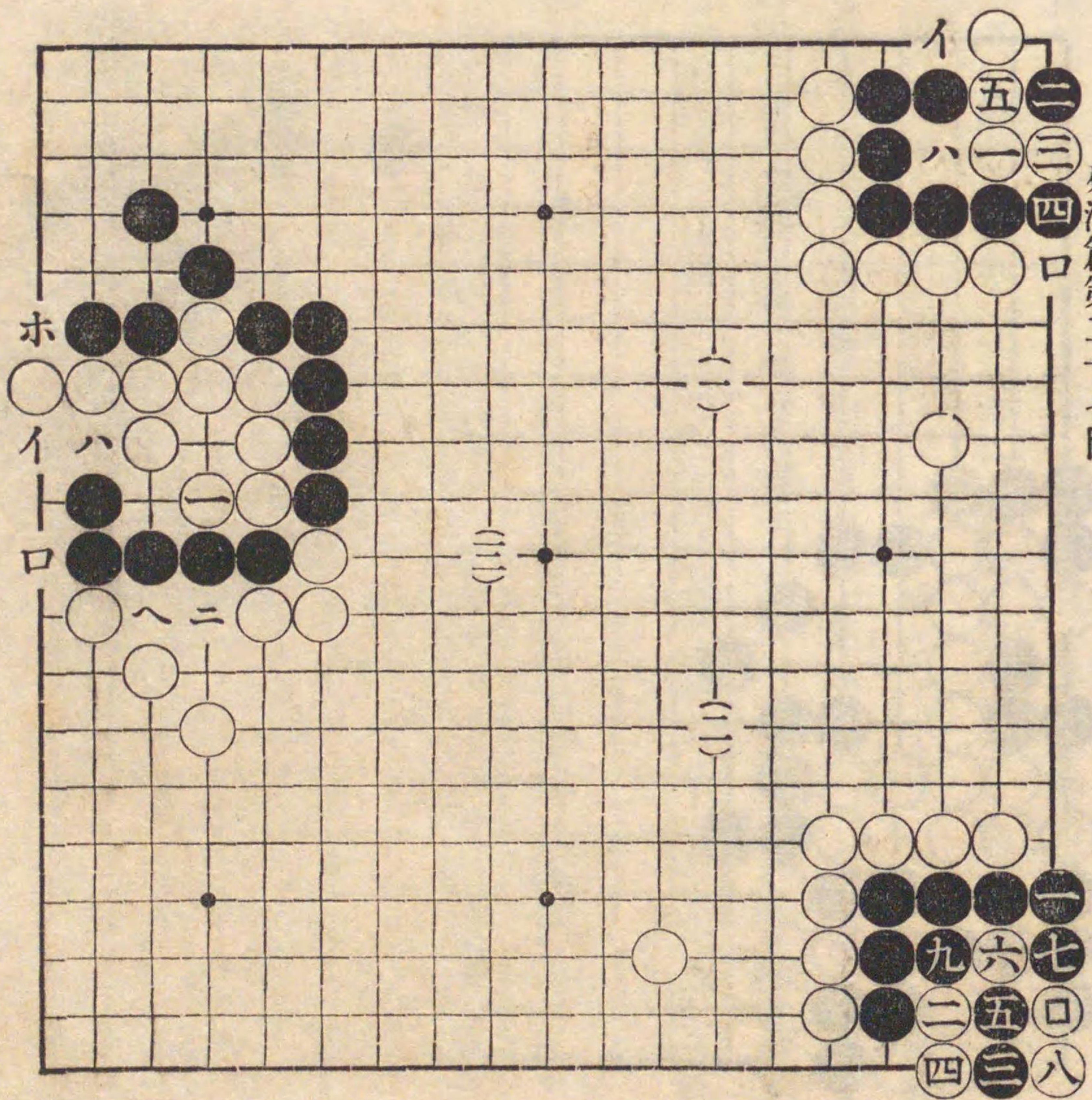
第二十七圖、眼有眼無の攻合

(一)眼有眼無の攻合では、前に述べた通り、若し白黒共通のダメのある場合は、眼のある石に有利となるもので、其實例を擧げて見ますと

(一)、白一に付け、黒二、白三、黒四、白五と打ちます、次に黒イにツメ、白〇となつて、其形を見ますと、手数は白、黒二手で、黒先手でありますが、只ハは共通の活力である爲に、一眼を有する白の勝となつて居ります。

(二)、隅の九目で、白〇に

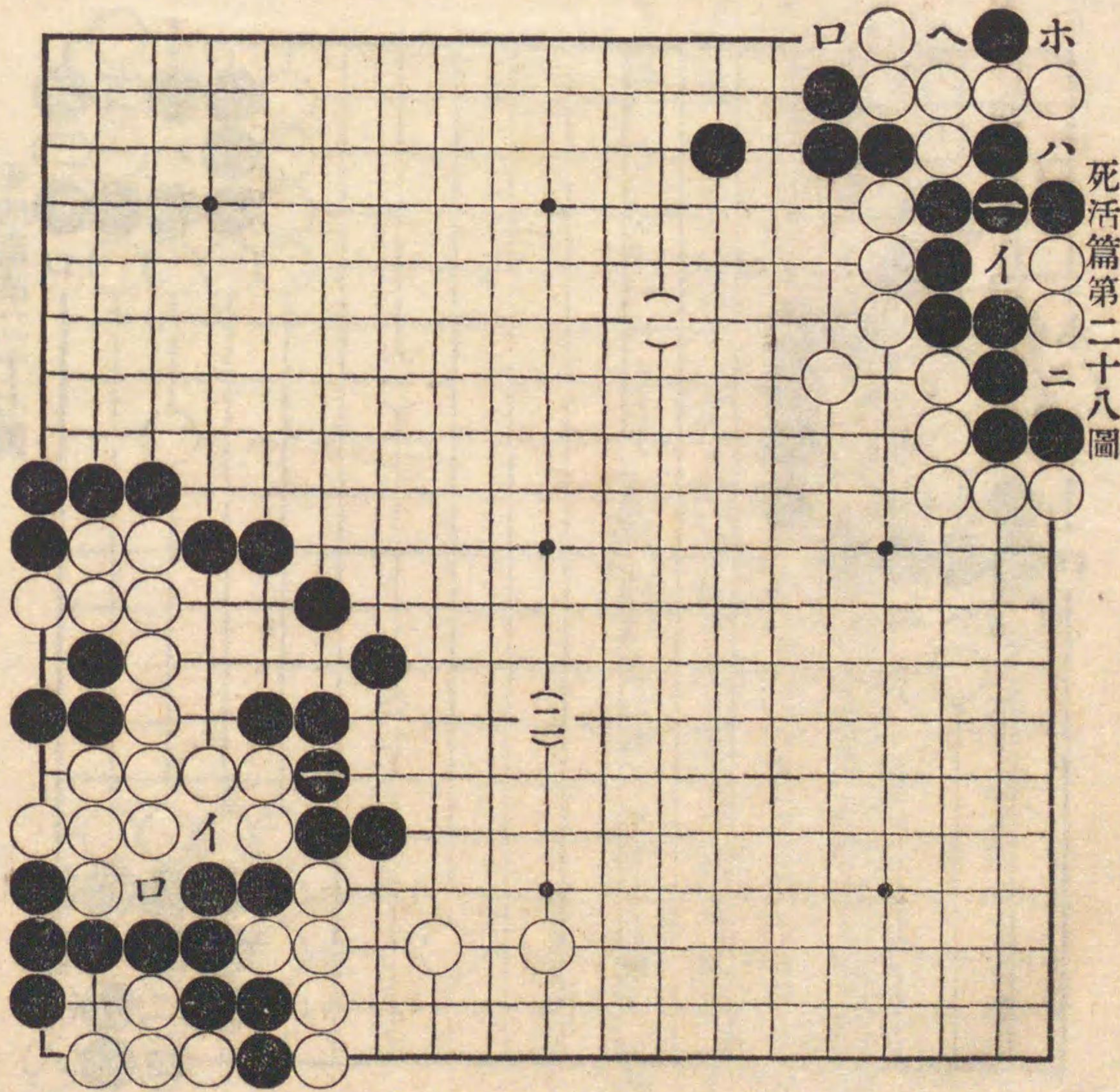
死活篇第二十七圖



打つた形では、黒は(一)の様に打たず、一に下る手が、好い手てあります、白二の時、黒三、白四、黒五、白六、黒七、白八と二手を打抜いた時、黒九に當り、隅の白を提て活となります。

(三)、白先一に一眼を持ち、黒イ、白ロ、黒ハ、白ニ、黒ホ、白へと打ち、眼有眼無し、白勝となります。

第二十八圖、大點小點の攻合、大點小點は、矢張り眼有眼無と同様、大點の方が有利である上に、大きい點とな



死活篇第二十八圖

ると手數も相當長くなります。故に五目點の石なぞと攻合となり、且つ共通の活力もありますと、手數は大層長い様に見へても、小さい點の方が敗となるのは、實戦に屢々見受ける形であります。(一)、黒先一に打つて、白の一眼に對する黒を三目點とすれば、勝となり、此時に、白に打ちますと、黒ロとツメ、白ハなれば、黒ニに三目提、白點すれば、黒ホ、白へ、黒猶ホと打つて勝。又白ハにツメル手を手抜すれば、黒も其儘で勝となつて居りますが、若し必要上之を打抜かうとする場合には、黒先づホと打ち、次に黒、(白からは攻める手はありません)ニに打抜、白點すれば、黒ハと打つて勝となります。

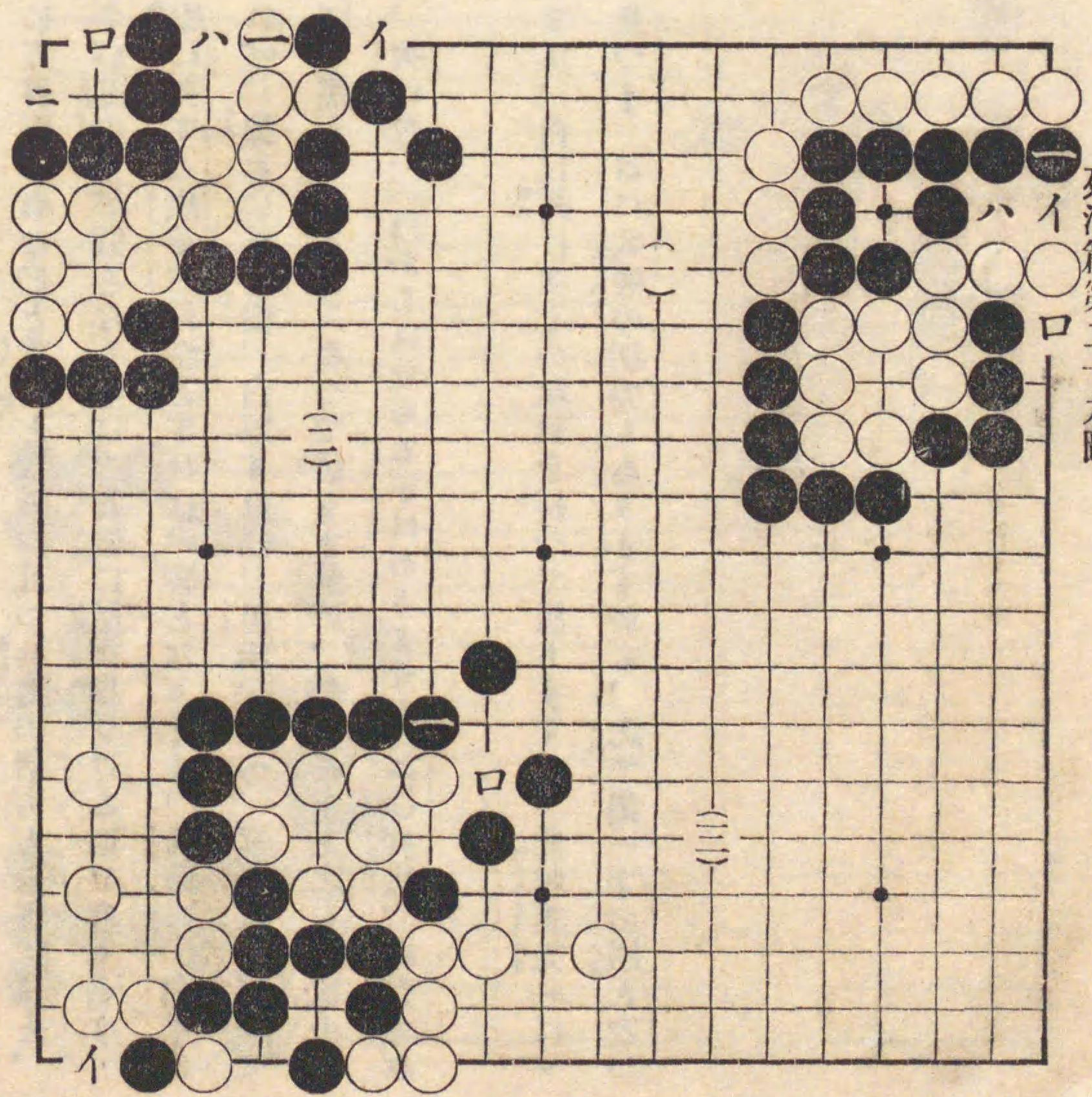
(二)、圖の様な大點小點の攻合では、白は外に多くの駄目を持つて居りますが、此時黒先一にツメますと、中は五目點と四目點、且つイ、ロに共通の活力もありますから、之で黒一手の勝となつて居ります。

第二十九圖、持(セキ)

(一) 双方一眼を有する形、又は双方同じ大きさの點を持つて居る形、或は双方眼無の形で之に共通の活力のある石では持(セキ)と云ひ、何れからも取る手の無い石)となる場合も多いのであります。

(一)では、黒一に打つて、持となり、白よりイにツメテも、黒口に打つて、次のハは、何れからでも、打つた方が、却て打抜かれてしまひます。

(二)、白先一と約へ、黒イ



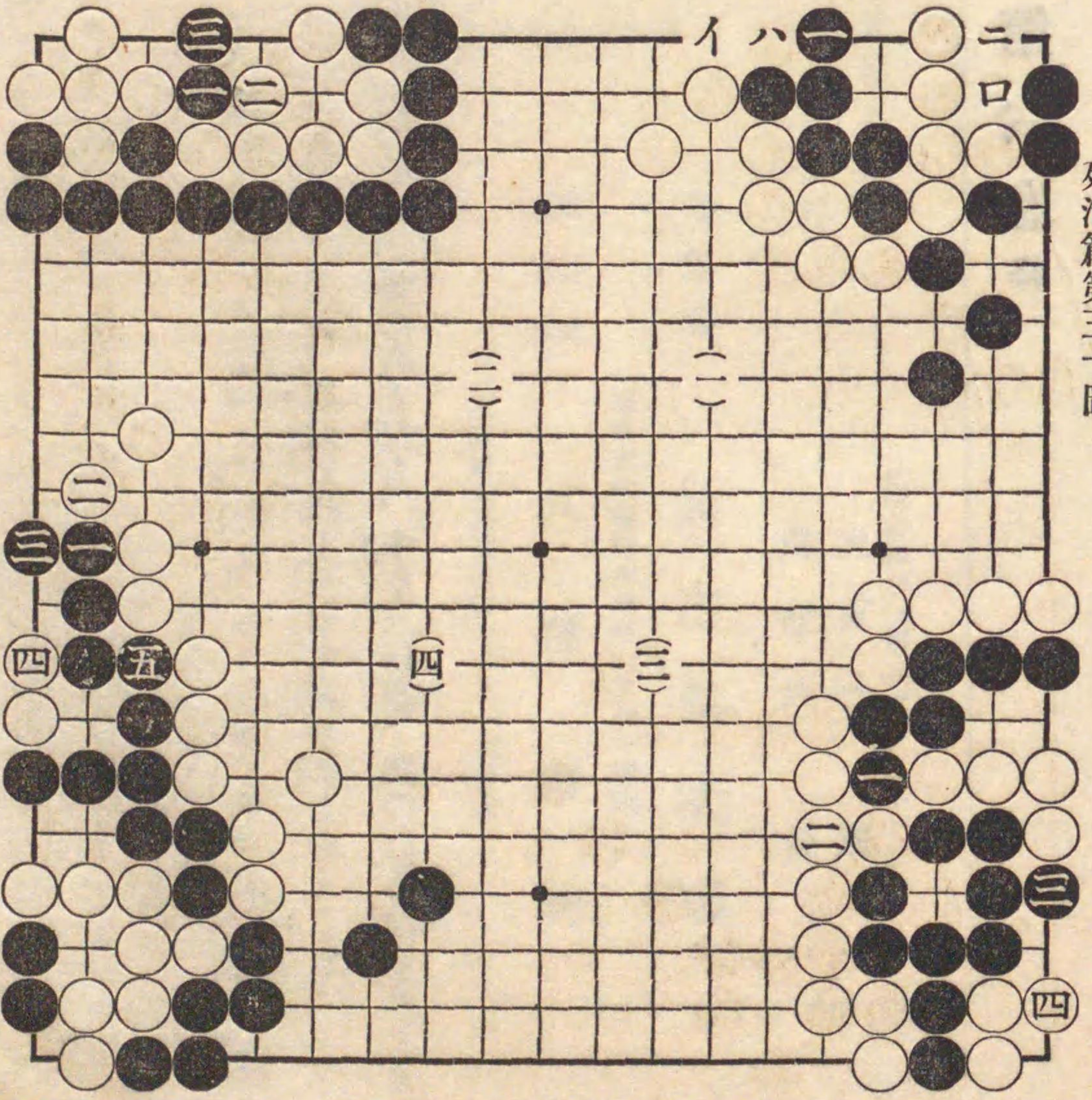
死活篇第二十九圖

白口、黒ハなれば、白ニと打つて持となり、

(二)、双方同じく一眼を有する形でも、圖の様に黒、白石が密接し、其間一つも共通の活力の無い形では、之は攻合となつて、手数の多少により何れかに勝敗を決するのてあります。圖で此時黒先なれば、一にツメ、白イ、黒口と打つて黒勝となります。

第三十圖、持

(一) 黒先一に打ち、白次にイに打てば黒口、白ハ、黒ニと打つて持となります。



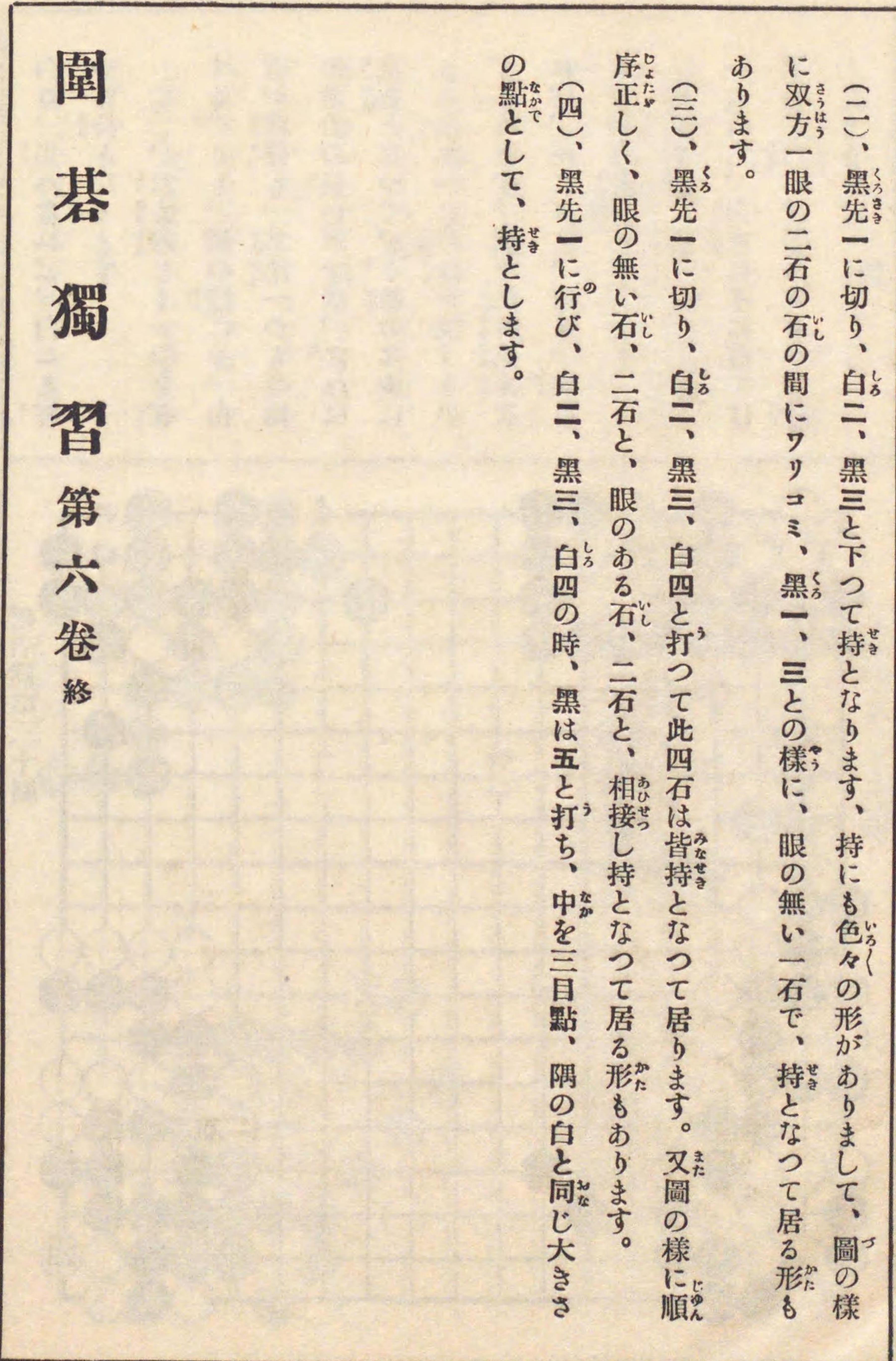
死活篇第三十圖

(二二)、黒先一に切り、白二、黒三と下つて持となり、持にも色々な形がありまして、圖の様に双方一眼の二石の石の間にワリコミ、黒一、三との様に、眼の無い一石で、持となつて居る形もありません。

(二三)、黒先一に切り、白二、黒三、白四と打つて此四石は皆持となつて居ります。又圖の様に順序正しく、眼の無い石、二石と、眼のある石、二石と、相接し持となつて居る形もあります。

(四)、黒先一に行び、白二、黒三、白四の時、黒は五と打ち、中を三目點、隅の白と同じ大きさの點として、持とします。

圍碁獨習第六卷終



昭和七年七月廿五日印刷
昭和七年八月一日發行

(圍碁獨習 第六卷)
定價 一圓
郵稅 六錢

著 所
作 權
有

著 者 鈴木爲次郎

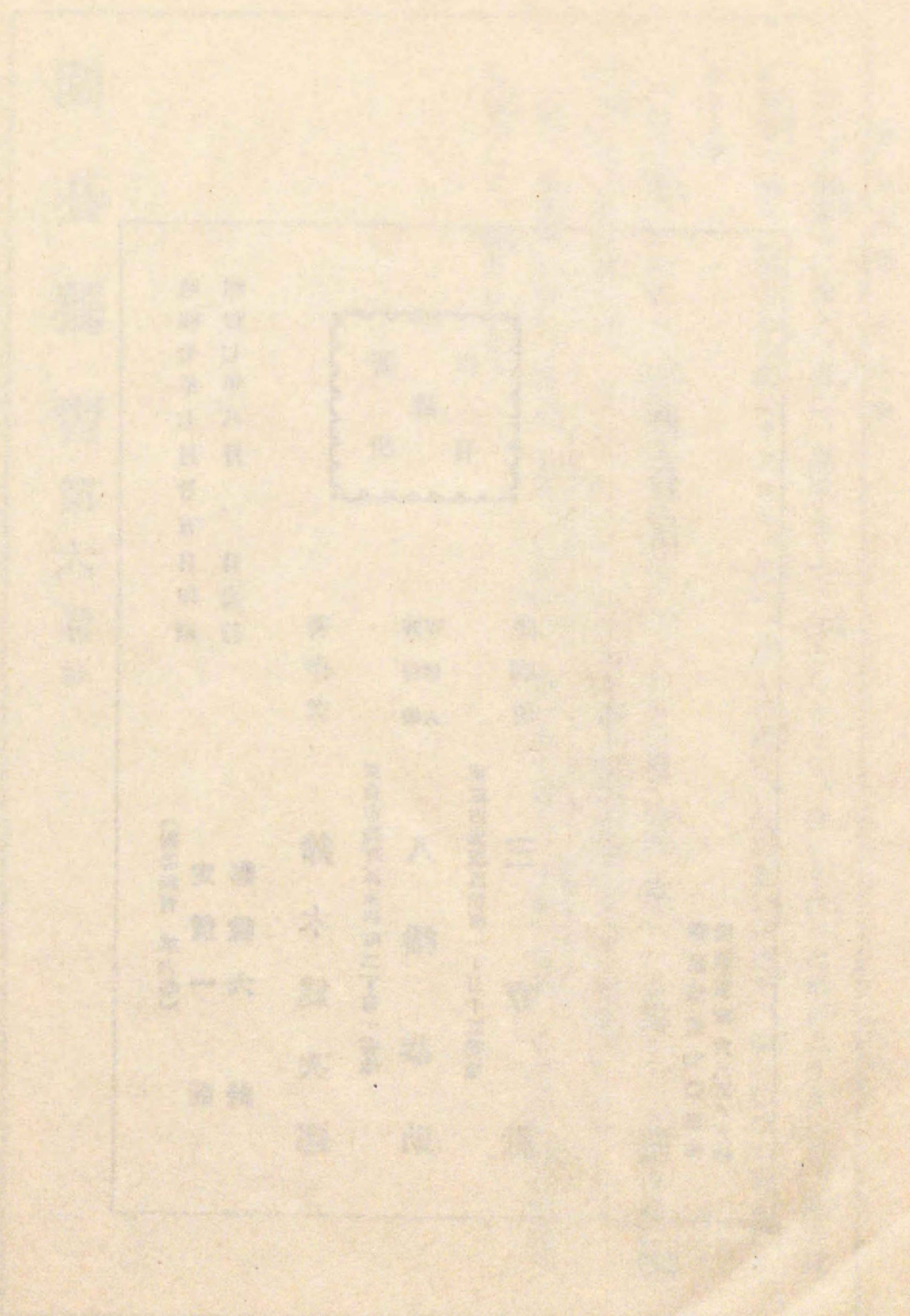
印 發 行 人 兼 八幡恭助

印 刷 所 三 京 社

東京市麴町區永田町二丁目一番地

發 行 所 日 本 棋 院

電話 銀座 七〇五番
振替 東京 六八五八六番



Vertical text on the left side of the stamp area, possibly a title or reference number.

Vertical text on the left side of the stamp area, possibly a title or reference number.



Vertical text on the right side of the stamp area, possibly a title or reference number.

Vertical text on the left side of the stamp area, possibly a title or reference number.

Vertical text on the right side of the stamp area, possibly a title or reference number.

Vertical text on the right side of the stamp area, possibly a title or reference number.

